「舞 鶴 市 の 神 様 た ち」1/2　山本勝眞著

天香山命と彌彦神社 …… 1
日本の海の神様とはどんな神様？ …… 2
大和神祖（かむろぎ）の謎 …… 5
出雲の中の高天原（日向）神 …… 8
出雲風土記にみる神話 …… 10
物部神社と宇摩志麻遅（うましまち）尊（のみこと）のエピソード …… 13
熊野大社と素戔之（すさのおの）男尊（おのみこと）のおはなし …… 15
白髭神社が語るもの …… 18
春日三神と出雲とのかかわり …… 22
舞鶴市の神様たち …… 26
舞鶴市の神様たち-２（舞鶴市今田倭文神社） …… 29
舞鶴の神様達（式内高田神社） …… 32
舞鶴の神様達（式内日原神社） …… 35
舞鶴の神様達（式内三宅神社） …… 38
舞鶴の神様たち（神崎「湊十二社」） …… 41
出雲の神々に思う …… 44
舞鶴の神様たち（天久神社） …… 47
舞鶴の神様たち（猪蔵神社） …… 50
伊勢皇大神宮参拝参詣 …… 53
舞鶴の神様たち（田口神社） …… 56
舞鶴の神様たち（泉源寺の熊野神社） …… 60
舞鶴の神様たち（武内伊智布西神社） …… 64
舞鶴の神様たち（鵜葺草葺不合命） …… 68
舞鶴の神様たち（笠水神社） …… 72
舞鶴の神様たち（金毘羅大権現） …… 75
饒速日尊という神様 …… 79
舞鶴の神様たち（白絲浜神社） …… 84
舞鶴の神様たち（朝禰神社） …… 88
舞鶴市の神様たち（鳴生神社） …… 92
神祖熊野大神奇御食野尊という神様 …… 97
舞鶴の神様たち（高倉神社） …… 102
舞鶴の神様たち（大森神社） …… 106
舞鶴の神様たち（山崎神社） …… 110
資料：「舞鶴の神様たち」案内図（下線付き箇所の案内になっています。） …… 114

本書は、山本勝眞氏が当協会の会報に寄稿された「舞鶴市の神様たち」を、山本氏のご厚意により発行したものです。

平成１９年８月の「天香山命と彌彦神社」を皮切りに舞鶴市内の神社が紹介されています。

筆者：山本勝眞氏略歴

昭和２２年５月生　島根県
昭和４１年４月　海上保安庁入庁
昭和５０年４月　海上保安学校教官
平成１０年４月　名古屋海上保安部巡視船みずほ機関長
平成１２年４月　第六管区海上保安本部船舶技術部長
平成１５年４月　舞鶴海上保安部巡視船わかさ業務管理官
平成１９年４月　海上保安庁退職
平成１９年４月　社団法人日本海海難防止協会舞鶴事務所長
平成２０年１２月　〃　退職
平成３０年４月　瑞宝小綬章　受章

本書記載の内容について

「神様の話については、考古学の研究とともに諸説あるようですが、筆者の見方は、「祖神（かむろぎ）は出雲系にあり」というのが基礎となっております。

読んでいただく方の中には、当然異論をお持ちの方もあると思いますが、あくまで、筆者の持論をもとに書き綴っております。

その点予めお断りいたします。」

【天香山命と彌彦神社】（会報 第91号 平成19年８月発行）

これまでにも、新潟港には仕事で何回か入港したことがありますが、この４月から舞鶴事務所でお世話になることになり、協会本部のある新潟とはこれからもまたご縁は続くことになりました。ところで新潟といえば、どんなことをイメージされますか？佐渡島、佐渡おけさ、越乃寒梅、河合継之助や山本五十六・・・・・？

私が新潟と聞いて真っ先に浮かぶのは弥彦山（彌彦神社）です。

残念ながらまだ行ったことはありませんが、西蒲原郡弥彦村というところにあるのだそうですね。

私は出身が島根県です。

島根県には有名な出雲大社があります。その関係かどうかはわかりませんが、神楽が大変盛んな土地柄です。神楽のほうからいいますと、出雲部と石見部とにわかれていて、出雲神楽と石見神楽にジャンルが分かれていますが、いずれの場合をとっても、出し物というかテーマは同じようなもので、その昔の神話が元になっています。岩戸神話や、素盞之男命や大国主命を称えたものなどなど・・・。そういった神楽の町で育った私は、わかいころから日本の神様に大変興味を持っていました。

そこで弥彦山ですが、弥彦山の麓にあるのが彌彦神社。この神社を含めて弥彦山全体を神域とする越後国一ノ宮となっています。

彌彦神社

内容はちょっと忘れたのですが、昔、弥彦山にまつわる童話を「日本昔話」で聞いたことがありますが、実はこの神社には、越後開拓の祖神、伊夜彦神（いよひこのかみ）が祀られております。

この方は、天香山命（あめのかやまのみこと）とか大屋彦命（おおやひこのみこと）などとも呼ばれている偉い神様（私は、天香山命とお呼びしています）でありまして、出雲系の神様の御一人であります。素盞之男命（すさのおのみこと）（大蛇退治の神様としてご存知と思います）のお孫さんにあたる神様といわれています。

おじい様の素盞之男命には、奥様（・・とお呼びするのがいいのか悪いのか？）櫛稲田媛命（くしいなだひめのみこと）との間に８人の御子神様がいらっしゃいまして、その５番目の御子神様饒速日命（にぎはやひのみこと）のそのまた２番目の御子神様なのです。（ややこしくて申し訳ありません）

天香山命は、越後開拓の祖、越後国一ノ宮の神様ですから、もちろんそれだけで偉いのですが、お父様の饒速日命は、おじい様の素盞之男命のご命により、その当時の倭（奈良地方）をご支配された大王、すなわち天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊（あまてるくにてるひこあめのほあかりくしたまにぎはやひのみこと）、そして兄君の宇麻志摩治命（うましまちのみこと）は、神武天皇御東遷の時期、父君の後を引き継いで倭を支配しておられた方、また妹君の伊須気余理媛命（いすきよりひめのみこと）は、神武天皇のお妃になられた方です。

そのように偉いだけでなく、大変血統の尊いお方でもあるのです。

そういった由緒ある彌彦神社。ぜひ一度訪れてみたいと思っています。

【日本の海の神様とはどんな神様？】

（会報 第 92 号 平成 19 年 12 月発行）

前回の会報でも申しましたように、私の考古（学ではありません）は、「祖神（かむろぎ）は出雲系にあり」を基礎にしたものですから、読んで頂く方の中には異論をお持ちの方もあると思われますが、そこは気にせず続けさせていただきます。

近年は、どこの神社の神様も、庶民の方々から、やれ家内安全だの、やれ商売繁盛だのはたまた海上安全、交通安全、合格成就等々諸々の願をかけられて大変お忙しくあらせられますが、実は、それぞれ神様には得意の分野があるのであります。もちろんかなり万能型の神様もいらっしゃいますが‥‥‥‥‥‥。

今回は、海事に関係する者の一人として、海神様（うみのかみさま）について考察してみたいと思います。

いうまでもなく日本は四方を海に囲まれています。今でこそ私達は、発達した交通網を利用して自由に陸上を移動し、山岳地帯でさえも比較的楽に通れるようになりました。

しかし、大昔はどうだったでしょう。おそらく獣道ほどのもので、わずかな距離の範囲を行き来できるぐらいだったのではないでしょうか。つまり陸上では、荷物の運搬はもとより、人の行き来さえも容易ではなかったと思われるのです。

そう考えると必然的に、古代の人々の交通の手段は海（あるいは川）を利用していたとなるわけですね。もちろん、いまさらこんなことを薄学の私がいうまでもなく、古代遺物の中から船の実物や、模型（埴輪）などが発見されることからも明らかなわけですが。

ところで、海を利用する人々にとって海上模様の良し悪しは、ときに命にかかわる重要な問題です。今日、気象予測に関する技術が発達して、海上模様の予測はかなり正確にわかるようになったわけですが、それができなかった古代、安寧な海上交通は、ひたすら海の神様のご機嫌に頼るほかはなかったことでしょう。ですから、古来、海を活動の舞台とする人々にとって、海上平穏（安全）の祈願は大変重要なことがらだった。だからこそ、海神様を祀る神社が多く存在することは、容易にうなずけることなのです。

さて海の神様ですが、その代表格は「住吉（すみよっさん）さん」で知られる住吉大社の神様でしょうか。ご祭神は、「底筒男尊（そこつつのおのみこと）・中筒男尊（なかつつおのみこと）・表筒男尊（うわつつおのみこと）」で、この神々は、神宮皇后大陸遠征のみぎり、海上渡航に大いに活躍したゆかりから住吉大社に祀られ、海の守り神として崇拝されるようになったと伝えられています。

住吉大社

たぶん、もとは現在の福岡県あたりで、漁業など海を生業とされた豪族の方で、船や水夫（かこ）の調達･動員ができ、海上における観天望気に長けているなど、海を知り尽くした方々だったのではないでしょうか。

次に、宗像三神（むなかたさんじん）。これは福岡県の沖ノ島、大島、宗像のそれぞれの地に鎮座されています、多紀里（たぎり）、多岐都（たぎつ）、狭依（さより）の三女神です。地図をご覧になればおわかりのように、祀ってある場所は、いかにも大陸からの海上ルートとおもわれる所で、しかも難所たる玄界灘にあることから、古来より、海人が航海の安全と繁栄を祈願して崇拝してきたことは十分理解できるのです。この方々は巫女（みこ）のような方々で、占いなどによる海上模様の予測が上手だったのでしょう。

安芸の宮島に厳島神社というのがありますね。三女神のうち、一番下の狭依毘売尊（さよりひめのみこと）は、別に「市杵毘売尊（いちきひめのみこと）」とももうされ、厳島神社の神様としても祀られておられます。

厳島神社

そうしたことから、厳島神社も海上安全祈願の神様としては十分お力を発揮される神様ではないかと思われます。

漁業の盛んなところで崇拝されている神様は恵毘須（えびす）様です。この神様は、大阪今宮恵比須神社や西宮恵比須神

社（関西では「えべっさん」の愛称）のご祭神で、商売繁盛の神様として有名ですが、実は海に大変関係のある神様です。山陰の島根半島にある美保ノ関の美保神社に、漁業の神様として祀られておられます。

この神様は、先に述べた三女神の一番上の多紀里毘売尊（たきりひめのみこと）と大国主尊（おおくにぬしみこと）との間にできたお子神様で、伊毘志都幣尊（いびしつぬのみこと）（事代主尊（ことしろぬしのみこと）ともいわれていますね）とももうされます。大国主尊が亡くなられた後、出雲国を受継いで支配するため、母神様の多紀里毘売尊とともに出雲の国に入られました。漁業の神様として有名、ということはつまり海の守り神ですよね。

釣竿を片手に、鯛を小脇に抱えた神様を見かけられたことがあると思いますが、あの方がそうです。七福神のなかにおられますよね。

金比羅宮

四国の金比羅様も有名です。ここの神様は「大物主尊（おおものぬしのみこと）」です。（大物主尊は、素盞嗚尊（すさのおのみこと）の御子神の饒速日尊（にぎはやひのみこと）であるとか大国主尊（実は御養子？）であるとかいわれていますが、私は、饒速日尊説を支持しています。）

この神様は、農業殖産、漁業・航海、医薬、技芸など広汎な神徳を持つ、いわゆる万能型の神様で、特に海上関係者に限って崇拝を受けておられるわけではありませんが、境内に船舶や艦船の掲額（絵馬）が多く見られるところから、海の神様としての一面も強いようです。何しろ、この方の諡号（おくりな）は、「天照国照彦天火明櫛御玉饒速日尊（あまてるくにてるひこあめのほあかりくしみかたまにぎはやひのみこと）」（この神様については前号でも触れさせていただきました）と申され、天照皇大神（あまてらすおおみかみ）よりも立派なお名前ですから、相当偉い神様のようで、どんなことでも聞いてくださる感じですよね。何しろ「天照国照」ですもの。ちなみに天照皇大神は、諡号を「橦賢木厳御魂（つきさかきいつのみたま）天疎向津毘売尊（あまさかるむかつひめみこと）」ともうされ「天照」の称号は大分後になって政治的な意図を持って付けられたという話もあります。

綿津見神（わたつみのかみ）も海の守り神です。先にのべた住吉の三神が海神（「海神」は「わたつみ」とも読むようです）として祀られていますが、もともと伊弉諾大神（いざなぎのおおかみ）の御子神として、大山祇神（おおやまずみのかみ）と同格の大綿津見神（おおわたつみのかみ）が存在したという話もあります。２世紀ごろ、南九州のほうに御二方のモデルになるような実力者があったのでしょう。あの海幸・山幸の話をご存知の方もおられると思いますが、山幸のお嫁さん豊玉毘売尊（とよたまひめのみこと）は大綿津見神のお子神様です。

そのほかまだまだ、各地に海事関係者が崇拝する神様はおられるとおもいますが、今回の稿はこれでしめさせていただきます。これを機会に、それぞれの地の海の神様がどんな神様なのか、よくご覧になってはいかがでしょうか。

【大和神祖（かむろぎ）の謎】（会報 第93号 平成20年4月発行）

インターネットのホームページは実に多くのことを教えてくれます。そして自分の持つ数々の疑問の答えや謎を解くヒントを与えてくれます。

ところで今回の話は、そのホームページを参考にしながらの話です。

大和（奈良）の代表的な神社として、石上神宮（いそのかみじんぐう）、大和神社（おおやまとじんじゃ）（いずれも天理市）、大神神社（おおみわじんじゃ）、（桜井市）というのがあるそうです。「・・・あるそうです。」の表現は、私がまだ訪れたことがないからで、もちろん実在する大和三神として高名な神社です。読者の方の中にはご参詣された方も大勢おられるのではないでしょうか。

今年中には私も訪問して「・・・あります。」という形でお話ができるようにするつもりではありますが・・・・・・。

伊勢神宮

一方伊勢市には、現在多くの日本人が最も尊敬する神様、天照皇大神様（あまてらすおおみかみ）をお祀りしている伊勢神宮があります。

奈良の三つのお社と伊勢のお社は、古代の歴史を語るうえで実に多くの疑問を投げかけ、また手掛かりを与えてくれます。

私は神話のふるさとに生まれながら、あまりこの奈良地方の神々には関心がありませんでした。

なぜなら、出雲、豊前、筑前、安芸、伊予、讃岐・・・・・と地方に高名な神社が沢山あり、その延長線で皇大神宮も考えていましたので、別に伊勢にあることになんの疑問もなかったわけです。

また奈良地方のことについても、昔の学習の記憶から単に日本の仏教の故郷という位置づけでしか残っていなかったので、伊勢と奈良の関係に、ことさら疑問は起こらなかったわけですね。

ところが、現在私の住んでいる舞鶴に近い、大江町の元伊勢神社の魅力に惹かれて頻繁に訪れるようになってから、「あれれ？」と疑問がわいてくるようになりました。

その、大江町の元伊勢は、天照皇大神様が現在の伊勢市に鎮座されるまえ、安住の地を求めて遷宮してこられたところであること、他にも各地に元伊勢と称されるところが沢山あること、この丹後の地で四年間とどまっておられたということ、また皇居から出られて二十年もの間安住の地が定まらず、諸国を遷宮されたことなどなど・・・だんだんわかってくると、現在最も尊敬されている天照皇大神様が、なぜ古代のまつりごとの中心であった奈良を中心とするその近郊ではないのか、どうして二十年も放浪しなければならなかったのか。　そしてさらにいろいろ調べてみると、この元伊勢と呼ばれるところは、実は他にも各地のあちこちにあることを知らされるわけです。（もっとも奈良笠縫村にも元伊勢と呼ばれる神社があるそうですが、あくまで元伊勢で伊勢神宮ではありません。）

「なぜだろう・・・・・？」と。

「他の神様にもこんな例があるのかな？」とおもったら、あることはあります。例えば出雲大社にたいして「元出雲」というのが京都府亀岡市にあるように・・・・。しかし、伊勢神宮のように多くの地に元伊勢と呼ばれるものが点在している例をしりません。

「はてな？古代の日本の歴史の始まりは、奈良地方あるいはその周辺でなかったのか？」と。

はたまた、「だとしたら、一番偉い神様と思われている天照皇大神様が、一山も二山も越えた辺境（当時は）の地にあるのだろう？」と・・・・。

日本で古いといわれるお寺だって、奈良にあるのに・・・。

つい最近の明治の初めまで、天皇を中心とする祭祀は畿内でおこなわれていたわけですからね。

そうした疑問と向き合う中で、数年前、冒頭に掲げた三つの由緒ある奈良の神社の存在を知ったのです。

その三つの神社に祀られている神々は、近年、古代歴史を語る中で取りざたされる重要なカギを握る神々でした。

大神神社

まず大神神社（おおみわ神社とよみます）ですが、ここには大物主尊（おおものぬしのみこと）と大己貴尊（おおなむちみこと）が祀られています。大物主尊は大国主尊（おおくにぬしのみこと）

のことであるという見方もあるようですが、大己貴尊が大国主尊であるとの見方が有力ですので、大物主尊は饒速日尊（にぎはやひのみこと）とするのが妥当です。

他の神社の祭神との検討からもその見方に軍配が上がるのではないかと私はおもいます。

もちろんこの話は大国主尊を、現在大黒（たいこく）様（七福神）にもたとえられている、出雲大社の神様だとした場合のことでありまして、「大国主尊とは本当は饒速日尊だ」ということであれば、どちらがどうのこうのという必要はありません。

このお二方は義理の親子関係にあたります。

石上神宮

次に石上神宮（いそのかみ神宮と読みます）ですが、ここには布都御魂（ふつのみたま）、布留御魂（ふるのみたま）、布都斯御魂（ふつしのみたま）、宇麻志麻治尊（うましまちみこと）等が祀られています。布都御魂は、素盞嗚尊（すさのおのみこと）の父神様、そして布留御魂は素盞嗚尊の、また布都斯御魂は饒速日尊の別名でお二方は親子神さまです。さらに宇麻志麻治は、饒速日尊のご長男。

つまりこの四方は親子四代（直系）の神々なのです。

そして最後に大和神社（おおやまと神社とよみます）には、大国御魂（おおくにみたま）、八千矛（やちほこ）、御歳（みとし）が祀られておりますが、このお三方はそれぞれ饒速日尊、素盞嗚尊、須勢里毘売（すせりひめ）尊（みこと）の別称で、親子三代（直系）の神々です。

大和神社

ややこしい神々の御関係はともかくとして、重要なポイントはこれらの神々は、いずれも出雲系の神々であり、一方の天照皇大神は日向系の神様だということなのです。

この奈良三神に祀られた出雲系の神々、伊勢神宮に祀られた天照皇大神いずれも、建国（神武天皇）以来皇居内で祀られておられた。

ところが十代崇神天皇の御世、大飢饉と流行した疫病根絶祈願のため、お宮を建てて祀ることにされました。

時の宰相伊香色男に石上神社、饒速日尊の子孫大田刀根子に大神神社、娘の渟名城入姫に大和神社の造営を命ぜられ、この三社は程なく祭祀がなりましたが、天照皇大神のお宮はついには崇神天皇時代には果たされず、次の垂仁天皇の時代になっ

てやっと現在の伊勢の地に祭祀がかなうことになったのです。実にこの間二〇年の歳月を要しています。

古代歴史の中心地の奈良三神がいずれも出雲系の神々であるということは何を物語っているのでしょうか？

現在は、古来の神々を、宗教（日本神道）の対象として各地に勧請してお祀りし、心のよりどころにしていますが、これらの神様には諡号（おくりな）があるように、もともとは実在した方々が、モデルになっておられるのですから・・・・・・・。

このあたりに深く思いを馳せるときに、日本の神様に対する信仰と、他の宗教との大きな趣の違いを知ることができますし、また神話に隠された古代の歴史の姿を彷彿させるものがあるのであります。

聖徳太子の時代、蘇我馬子と物部守屋の戦いが繰り広げられました、今回の私のテーマである「大和神祖の謎」を解くことにも大きくかかわっているのではないでしょうか。

【出雲の中の高天原（日向）神】（会報 第94号 平成20年８月発行）

島根県松江市大庭町、ＪＲ松江駅の南南東約５キロのところに、国宝「神魂（かもす）神社」があります。このあたりは、古代出雲の政治の中心であったとも言われている地であり、この地に鎮座される神魂神社は、伊弉冉尊（いざなみのみこと）を主祭神とし、通称「大庭の大宮さん」と言われています。本殿は、国宝に指定されており、現存する大社造りの社殿の内最も古いと言われ、意宇（おう）六社の一つに数えられる格式の高い神社です。因みに「意宇（おう）」とは古代出雲（今の松江）地方の呼び名で、現在も意宇川などの名でのこっています。

神魂神社

12月13日には、出雲国造祖神（いずもくにのみやつこそじん）である天穂日尊（あめのほひみこと）が高天原から乗ってきたと伝えられる釜にまつわる「御釜神事」があります。

天穂日尊は出雲の国造の祖ですが、この方は、高天原族つまり日向系の神様といわれています。それでおまつりされている神様は、天穂日命のお祖母様の伊弉冉尊（高天原族）です。天穂日尊は、

日向族でありながら出雲にあって、まつりごとに重要な役割を果たしていたことから、以後も一族は神魂神社の宮司を兼ねて、この地方を治めていました。8 世紀初頭、ときの朝廷が杵築(きつき)大社（現在の出雲大社）を造営し、近くに出雲国庁をつくった事から国造の地位を失いましたが、朝廷は、その代わりに出雲大社の宮司に任命し、西出雲の地方を社領として与えました。出雲大社は、その後代々この一族で守られています。

出雲大社をはじめ松江、出雲あたりに祀られている神様は、素戔嗚尊(すさのおのみこと)など出雲系の方々が多いなか、日向系の天穂日尊一族が、出雲地方でなぜこうも（現在でも出雲大社の宮司は出雲国造家とよばれています。）大切にされたのでしょうか。諸説あるようですが、原田常治さんは、『素戔嗚尊が日向から連れて帰って手元に置いて育てた、そして後に、大和朝廷（日向族）との間でおこなわれ出雲の国譲りのとき、重要な調停役を果たされたのではないか』といっておられます。

日向族の大日霊女貴尊(おおひるめむちのみこと)（現在の天照皇大神？）の五人の男のお子様のなかで、この天穂日尊（二男さん）だけは諡号(しごう)（おくり名）がないのです。

他の四人のご兄弟、天忍穂耳尊(あめのおしおみみのみこと)、天津日子根尊(あまつひこねのみこと)、活津日子根尊(いくつひこねのみこと)、熊野楠日尊(くまのくすひのみこと)は、いずれも日向地方の各地を分担して治めておられたらしく、またいずれも別に諡号をお持ちです。

「出雲の中の高天原（日向）神」この話が事実とすれば、大変面白い話だと思います

因みに、意宇(おう)六社は、「熊野大社」「真名井神社」「六所神社」「八重垣神社」「揖夜神社」と、この「神魂神社」のことを言います。

【出雲風土記にみる神話】（会報 第95号 平成20年12月発行）

風土記という言葉を耳に（あるいは目に）された方は、勿論沢山おられると思います。

地方の土地々々の色々な面白い言い伝えとか特色とかを紹介するのに「○○風土記」などと称して盛んに使われていますね。

古代の風土記は今から1300年くらいまえ、大和朝廷の一律支配が完成した時期、時の朝廷の命令により全国各地で記録編纂されたといわれています。

これらは、古代の歴史発掘のために、おおきな手がかりとなるものです。当時すでに、わが国には60余りの国が存在していたとの説もあり、もし、それぞれの国の風土記が作られていて、これらがすべて残っているとしたら、記紀（古事記･日本書紀）との突合せなどによる検証から、古代の日本の全容を解明する上で大変貴重なものとなったに違いありません。

現在は、出雲、播磨、肥前、常陸、豊後の五ヶ国の風土記が残っているとのことのようですが、そのなかでもほぼ完全な形で残っているのが、出雲風土記です。733年ごろ完成したといわれていますが、日本最古の歴史書といわれる記紀とほぼ同年代の記録であり、また朝廷の意向もあったのか、出雲風土記も記紀同様に神話が主体となっていて、史実を忠実に再現したものかどうかはわかりません。

が、しかしながら、これらを編纂した人たちの頭の中には、その記述内容に見られるような物語のネタとなる類似した出来事があったことは容易に想像できます。その意味で古代の歴史を探る上で貴重な記録であることは間違いないと私も思っています。

そのような風土記あるいは記紀についての薀蓄はさておき、またまた神話に基づく古代歴史の話です。何度も断りますが、私の話は、出雲神話（古代歴史）崇拝の方に相当強く傾倒して（というより完全に被れてしまっています）いることを踏まえて読んでください。

さて、出雲風土記の神話に目を移しますといくつかの章に分かれていまして、例えば「意宇郡条」とか「嶋根郡条」とか「飯石郡条」・・・・とかですね。

（ちなみに古代出雲の中心は、現在の松江市という説が有力です。）

さらに、その郡条は、郡に属する各地区（村々とでもいいましょうか）の記述を集めたもので構成されています。（書かれている地名は現在でもそのまま使われているものが相当数に上ります。）そして、その村々のできたいきさつなどを神話風

（現実では考えられない物語なのでこう表現しました）の物語に仕立て上げられているわけです。

たとえば「意宇郡条」の最初の部分には、あの有名な「国引き」の物語がかかれておりその物語のオチでもって「意宇」という地名（村）の由来を説明しています。

要約して引用しますと、

『八束水臣津野命（やつかみずおみつぬのみこと）は、出雲の国は狭い未完成のくにだから、よその国（朝鮮半島から能登に至る地域）の余った土地を引っ張ってきて継ぎ足し、広い立派な国にしようとお考えになり、三瓶山（島根県大田市）と大山（鳥取県大仙町）に大綱をおかけになり、土地を引き寄せ（島根半島部分）広くされた。

そして、国を引き終えた八束水臣津野命は「オウ（意宇）！」と叫んで大地に杖を突きたてられた。その場所は木が繁茂（豊かな土地）して「意宇の杜」となった。引き寄せるのに使用した２本の綱は弓ヶ浜半島（鳥取県米子市･境港市）と稲佐の浜（島根県出雲市）となった』というものです。

現在も松江市内に「意宇」の地名は厳然として残っておりまた、この付近には「意宇六社」として由緒ある古い神社があります。

三瓶

出雲の古代歴史を語る上で大変興味ある神話といえるでしょう。

少し余談になりますが、この「意宇六社」の中には、「熊の神社」（素盞嗚尊（すさのおのみこと）の命ゆかりの神社）があり、また「神魂神社」（前号の稿では「天穂日命」を祖とする神社として紹介）という現在国宝に指定された神社もあります。

さらに「八重垣神社」は、「八雲立つ出雲八重垣妻込みに八重垣つくるその八重垣を」の和歌（日本最古の和歌ともいわれている？）で有名な神社です。

この八重垣神社は、素盞嗚尊の奥様となられた櫛稲田毘売尊（くしいなだひめのみこと）を八俣遠呂智（やまたのおろち）から救い出して匿ったとされるところです。

素盞嗚尊は、櫛稲田毘売尊を救出したあと、幾重にもバリケードを築いて遠呂智の逆襲に備えたと伝えられています。

話を戻します。この国引き神話を見ますと、引いてきた国は、朝鮮半島の一部や北陸に至る日本海側の陸地の一部（「越のくに」つまり北陸地方）がふくまれます。このことは、出雲の国は、朝鮮半島や北陸に至る日本海のかなりの広域まで深い関係があった、また、八束水臣津野命のモデルとなった豪族（この地の支配者）が、地域をまとめ土地を開墾しさらには日本海沿岸地方に進出して交易し、国を豊かに

していった偉大な政治家であったと解釈すればいいわけです（もちろん当たっているかどうかはわかりませんが、）。

あるいはひょっとして、八束水臣津野命は素盞嗚尊のことかもしれません。

八俣遠呂智（大蛇）は、出雲の斐伊川ではなく福井県の九頭竜川だったかもしれません。

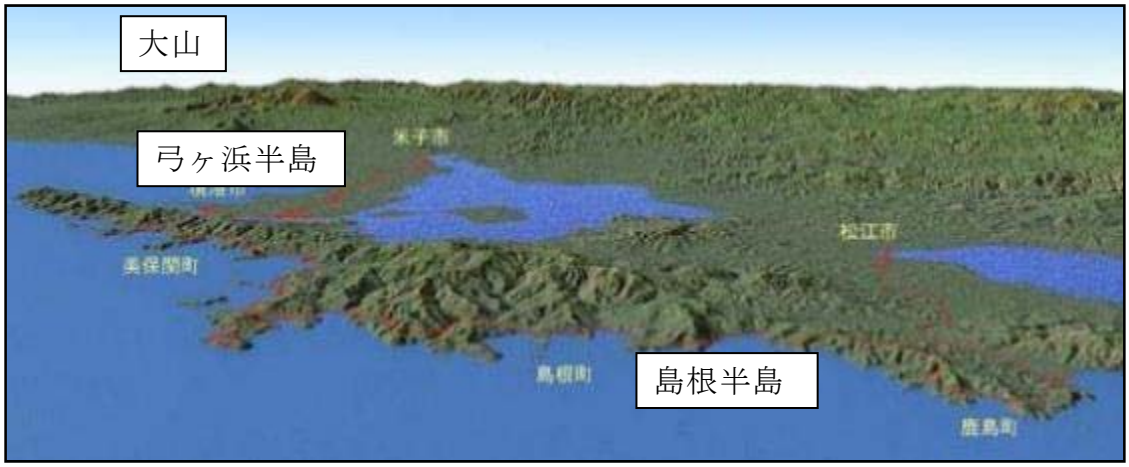
このように、出雲風土記は、出雲派の私にとって、出雲の古代の歴史を掘り起こす（といっても素人の興味本位の範囲ですが）ためにかなりのおもしろい資料ではあります。

ただし、出雲中心とした神話に傾注する私にとって残念なことには、出雲風土記には、素盞嗚尊の八俣遠呂智退治を初めとして、大己貴（おおなむちのみこと）のエピソードなどもありません。ましてや、古代「倭の国の王」饒速日尊（にぎはやひのみこと）や「日向の女王」大日霊貴尊（おおひるめむちのみこと）などの話は、当然の事ながら他の国のことですからないわけです。

しかし、風土記にはなくても、これまで紹介した内容は、現在色々な書物の記述のなかに見られますし、また現在の松江から出雲のほうに残る史跡を見ますと、私を納得させるものが数多くあります。さらには、固定観念にこだわらずに柔軟に解釈すればロマンはドンドンと膨らんでいきます。

古代の人々を現代の文明と比較して、「あんな大昔に・・・」と考察するのは大間違いです。知恵に富み、バイタリティに富んでいて、海や川を使って広い範囲をまたにかけて活躍していたことは、世界の古代史や古代文明をみれば明らかです。古代倭や出雲の人々だって例外ではなかったはずです。

わたしもこれから、記紀と風土記との照合から、自分なりに出雲と倭のそれぞれの神々の関係を解明できたらと思ってはいます。



【物部神社と宇摩志麻遅尊（うましまちのみこと）のエピソード】

（会報 第96号 平成21年4月発行）

昨年12月31日付で、日本海海難防止協会舞鶴事務所長を辞しましたが、引き続き投稿の許しを得ましたので、引き続いて島根の神々に関係のある話をさせていただきたいと思います。

今回は、私の出身に近い島根県大田市にあります物部神社（もののべじんじゃ）にまつわるお話です。物部氏といいますと5世紀のころ蘇我氏（そがし）との争いで滅びた一大勢力ですが、その祖は出雲族であるといわれています。

物部神社（島根県大田市）

そしてその初代の物部氏が今回の主人公の宇摩志麻遅尊（うましまちのみこと）です。私は以前に神武天皇が、即位される以前の倭は、出雲族饒速日尊（にぎはやひのみこと）（素戔之男尊（すさのおのおのみこと）のご三男）によって支配されていたと書きましたが、宇摩志麻遅尊はその饒速日尊のご長男です。饒速日尊が亡くなられたあとそのお世継ぎの伊須気依比売尊（いすけよりひめのみこと）が幼くあられたため、成長されるまでの間、宇摩志麻遅尊が代わって統治しておられました。

ところが、当時勢力を拡大していた日向族は、大日霊女貴尊（おおひるめむちのみこと）（後の天照皇大神（あまてらすおうみかみ））のお孫さんの伊波礼彦尊（いわれひこのみこと）（後の神武天皇）を倭に送り、その支配を模索されていました。

そのためには、倭のお世継伊須気依比売尊とのご結婚（いわば婿養子）という形をとれば、平和裏に倭の支配権を得ることができるとお考えになられ、その実現のための画策をされました。

大日霊女貴尊は、やはりお孫さんの阿遅鉏高日子根尊（あぢすきたかひこねのみこと）に倭との交渉を命じられたのですが、その交渉の相手が宇摩志麻遅尊だったのです。

ちなみに阿遅鉏高日子根尊は、武角身尊（たけつのみのみこと）とも呼ばれ、神話では八咫烏（やたからす）（サッカー全日本のシンボルマークの三本足のカラス）のモデルとして伝わっている方です。

倭の正式なお世継は女性でしたから、伊波礼彦尊との養子縁組ということで平和裏に統一できるので、阿遲鉏高日子根尊と宇摩志麻遲尊の間ではうまく話がまとまりかけましたが、ひとつ障害がありました。

それは、宇摩志麻遲尊の伯父さん（饒速日尊の奥様の兄上）長髓彦（ながすねひこ）の猛反対です。

「妹婿の持っていた倭の支配権を他族に譲るなどとんでもないこと」ということなのでしょうね。

結局、宇摩志麻遲尊は、いつまでもこの話に反対する伯父と戦うはめになりやむなく殺害してしまいます。

こうして伊波礼彦尊は、ようやく倭に入ることができることになり、宇摩志麻遲尊は、倭の支配者の徴である「十種（とぐさ）の神宝（かんだから）」（三種の神器ではありません）とともに支配権を譲られたわけであります。

伊波礼彦尊は、２４１年（？）１月１日（旧暦）に伊須気依比売尊と結婚式を挙げられ、初代天皇として即位されました。

ちなみにこの即位の日が新暦の２月１１日、つまり建国記念の日になっています（昔は紀元節と言っていたようですね）。また記紀神話では、神武天皇の即位は紀元前６６０年１月１日となっているようですがこれはあまりにも昔すぎるようです。

支配権移譲後、宇摩志麻遲尊は、弟の天香山尊（あめのかやまのみこと）（弥彦神社に祀られておられます）とともに。神武天皇のもとで倭支配権の拡大にご尽力され、宇摩志麻遲尊はそのご功績により、朝廷の有力者初代物部氏となられるのです。

やがて日向族の権力が強くなるにしたがい、出雲族の力はだんだん衰退していきます。大和朝廷の創設に貢献した神々でしたが、宇摩志麻遲尊は島根（出雲族の本拠地）で、そして弟の天香山尊は新潟でそれぞれ生涯を閉じられました。

それでも物部氏は、五世紀まで大和朝廷の有力者でしたが、中国、朝鮮と伝わって入ってきた仏教の布教とともに勢力を強めようとする蘇我氏との勢力争いに敗れ、ついに滅んでしまったのです。

宇摩志麻遲尊は、物部神社に祀られていますが、インターネットのＨＰ「Ｗｉｋipedia」の資料によりますと『物部神社は、島根県大田市にある神社で式内社石見国一宮で、旧社格は国幣小社（こくへいしょうしゃ）。物部氏初代の宇摩志麻遲尊を主祭神とし、相殿に物部氏の祖神饒速日尊、布都霊神（ふつのみたまかみ）、天御中主大神（あめのみなかぬしのおおかみ）、天照皇大神を祀る。宮中でも行われる鎮魂祭を行うことで、石上神宮（いそのかみじんぐう）（奈良）、弥彦神社とともに有名である』と紹介されています。

このことは、正確な事の真相の仔細はさておき、建国の当時大変功績のあった方であることを物語っています。

また、物部神社の社伝は、『饒速日尊の御子宇摩志麻遅尊は、神武天皇の大和平定を助けた後、一族を率いて美濃の国・越後を平定した後石見の国で歿したという。宇摩志麻遅尊は、社殿の背後にある八百山に葬られ継体天皇八年、天皇の命令によって山南嶺に社殿が創建された』と伝えています。

社殿は、最初の写真でご覧のとおり、妻入り（屋根の合掌している側に入口があるタイプ）形式の造りで、出雲大社などと同じです。

ちなみに伊波礼彦尊の倭入りにご尽力された、一方の阿遅鉏高日子根尊は、京都の下賀茂神社に祀られておられます。こちらは伊波礼彦尊の従兄でれっきとした日向系の神様ですから、奈良の都に近い京都の中心部に祀られておられのでしょう。

今回、島根県の大田市の物部神社を中心として宇摩志麻遅尊をご紹介しましたが、全国には、まだほかにも物部神社はたくさんあります。

そのほとんどは宇摩志麻遅尊を主祭神として饒速日尊等をともに祀っているようです。

そういった意味からも偉い方だったと思われます。

【熊野大社と素戔嗚尊（すさのおのみこと）のおはなし】

（会報 第 97 号 平成 21 年 8 月発行）

日本の古代史については、近代のように物的証拠で裏付けできる史書のようなものはなく、中国の記録や、古事記、日本書紀、風土記などの記述を、いろいろな人がいろいろな視点から眺めて「こうであったろう、ああであったろう。」といったふうな形で語られている部分が多いようです。

近年、各地での発掘調査が進み、また発掘された遺物や地層の年代などが、科学技術を駆使して明らかにされることによって、少しずつ解明されつつはあるようですが、やはり依然その謎が深い日本古代史であります。

京都八坂神社の祇園祭も終わりましたが、八坂神社にお祀りされておられるのは、素戔之男尊（すさのおのおのみこと）であります。

ところでこの素戔之男尊は、沢山の別称がおありであなりまして「神祖熊野大神（かむろぎくまののおおかみ）」（諡号（おくりな）を加夫呂伎熊野大神櫛御気野命（かぶろぎくまのおおかみくしみけぬのみこと）ともうされます）とも呼ばれておられます。

「熊野」といえば、和歌山県の熊野を真っ先に思い浮かべられる方は大勢いらっしゃることでしょう。

しかし和歌山の熊野は地名ではなく、熊野三神などのことを言います（もっとも熊野川町という地名はありますが）。ところが今日の和歌山の熊野に勝るとも劣らない熊野大社があるにもかかわらず、意外と知られてないのが、出雲の国の熊野です。

出雲熊野大社

時間のある人は島根県の地図を開いてご覧になってみてください。松江市の南のほうに八雲町熊野という地名を発見できることでしょう。

「古代日本正史」の著者原田常治氏は、同著書に、和歌山県の熊野三神（新宮、本宮、那智宮）の神様について触れておられるなかで、『熊野の地名は十二代景行天皇のとき、今の新宮市に、素佐之男の死んだ出雲の熊野、またその諡号の「神祖熊大神」の名をとって「熊野」という地名になった。』といっておられます。「素佐之男」とは、まさに素戔之男尊のことであり、出雲の支配者であった神様です。

和歌山熊野大社

私は、この話に大変興味をそそられますし、また島根県出身の私は、妙に納得しています。

もちろん、いかれたことのある人には説明の必要はありませんが、島根の八雲町熊野の熊野神社も大変立派なお社（前頁の写真）で出雲一宮ということであります。

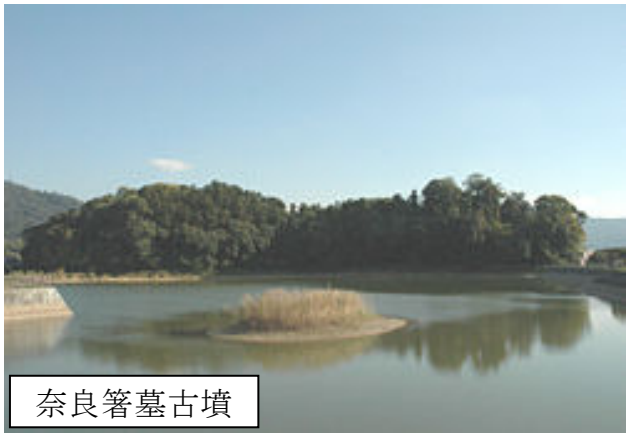
出雲の国では、出雲大社があまりにも有名ですし、前出の和歌山熊野本宮大社のほうが知名度が高いため、出雲の熊野大社の名を知っておられる方は少ないのかもしれませんね。

実は、全国には「熊野神社」と名がつく神社は、無数にあるそうです。古事記（七一二年）以前に祀られたものも多く、だいたい素戔之男尊と饒速日尊（にぎはやひのみこと）（素戔之男尊のご三男）が合祀されているとのことです。

私の住む舞鶴市内にも、熊野神社はあります。舞鶴市の中心にある五老ヶ岳公園。この公園は、大変風光明媚な舞鶴湾が一望に見わたせる市民の憩いの場となっている標高３００メートル余りの山ですが、登山のための遊歩道「ロータリーの道」の途中に、ひっそりと鎮座しておられます。

由緒書きなどが見当たりませんので、確かなことはわかりませんが、きっと素戔之男尊、饒速日尊の親子神さまが祀られているに違いないと思います。大きな神社ではありませんが、大変威厳を感じられますし、出雲族のしかも古代に活躍された大変偉大な方々が祀られているということで、五老ヶ岳公園に上るときは、畏敬の念を抱いておまいりしています。

熊野の話とは違いますが、つい先だって、奈良の箸墓古墳群うち最大級の前方後円墳の年代が、3 世紀のものであるということが解明されたといいます。その年代が邪馬台国の女王卑弥呼がなくなられた年代と符合するとかで、邪馬台国畿内説を唱える人が俄然勢いついたという話がありました。


奈良箸墓古墳

神話に出てくる卑弥呼のモデルとなった神様がどなたであったのか、記紀の記述からはいまだはっきりせず諸説あるようですが、もし仮に大日霊女貴尊（おおひるめむちのみこと）（私は、このひとではないかと思っていますが）だとすると、やはり九州説に軍配があがるような気がしてなりません。

邪馬台国の謎とともに、また熊野の話のなかにも実は大変興味深いミステリーがいっぱいつまっています。

素戔之男尊、饒速日尊の親子神様と、熊野のお社との関わりのお話は、まだまだこれからも私の好奇心を刺激し続けるにちがいありません。

【白髭神社が語るもの】（会報 第98号 平成21年12月発行）

奈良の纏向遺跡の発掘現場で、古代の壮大な建物跡が発見され、邪馬台国畿内説論者は俄然元気づいてきた、と報道は伝えています。

九州説に傾倒している私としては、多少心穏やかざるところがないわけではありません。

ただ、私の場合の九州説は、吉野ヶ里（佐賀県）ではなく、西都原（宮崎県）の方ですが・・・・・・。

いずれにしても、まだはっきり、畿内説を裏付ける決定的な証拠が見つかったわけではありませんので、私は、あくまで西都原説をかたくなに信じて、思考を進めているわけであります。

それはさておき、今回もまたまた神社について触れてまいります。

その前に、ちょっとお断りですが、これまでこのシリーズでは、神様の御名前を漢字で表記し、ルビを振って紹介させていただきました。しかしこの表記は、なんだか難しそうな感じもするし、文献でもいろんな漢字があてててありますから、今回からは、カタカナで表記することにしました。

さて本題に入ります。

白髭神社というのをご存知でしょうか。（あるいは猿田彦神社として、みなさんの近くにあるのかもしれません。）私の住んでいる舞鶴近辺にも、白髭神社はいくつかあります。（もちろん猿田彦神社もあります。）

白髭神社に祀られている方は、サルタヒコノミコトと呼ばれる神様です。

この方は、記紀（古事記・日本書紀）では、天孫降臨のおり、ニニギノミコトをナカツクニまでお迎えした、と書かれていますし、アマテラスオオミカミの御影を描いた掛軸絵などに、トヨウケノオオカミと一緒に描かれていることがよくありますから、3世紀ころ重要な役割を果たされた方に違いありません。

今回は、このサルタヒコをお祀りした神社にまつわるお話です。

伊勢の猿田彦神社

ところで、以前に紹介したかもしれませんが、記紀には、出雲の国譲りは、平和的になされたという趣旨で話が書かれています。しかし、それはいかにも神話的で、現実的な話ではないような感があります。

2世紀ころ、スサノオノミコトは、出雲を

拠点に、遠く能登の地方から北九州を経て、日向までをその勢力圏としておられて、出雲にはクシイナダ姫、日向にはオオヒルメムチノミコトという奥様があり、それぞれ８人と３人の御子さんもおられたようです。

スサノオの後を継がれたオオアナムチノミコトもまた、出雲のスセリ姫との間に3人、日向のタギリ姫との間に3人の御子がありました。

出雲の国譲りのはなしというのは、3世紀に入って起こった出雲の国の相続争いのことで、スセリの御子タケミナカタとタギリの御子コトシロヌシとの間に起こった出来事なのです。（お二人は、ともにオオアナムチを父親にもつ異母兄弟であります。）

つまり、出雲の国を日向族が相続した際のお話、というわけですね。

オオアナムチが亡くなられた後、日向の相続は当然ながら、出雲の国の相続権をも主張し、異母兄のタケミナカタを追放したコトシロヌシでしたが、若年である上に、本来の根拠地である日向の方も治めなければなりません。このため出雲の統治には、別に有能な政治家による代行政治が必要でした。

そこで、出雲統治のために日向から派遣されたのが、サルタヒコノミコトということなのです。

琵琶湖畔の白髭神社

スサノオは日向統治時代、出雲から有能な政治家を大勢ひきつれていっておられたはずですから、出雲族を血筋とする実力者も沢山おられました。

サルタヒコはその出雲族の血をひく方なのです。

タケミナカタを追放した日向族の統治は、出雲族の反感をかうことになり、うまく治められない可能性がある。出雲族の血をひく人ならうまくいくのではないかというわけですね。

実際、このサルタヒコという方は、大変有能な方で、国譲りの事件で不満のくすぶる出雲に大変な善政をしかれたようです。

一例を挙げますと、出雲１８０カ国あまり（村のような集落）の首長を集めた政策会議の主催です。いわゆる民主政治のはしりともいうべきものでしょうか。

旧暦の１０月のことを「神無月」といいますね。でも出雲では「神在月」（カミアリヅキ）といいます。

年に一度１０月に、全国の神様が出雲に集合し、諸々の事項について話し合われる。

それで、この月は神様が出雲に出張して留守にされるため神無月と呼び、出雲では、神様が大勢おられるので神在月というわけですね。

ところが、全国的に神無月と呼ぶようなったのは、記紀以降（７世紀ころ）からで、もともとの神無月というのは、出雲の１８０ケ国（集落あるいは村という方がいいかもしれませんね）の話ということなのです。

つまり、サルタヒコは、年に一度、出雲１８０ケ村の長を政庁に集め、その意見を聞いて政治に反映させたということなのでしょう。

この会議で、翌年誕生させるカップルについても議題となるということから出雲大社が「縁結び」の神という話につながっているようです。

日本全国には、猿田彦神社や白髭神社が大変数多くあり、インターネットのホームページでも、それぞれの神社の由緒が紹介されています。しかし、天孫降臨のさいに天孫を導いたという、いわゆる記紀神話をもとにしたものが多く、ここで紹介したような内容のものは、あまり見当たらないようです。（私の考えているようなものも、どこかにあるかもしれませんが・・・）。

でも、はなしとしては面白いとしても、高天原での弟スサノオの乱暴に業を煮やしたアマテラスが、天の岩戸に隠れたとか、ついに高天原を追放された云々・・、というような記紀神話の流れのなかで語られるサルタヒコよりも、出雲を拠点として北陸から九州をまたにかけて、ひろく日本海西側支配した偉大な王、スサノオノミコトを中心とした、神々の話のなかで語られるサルタヒコノミコトの方が、よほど現実的に感じられます。

サルタヒコが、政治を行った出雲政庁跡といわれる地（現在の松江市）に鎮座される佐太神社のご祭神は、サルタヒコノミコトです。

白髭神社とは呼びませんが、重要文化財に指定され、三連式の大社造りで、伊勢の猿田彦神社や滋賀の白髭神社に負けない、実に堂々としたたたずまいとなっています。

やはり、サルタヒコノミコトは、「天孫の降臨を導いた」のではなく、「出雲の統治をした」神様であったというほうが、わたしにとっては説得力のある話なのです。

今回は白髭神社という神社に着目して、祀られている神様（実は日本の神様は、実在の人物）サルタヒコノミコトに触れさせてもらいました。

神社には、古代の歴史をのぞく窓口があると思います。

一例を挙げます。以前にも触れましたが、舞鶴にツキヨミノミコトをお祀りした、水無月神社というのがあります。

ツキヨミノミコトというのは、記紀神話ではアマテラスオオミカミの弟神です。ということは、この方は高天原の天孫族（日向族）ということになります。

ところが、この水無月神社の建物の造りは、出雲大社と同じ「妻入り」タイプです。

もちろん、神代のころからの建物でなく、過去に幾度か立て直されたでしょう。

しかし、神様の社を立て直すときは、茅葺が瓦葺になったり、格子戸が板戸になったり、あるいは多少寸法が変わったりしたとしても、基本の形はもとのとおりにて直すのが普通でしょう。特に昔の人は、神様を崇め神罰を恐れていたのですからなおさらですね。

そう考えると、この水無月神社は、もとは出雲系の神様が祀られていたということになります。

この例のように、神社には古代を考える沢山の手掛かりが隠されているとおもうのです。まことに神社と神様は興味深い存在であります。

神社を訪れた際は、こういった観点からもご覧になったらおもしろいと思います。

松江市佐太神社

【春日三神と出雲とのかかわり】(会報 第99号 平成22年4月発行)

奈良の春日大社には、３柱の神様がお祀りされています。

武甕槌命（たけみかづちのみこと）、経津主命（ふつぬしのみこと）、天児屋根命（あめのこやねのみこと）の３柱です。この神々はいずれも天孫族（宮崎日向系）の方々で、今から1300年ほど前、鹿島神宮（茨城県）からタケミカヅチノミコト、香取神宮（千葉県）からフツヌシノミコト、枚岡神社（大阪府）からアメノコヤネノミコトをそれぞれ勧請し、合祀されたとつたえられています。

奈良　春日大社

３神とも天孫族の方々ですし、しかも、春日大社の場所は奈良、また、御三方がもともと祀られていた神社の場所からしても、一見、出雲とはなんの関わりもないようですが、実際は大きなかかわりがあるのです。

今回は、この方々と出雲のかかわりについてご紹介します。

２世紀後半から３世紀の初めにかけて、出雲の大王スサノオノミコトとオオナムチノミコト（オオアナムチともいいオオクニヌシの別名であります）が２代にわたって出雲を支配されておられましたが、この当時の出雲の勢力圏は、日本海側を中心に遠く越前から九州の日向までおよんでおりました。

茨城　鹿島神宮

千葉　香取神宮

オオナムチノミコトがお亡くなりになったあと、日向地方は、コトシロヌシノミコト（オオナムチノミコトとタギリヒメとの間にお生まれになった御子）が相続されるということで、なんら問題は生じませんでしたが、出雲の相続は簡単にはいきませんでした。スセリヒメとの間にお生まれになった、タケミナカタノミコトにもその相続資格がありましたので、当然のこととして相続を主張されたからです。（タケミナカタノミコトは、現在甲州一宮となっている長野県の諏訪大社に祀られておられる神様です。）

スセリ姫は、スサノオノミコトの娘であり、またオオアナムチノミコトの正妻ですから、その御子であるタケミナカタノミコトの主張は、当然といえば当然のことだったのです。しかもタケミナカタノミコトは、祖父の血をそのまま受け継がれたような、武勇に優れた方でしたから、なかなか簡単には譲歩できないわけです。

天孫族側では、オオナムチノミコトの支配権は、すべてコトシロヌシノミコトが相続すべきものとの主張ですから、その実現のためには、抵抗するタケミナカタノミコトを排斥する以外にないということになるわけですね。

そこで天孫族は、強力な軍を派遣して、強硬に支配権の譲渡を迫ることになります。

このとき派遣されたのが、現在春日大社に合祀されておられる春日三神の方々であります。

大阪　枚岡神社

日向を相続するコトシロヌシと、その母タギリ姫を擁して出雲に進軍した御三方は、美保ノ関に本陣をおき、出雲のタケミナカタに国譲りを強要されたのですが、タケミナカタノミコトは、それを拒否されましたので、ついには、軍事の衝突になってしまいました。

出雲での戦いは、天孫族軍の勝利となり、敗れたタケミナカタノミコトは、東へ逃れていきます。

しかし、一度の戦いに敗れて、それっきり諦めてしまわれるような、やわなタケミナカタノミコトではありません。

幾度か軍を立て直しては、出雲奪回に執念を燃やされました。

石川県の羽咋市の付近で止まって、抵抗を試みます。（この近くにタケミナカタノミコトが祀られている志宇神社というのがあるそうですから、ゆかりの地であると考えられます。）

一方、天孫族では、タケミナカタの執念を放置しておくことはできませんから、タケミカヅチノミコトとフツヌシノミコトの２軍で、追討軍を編成して追討戦を展開されました。タケミナカタは、再三敗れては逃れることになります。

新潟県長岡市付近や長野県長野市付近などで次々と破れ、ついに再起不能に陥ってしまわれたタケミナカタは、天孫軍の大将タケミカヅチに降伏し、以後、長野から出ないことを条件に、助命されることになりました。

タケミナカタは、ここで出雲奪回を諦め、諏訪の地の支配を決心され、以後この地方の国造りを始められました。

治水、耕地開拓と善政をしかれ、民から大変尊敬されたと伝えられています。

長野県の諏訪湖畔に鎮座ます諏訪大社こそ、このタケミナカタノミコトをお祀りした、大神社なのです。

長野　諏訪大社

出雲奪回にこれだけ執念を燃やし、天孫族に抵抗したタケミナカタをタケミカヅチが助命することになったのは、日向でも英雄であったスサノオの正統な血を引くかたですから、出雲奪回の執念さえ捨ててもらえば、命まで奪うことには躊躇せざるをえないことだったのでありましょう。

古事記・日本書紀のなかで禅譲として語られる「出雲の国譲り」神話の裏にはこういった歴史的な事件が隠されていたらしいという物語には、大変興味がわいてくるわけであります。

ちなみに記紀で語られる「出雲国譲り」神話の概略を紹介しますと。

高天原のアマテラスオオカミは、オオクニヌシの治める葦原中国（「アシハラナカツクニ」と読みます）を譲るようタケミカヅチとフツヌシを派遣します。タケミカヅチは剣の柄を地面に突き立て、剣の刃先に腰掛けて、オオクニヌシに国譲りを迫りました。

オオクニヌシは、「私は譲ってもいいが、息子のコトシロヌシの意見も聞かないと・・・」と答え、美保関に釣りに出かけていたコトシロヌシを呼んできて、意見を聞きました。

コトシロヌシは「天津神（「アマツカミ」と読みます）の御子に差し上げましょう」と答えて、この世を去る呪文を唱え柏手を打って、乗って帰って来た船を傾け、姿を消してしまいました。

オオクニヌシは、さらに「もう一人の息子タケミナカタの意見も聞かないと･･･」ということで、意見をききますと、「タケミカヅチと力比べをして自分に勝ったら譲る。」と答え力比べをしました。

その結果、タケミナカタはタケミカヅチに投げ飛ばされ、諏訪の国まで逃げて、とうとう降参して国を譲ることに同意したうえ、諏訪の国から絶対に出ないと約束をして命は救われました。以上が、記紀神話のなかでの国譲りのあらましです。

もちろん、これは神話ですから現実的な話ではないのですが、アマテラスの岩戸隠れの話や海幸彦山幸彦の話などと比べれば、かなり現実性をもった話にはなっています。

記紀神話では、オオクニヌシとコトシロヌシ親子は出雲族として、国を天孫族に譲る側の役柄になっています。

親子の関係であること、また出雲系の血筋のかたであることは事実でしょうが、国を譲る側の神々であったことは、違う話のようです。

もっとも記紀が編纂されたころの時代は、まだまだ占いや神のお告げなどが、政治にさえも影響力を及ぼしていた時代でしたでしょうから、現代では考えられない話でも、当時は現実話としてまじめに受け止められていたのかもしれませんね。

今回の話で登場した、タケミカヅチノミコト（武甕槌命）とタケミナカタノミコト（武御名方命）は、よく似た名前ですので、ややこしかったかもしれませんね

お二方とも御名に「武」を冠していますから、ともに武勇に優れておられ、さぞ激しい戦いであったのではないかと想像するのであります。

天孫族の子孫である古代天皇家が、出雲に対して大変気遣いされたようでありますが、このような経緯を考えれば、うなずける話であります。

【舞鶴市の神様たち】（会報 第100号 平成22年8月発行）

最初のころのこの稿だったと思いますが、舞鶴には大変多くの神社があると紹介した記憶があります。小さな祠なども含めると150社とも200社とも言われているこの神様達を、私はすべて訪ねてみたいと思っているのですが、なかなか実現できていません。今回は、その足掛かりの一つとして、舞鶴のある神社を紹介させてもらいます。

その神社は、神社名を「阿良須神社」お呼びします。

国道27号線で東の方から向かうと、福井県との県境の吉坂トンネル出ると舞鶴市です。そこから市内へ3キロメートルほど入った、国道沿いの南側にその神社はあります。

信号を過ぎて左にカーブをとると、すぐに左手に明神型鳥居（上の横渡し部材に反りが入っているタイプ）が二つ目に飛び込んできます。この一つが「阿良須神社」です。

車を止めるスペースがなく、カーブの部分にありますので、うっかり見落としてしまいそうですが、改めてじっくり見渡しますと、境内はひろく立派なたたずまいとなっています。

阿良須神社（左）と「布留山神社」（右）

数段の石段を昇り、鳥居をくぐると広い境内になっていて、鳥居のそばに神社の看板ともいうべき「阿良須神社」と彫りこまれた大きな石柱があり、これだけでも神社の格調を際立たせる感じになっています。

境内の由緒書き看板によると、「崇神天皇10年、青葉山に住む土蜘蛛「陸耳御笠」という兇族を征伐したとき、豊受大神を神奈備浅香の森にお祀りしたのを創紀とする。降りて天武天皇10年9月3日、柳原の地に社殿を建て、春日部村氏神「阿良須神社」と奉称す。」中略「慶長6年細川忠興公が布留山の地へ移す。」とあります。

地元の人に尋ねると、創紀の地「浅香の森」は、現在の地「布留山」の北方数百メートルのところで、その跡とみられる遺跡が発見され、現在は柳の木が植えてあるという話でした。

過去千数百年の長い歴史の中で、当神社もご多聞にもれず、戦火や災害に見舞われ、何度も建てなおされ、現在の神社は文政12年再建のものということです。

つい最近の平成 16 年 10 月 20 日に、当地を襲った台風 23 号の際、境内にあった幹径 40 センチの樅の木の巨木が倒れて、本殿を直撃し半壊しましたが、地元の氏子の方々をはじめ多くの人から寄せられた浄財により、現在はすっかり元の姿に戻っています。

阿良須神社の拝殿

この修復のときは、使える材料はできるだけそのまま使って復元されたということで、違和感もまったく感じませんでした。

神社の建物は、拝殿が入母屋造り、本殿は流れ造りで、神社としては中規模というとこですが、立派な社殿で、本殿の前扉にはきれいな彫刻が施してあります。

ご祭神としては、現在５柱の神様達がお祀りされています。

由緒書きによると、この５柱は、創紀の豊受大神の他に多岐都姫尊、市杵島姫尊、多紀理姫尊、そして木花咲夜姫尊とあります。

この５柱の神々については、これまでも折に触れて紹介してまいりましたが、改めて簡単に紹介しますと、豊受大神は伊勢の外宮に祀られている豊穣の神様で、伊波礼彦尊（神武天皇）と吾平津姫（乙姫様のモデル）のお子様です。

多岐都、市杵島、多紀理の３姫尊は、素佐之男尊と大日霊貴尊との間にお生まれになった方々で、海の神様福岡の宗像３神として有名です。さらに市杵島姫尊は広島の宮島にある厳島神社のご祭神としても有名ですね。（実際は、多紀理姫が一番上、市杵姫が一番下ですが、由緒書き通りの順にあげました。）

阿良須神社の本殿

ここで、由緒書きのなかに、ちょっと私的には看過できないことが一つありますので敢えて触れさせてもらいますと、それは木花咲夜姫尊の事であります。記紀神話では、大山祇の大神のお子様で、瓊々杵尊の奥様となられた阿多津姫のことを木花咲夜姫としています。

しかし、木花咲夜姫は多紀理姫の別称だという説があり、私はこの説を支

持する立場ですので、この点から言うと、多紀理姫と木花咲夜姫が祭神とされているのはおかしいわけですね。だって同じ方ですからね。

ところで、このすぐ隣に「布留山神社」というのがあります。

由緒書きなどはありませんが、この神社は、より一段小高い位置から、「阿良須神社」を東方に見下ろす位置にあります。拝殿はないものの、規模的にも同じくらいで、やはり正面扉に美しい彫刻が施された美しい神社です。

「布留」と言いますと読者の中には記憶していただいている方もあるかとも思いますが、大和の大王饒速日尊（熊野大社や石神神宮の御祭神）の蒙古名ですね。

つまり、「阿良須神社」が遷宮されてくる以前から、この地には、饒速日尊を祭神とする神社が存在したと想像できるのです。

最後にもう一つ。

多くの神社の神殿は、東か南を向いて建てられているのですが、「阿良須神社」は、北を向いていることも興味引くところです。

青葉山麓に住んでいた土蜘蛛陸耳御笠にいまでもにらみを効かせているのか、あるいは、遷宮前の創紀の地「浅香の森」に向けて建てられたのか。はたまた、大和の大王饒速日尊（布留山神社）にお尻を向けることがはばかられたのか。

ただ単に地の利だけの問題ではなさそうですね。

布留山神社の本殿

【舞鶴市の神様たち-２（舞鶴市今田倭文神社）】

（会報 第101号 平成22年12月発行）

舞鶴市の今田地区に、倭文（しどり）神社が鎮座しておられます。

舞鶴市の南はずれ、舞鶴･若狭自動車の舞鶴西インターから池内川の方へ出て、300メートルほど川沿いの道を下ったところにあり「シドリ神社」と呼ばれています。

この地は、北側を除いては周囲を山に囲まれ、静かなたたずまいの片田舎の盆地で、田んぼの中にこの神社はあり、こんもりと古木が茂り、神社境内の荘厳さを演出しています。

倭文神社一の鳥居

明神タイプの一の鳥居をくぐったあと、左へ曲がってすすみ、二の鳥居を経て本殿にいたるという神域になっています。

とこういえば、かなり大きな神社を想像されると思いますが、実はそんなに大規模なものではなく、一の鳥居から本殿までは100㍍余りの、神域の規模としては、舞鶴ではまあ、中ぐらいの規模とでももうしましょうか。

ご由緒書きによると、お祀りしてある主神は天羽槌雄神（あめのはつちおのかみ）とあります。

神様の名前に、「雄」という文字がふられていますが、実は男ではなく女の神様であります。

少し神社の話から離れて、主神についてちょっと触れさせてもらいますと、この方は、別名を倭文神（しどりかみ）とも呼ばれ、機織りの祖神として信仰されている神でありまして、神話では、天照大神が天の岩戸にお隠れになった際に、集まった八百万の神々の一柱として伝えられています。

話は、岩戸にお隠れになった天照大神の関心を引き、外に誘い出すために、知恵、芸能、祝詞、あるいは鍛冶や金工、玉造り、鏡作りなど、諸業の神々がお集まりになり、天香久山の榊の大枝を切り出して太玉串とし、これを各職能神たちがそれぞれの技能を持ち寄って飾り付けられたというもので、この時天羽槌雄神は、「倭文の綾織り」という豪華な布を織り出した、という話になっています。

古事記や日本書紀の天岩戸の項には、倭文神の名前は見当たりませんが、太玉串に織りものを飾ったとありますし、金工、玉造り、鏡作りの神々が登場しています

ので、これらと重ね合わせると、岩戸神話にいう八百万の神々のうちでも、重要な神様の一人として参加されていたに違いありません。（別の古書の記録には登場されているとのことですが、残念ながら私には確認できていません。）

これらは、神話の世界の話ですが、鳥取県東伯郡東郷町に、織物業の祖神を祀る倭文神社があるそうで、この神社の由来として、「昔、この地方には織物を生業とする倭文族が住んでいて、彼らが信仰する神を祀ったのが始まり。」と伝えられていることや、茨城県あたりが倭文織物の特産地であったという話も残っていること、また同じ名前の神社が、日本各地に数多くあることなどから、古代絹織物は大変貴重なものであり、その織物の職能をもつ人たちは、大変大切に思われていたということがうかがい知れます。

こういったことから「倭文神」は織物の祖神として現在に伝えられているものと思われます。

ちなみに、インターネットをくってみますと『「倭文」とは、古代織物の一種である倭文織りのことで、楮（こうぞ）や麻などを材料として布を織るときに、横糸を赤や青い色に染めて乱れ織りにしたもの。古代において、美しい織物は神を祀るときの最高供物のひとつだった。』と紹介されておりました。

話を、倭文神社に戻します。

二の鳥居の奥に舞殿があり、舞殿と本殿とは少し傾斜のある廊でつながっています。

舞鶴市内にある多くの神社に見られるように、この神社も本殿は、瓦葺の覆屋に囲われていて、風雨に直接さらされることのないようになっていて、なかは暗く、外からはっきりはわかりにくいのでが、格子越しに覗いてみますと、中に立派な「流造り」構造の本殿があり、その前扉には菊の模様を中心に透かし彫りで美しい模様が施してあるのがみえてきます。

倭文神社舞殿

祀られた時代は、延長５年（927 年）の延喜式神名帳に記載があることから、それよりは古い時代であったと思われます。

現在の社殿は、天保 5 年（1834 年）に、舞殿は安政 6 年（1959 年）に建てられたものとありますから、150 年以上にもなる古い建造物ということになります。

境内には摂社として、大峰（神様はわかりません）、愛宕（火除けの神様、火産霊命）、武（出雲の祖神、素盞男）、八幡（厄除けの神様、応神天皇）、澤（素盞男命のお子、事代主）、大川（食物の神様、保食神）、秋葉（火除けの神様、秋葉大権現）、金毘羅（大和の祖、大物主）の八柱の神様を祀った祠があり、舞鶴市内に数ある神社の中でも社格の高さを感じさせられます。

おそらく、むかしはもっと大きな神域を有したものと想像できますが、そのことは定かではありません。

本殿（覆屋の内部に鎮座）

写真中央は二の鳥居と舞殿、左側の２つは摂社の祠

【舞鶴の神様達（式内高田神社）】

（会報 第103号 平成23年８月発行）

私は、舞鶴市内の昭和台という所に住んでいますが、その昭和台から、西の方向、直線距離にして約３００メートルのところに「高田神社」があります。

高田神社の所在地は、舞鶴市の西地区の上安というところで、私の通勤路のほぼ中ほどにあり、国道２７号線との上安分岐三叉路近くで、分岐路に背中を向けて本殿がありますから、正面は道路からは見えません。

高田神社

国道２７号線の大手交差点（西舞鶴の１７５号線との分岐交差点）を、小浜方面に向かい、１キロメートルほど走ると、ＪＲ線路沿いにこんもりとした神社境内の森が見えてきます。国道からのアプローチは、上安交差点の手前のところでＪＲ小浜線の無人踏切を渡り、線路沿いを２００メートルほどいくと、神社の西側側面入口に至り、さらにここからまわりこんで南側の正面からとそれぞれ境内に入れるようになっています。車でアプローチすることはできません。

正面からの境内入り口には、石の明神型の鳥居、そして石の階段を数段あがったすぐのところに木製の鳥居と立ち並び、まっすぐ拝殿（というより神楽殿の様相ですが）に向かい、拝殿から本殿までは、屋根付き廊下でつながっています。

神社の南側は田圃で、１００メートルほど先は、私の住んでいる昭和台との間の小山になっていますから、正面南側に伸びる参道はありません。

本殿を囲う屋形

前回、同じ西舞鶴の池内地区にある「倭文神社」を紹介しましたが、その神社と並び、この高田神社も延喜式神名帳の丹後国加佐郡（たんごのくにかさこおおり）十一社の一つに挙げられている由緒ある神社です。

祭神は、建田背命（たけだせのみこと）と天細女命（あめのうずめのみこと）とあります。

建田背命の始祖は、天火明命（あめのほあかりのみこと）、つまり初代神武天皇の前に、大和大王であった饒速日尊（にぎはやひのみこと）ですから、この神社の社格がかなりなものであることは確かです。

以前にもこの稿で紹介しましたが、天皇史以前の大和の大王饒速日尊は、素戔嗚尊（すさのおのみこと）の５番目の子供さんで、つまりは出雲系の方ですが、このように丹後国加佐郡（現舞鶴市周辺地域）にも、饒速日尊のながれをもつ方が祀られているのですね。

高田神社本殿

天細女命（あめのうずめのみこと）が合祀されている理由はわかりませんが、高田神社は、もともとは現在の地ではなく、もう少し伊佐津川よりにあったものが、１７世紀の末ごろ、伊佐津川の氾濫で社殿が流出したことやら、その後の社殿の老朽化などから、幾度かの変遷を経て現在の高田神社のところに鎮座されるに至ったと伝えられていますから、そういった移転の過程で天細女命と合祀されていったようです。

おそらく近辺のどこかに、天細女命を祀った神社も存在していたものと思われます。ちなみに天細女命は、日向系の方で天照（あまてらす）の岩戸隠れのさいの神話に出てくる神様です。

岩戸にお隠れになった天照をそとに連れ出す際、岩戸の前で裸踊りをにぎやかに踊ったというあの神様ですね。

高田神社境内は、そんなに広大ではありませんが、氏子の方々が大事におまもりしておられるので、大変きれいに整備されています。

本殿は、やはり風雨から守るための屋形で覆われて、正面からしか見ることが出来ませんが、拝見すると熊野大社に極めて類似した入母屋風の造りと思われます。屋根は、柿葺（こけら）き（檜の板を重ねたもの）です。

境内摂社

北側の境内に摂社７社が祀られていて、南側から「秋葉神社」、「大川神社」、「兵主神社」、「水天宮神社」、「稲荷神社」、「広峯神社」、「天神社」と名札がかけられています。

ちなみにこれらの神々を簡単に紹介しますと。

秋葉神社の祭神は、「火之迦具土大神（ひのかぐつちのおおかみ）」、秋葉大権現で知られる火除けの神様。

大川神社の祭神は、「保食神（うけもちのかみ）」で食物をつかさどる神様。

兵主神社の祭神は、「八千矛神（やちほこのかみ）」で素戔嗚尊の別称。

神社アプローチ

水天宮の祭神は、「天御中主大神（あめのみなかなぬしのおおかみ）」で安産の神様。

稲荷神社の祭神は、「宇迦御魂（うかのみたま）」で稲作の神様。

広峯神社の祭神は、「素戔嗚尊（すさのおのみこと）」で旧出雲国の支配者。

天神社の祭神は、「高皇産霊神（たかみむすびのかみ）」で智慧の神様です。

これらの摂社が、何時頃から、高田神社の境内に勧請されたかはわかりませんが、いずれも偉い神様達であることから、建田背命が地方を治めるにあたり、地方発展と安寧を祈願されたということかもしれませんね。

おことわり。

今回この稿の準備のため、改めて高田神社に取材に行き、自らも写真を撮りましたが、掲載写真のうち、一部はホームページに掲載されているものも利用させて頂きました。

写真を利用させていただいたホームページのＵＲＬは、以下のとおりです。

http;//www.geocities.jp/k_saito_site/doc/tango/takataj.html

【舞鶴の神様達（式内日原神社）】

（会報 第 104 号 平成 23 年 12 月発行）

舞鶴市内に「女布」という地名の集落があります。この地を「にょう」と呼びます。舞鶴市の市街地は、大きく分けると西地区、中地区、東地区と三つに別れていて、女布地区は、西地区に位置し、国道２７号線を京都方面から西地区の市街地に入り、城南中学の南交差点を左折して、１キロメートルほど奥まったところです。道は狭く、乗用車で侵入するのにはかなり注意が要りますが、交通量はあまり多くありませんので、おもったよりはスムースに行くことができます。

縄文時代から集落があり、舞鶴は遠い昔、この女布から始まった、との言い伝えがありますが、海からは遠く、谷あいに位置し、そんなに耕作地も広くないので、「ほんと？」っていう感はあります。ただ、立派な旧家が立ち並んでいるので、由緒のある地区だということは、容易に想像できました。

この女布地区に、式内「日原神社」は鎮座されています。

神社の手前１００メートルぐらいのところに車をとめて、歩くこと３分。石の鳥居と、そこから１０メートルほど間隔をあけて朱に塗られた木製の鳥居の２つの鳥居が見えてきます。いずれも明神型（上の部分が曲がっているタイプ）の鳥居です。

日原神社の鳥居

そして、鳥居の奥２０段ほど石段をのぼると、拝殿と舞鶴の神社に多くみられる、風雨から護る屋形に囲われた本殿があります。

延喜式神名帳に掲載された、丹後国加佐郡（現舞鶴）１１社のうちの１社、いわゆる式内社です。

どなたが祀られているのか、由緒書きは見当たらず、長老にも話を聞くことができなかったのですが、種々の情報によると「天日腹大科度美」と「倉稲魂」と２柱が、祀ってあるということです。

「天日腹大科度美」といわれる神様については、申し訳ありませんが、現在のところ、私の知識の中にはありません。

私見ですが（はっきりとした根拠ありせんが）、奈良桜井市の大神神社の神域の中に、檜原（ひばら）神社というのがありまして、ここには天照皇大神が祀られていますから、名前の字は違うものの、おなじ「ひばら」という呼び名ですので、この神社のご神体は、天照皇大神、つまり、大日霊女貴尊（おおひるめむちのみこと）、という解釈も面白いのではないでしょうか。

ちなみに、奈良の檜原神社は、日原社とも呼ばれているそうです。

日原神社の話に戻します。

本殿に向かって右側に、長屋形式の境内社があり、稲荷（稲作の神）、大川（保食の神）水無月（月夜見）、當勝（天の忍耳）の４柱の神々が祀られています。

それぞれの神様を簡単に紹介しますと、

稲荷の神は、宇迦（うか）の御魂（みたま）またの名を倉稲魂尊（くらいねたまのみこと）ともよばれ、素戔之男尊（すさのおのみこと）の６番目のお子で、名のとおり稲作の神。（赤い鳥居がたくさん並んで、キツネが神前に安置された神社で、日本各地にある神社です。）

日原神社の拝殿と本殿

大川の神は、あらゆる食べ物を司る神で、由良川（京都府舞鶴市）沿いの大川神社の神様と同じです。

水無月の神は、太陽神天照皇大神に対して陰の関係にある、つまり夜を支配する神ですが、モデルとなった実在の神は見当たりませんので、神話などでつくられた架空の神格との解釈もあります。

當勝（まさかつ）神社は、正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊（まさかあかつかちはやひあめのおしほみみのみこと）を祀る神社で、この方は、日向系の神様で、大日霊女貴命のご長男です。日向（宮崎県）と豊ノ国（大分県）の境界あたりの国を治めておられたようですが、詳しいことはわかりません。

この當勝神社が境内社として祀ってあることからも、日原神社の神様は、大日霊女貴命だという想像もできるのです。なんてったって、親子ですからね。

私事で恐縮ですが、私の孫の名前が「勝哉」と申しまして、この神様の諡号の中にその字が含まれていますので、大変身近に感じてしまうのですが、単なる「ジジ馬鹿」でしょうか。

それはさておき、ここでお気づきの方もおられると思いますが、日原神社に祀られた２柱の神のうち、もうひと方は「倉稲魂」と前述しました。本殿に祀られた神様が、境内社にさらに祀られているということは、本来おかしいですよね。ですか

ら、「天日腹大科度美」と「倉稲魂」の２柱は、後の時代になってから、祀られたもので、当初は、違っていた、つまり初めは「大霊女貴尊が祀ってあったのだ。」という解釈もできるわけです。

実は、日原神社から、さらに２～３百メートル奥まったところに、「金峰神社」という神社があります。石の鳥居をくぐって、急な坂道を数分かけて登ると神殿があるのですが、(やはり風雨から護る屋形に囲われた立派な造りの神殿でした。)柿の収穫をしておられた、地の人に聞いたところ、「天王さんと呼ばれている。」とのことでした。天王さんとは、牛頭(ごず)天王のことで、素戔之男尊の別称ですから素戔之男尊を祀ってあるものと思われます。

日原神社本殿

以前にこのシリーズで紹介したかとも思いますが、素戔之男尊と大日霊女貴尊は、2 世紀の初めごろ、一緒に住まわれていた時期があり、お二人の間に宗像３女神、つまり多紀理姫・多岐津姫・狭依理姫がお生まれになったということからしても、金峯神社と日原神社が隣接して祀られていても、全然不思議はありません。

今回の日原神社の神様の一人「天日腹大科度美」が、実はどなたがモデルなのかわかりませんので、ちょっと私の想像を入れながら、この稿を書いてみました。

この稿を読まれる方の中には、この神様のことをよく知っておられて、お叱りを受けるかもしれませんが、そこのところはひらにご容赦ください。

金峯神社の本殿

【舞鶴の神様達（式内三宅神社）】

（会報 第 105 号 平成 24 年 4 月発行）

筆者の舞鶴との出会いは、昭和 41 年、海上保安庁入庁の時に始まります。島根の高等学校を卒業し、学生服で舞鶴の地を踏みましたが、当時は、将来舞鶴に永住することになろうなどとは全く考えもつかず、ましてや舞鶴市内の神社を片っ端から訪ねて歩くなどということは、想像だにしないことでありました。

ただ、この稿の最初のほうで申したかとおもいますが、そのころ、日本の神々や神社に全く興味がなかったのではなく、幼い時から石見神楽に接しておりましたので、舞鶴に限らず、神社には少なからず関心があったことは事実です。

今回の神社、「式内三宅神社」の存在は、昭和 41 年当時から認識はしておりました。と申しますのが、海上保安学校の学生にとって、外出の折にバスの車窓から必ず目に入るのが、この神社と高倉神社（のちに取り上げることになる神社）なのだからです。

三宅神社登口石段

国道 27 号線を東側（小浜市方面）から舞鶴市内に入ってくると、大門通りという商店街の直線道路になっていますが、この通りの西の端に突き当たった小山の中腹の木々の間に、「式内三宅神社」の白い看板が見受けられます。神社につながる階段の登り口にも、神社名を表した石碑が建っていますのですぐ目につきます。

三宅神社本殿

それでは、三宅神社自体の話題に移っていきます。

27 号線東門（海軍鎮守府の東門があったところで現在北吸とよばれています。）の公園脇の登口石段をのぼり、山の中腹の鳥居をくぐると拝殿があり、さらにその奥に「流れ造」瓦葺の本殿があります。舞鶴市内の多くの神社に見られる、風雨よけの覆屋に囲われた形ではなく、神殿は直接外部にさらされた形になっているようです。

神社の屋根は、普通は茅葺、桧皮葺、柿葺というのが原則ですが、瓦葺の神社は、近代に新しく建て替えが行われからでしょう。もっとも銅板で葺いたものもあり、三宅神社の拝殿の屋根は銅板葺です。これは柿葺の金属バージョンとみれば、私は違和感を感じませんが・・・。また鳥居にかけられた大しめ縄が、いやに鮮やかなオレンジ色をしており、大変きれいになわれているので、触ってみると、なんとこれが、合成樹脂製の細ひもを縒り合せて造られたもので、式内社と呼ばれる古い神社にしては、大変現代的な感じを受けさせられます。

神社鳥居としめ縄

神社は、地元の皆さんが氏神様として敬い、守り伝えていくものですし、日本の神道は偶像崇拝でもなく、八百万の神々を受け入れる寛容的な民族の宗教ですから、神社の形や建物にこだわる必要はないとは思いますが・・・・。

神社の由来書によれば、この神社は、もともと現在地から直線距離にして約 500 メートル西側にある、三宅谷（現在は三宅団地となっています）に鎮座されていたものが、明治 24 年、時の政府により、舞鶴鎮守府の軍域に指定されたことから現在の地に遷宮されたとあります。

拝殿正面

もちろんその名の通り、延長 5 年（927 年）の延喜式神名帳の旧丹後国加佐郡のうち、現舞鶴市内にある神社 11 社のうちの一つになっていますので、それ以前からある、古い由緒ある神社とはいえましょう。お祀りされている神様は「豊受姫の命」とありますので、豊穣の神様で大日霊女貴尊のひ孫さん、（神武天皇の日向時代の娘さん）にあたる方です。

伊勢の外宮をはじめ、近隣では大江町の元伊勢外宮、宮津の籠神社などにも祀られておられ、日本の古代の神々の中（特に日向系）では、重要な神様であります。

境内には、本殿に向かって左側に「吉備の大臣神（吉備眞備公）」と「稲荷神社（宇迦の御魂）」、右側に「秋葉神社（愛宕）」と「恵比寿神社（大国主の尊のご子息）」の 4 柱の境内社が鎮座されています。何度もいうようですが、秋葉神社は防

火の神様、稲荷神社は豊穣（稲作）の神様、恵比寿様は商売繁盛の神様です。吉備の大臣の神については、私の知識の中にないため調べてみましたら、古事記以後の朝廷の役人さんだったようです。吉備の国（現岡山県）出身のかたで 8 世紀初頭に活躍した人のようですから、古代の神々とは少し異なる形、つまり天満宮の菅原道真公、豊国大明神の豊臣秀吉公、東照大権現の徳川家康公の類の神様ということでしょう。

門番の狛犬（唐獅子）

三宅神社も舞鶴市内では結構人気のある神様らしく、季節・季節に行われる例大祭やお正月の初詣の時には、多くの市民でにぎわっているようです。

三宅神社には、鳥居と拝殿の間に、「阿吽の狛犬」一対が神社守りというか門番の形で飾ってあります。狛犬といっても、形は唐獅子ですが、これは相当古いものらしく、背中にはコケがびっしりと生えていて、長い間この神社の門番を務めていたことがうかがわれます。

明治 24 年にこの地へ遷宮されたとありますから、120 年以上たっていることになりますね。境内に遷宮 120 年の記念植樹と新しい看板が建っていたので、最近、記念のお祭りをされたのだと思われます。

ところで、動物の門番は、唐獅子の狛犬が多いようですが、動物の門番を配置するのは、圧倒的に出雲地方の神社だそうです。一方日向地方の神社になると、人型の門番が多いのだそうです。

私自信がこの目で確認したわけではありませんので、はっきり言いきることはできないのですが、ある文献にそのようなことが書かれておりました。

何かの機会に確かめてみたいなと思っています。

なお、蛇足ながら、昔から認識していた三宅神社ですが、私は今年 3 月 4 日の日曜日に初めて参道を登ってお参りをしてきました。

【舞鶴の神様たち（神崎「湊十二社」）】

（会報 第 106 号 平成 24 年８月発行）

湊十二社参道

「丹後太郎」と呼ばれる「由良川」の河口付近の東側、「槇山」のふもとに神崎地区はあります。

神崎は、古くは北前船の基地としてしられ、由良川を利用した水運の要衝であったと伝えられていますが、現在は、海水浴を中心とする観光と半農半漁の町になっています。北近畿タンゴ鉄道の「かんざき駅」で下車、南北に走るメインストリートを北にむかい、郵便局のある交差点を左折するとすぐにその参道が見えてきます。

「かんざき駅」からは、歩いて十分ほどでしょうか。

もちろん車でも神崎には、アプローチできます。

湊十二社鳥居

参道入り口には、参道を表す石柱２本と、大きな自然石の石灯籠とがあり、そこからまっすぐ西に向かって約百メートルほどの参道が伸びています。

神社境内入り口に明神型（笠木という一番上の部分がそっている形）の石の鳥居、続いて下半分が石、上半分が木製朱塗りという、やはり明神型鳥居が並んでそびえています。

本殿は、ご多聞にもれず、風雨から守るための覆い屋で囲まれており、中に寝殿造り風の柿葺き社が鎮座されています。かなり傷んではいますが、格調の高い立派な本殿です。また、今年の７月に訪れた時には、本殿の覆い屋前面と後面の壁が新しいものになっていました。

覆い屋の全面

覆い屋のなかには自由に入れるようになっていて、本殿に向かって左わきに、奉納された「オフネ」（千石船の模型）

が安置され、右わきには馬に乗った武将の絵馬が飾ってありました。

境内社としては、本殿に向かって左側に、「秋葉神社」、「金毘羅神社」、「大川神社」、「須佐男」、「請龍山善宝寺」（お寺）、「稲荷神社」、向かって右側に「恵比寿神社」が祀られています。御寺が境内社としてあるのは珍しいですね。

現在の神社の名前は「湊十二社」です。

「湊」は、江戸時代、北前船の基地となっていたとの伝承がありますから、現在の「港」とほぼ同様の意味ととらえてよかろうと思いますが、「十二社」とあるのは、十二柱の神様の寄り合い（大変不敬な言い方ですが）という意味にもとれます。

舞鶴の社に関する文献によりますと、

「湊十二社へは、遠隔地の海運業者からの奉納も多かった。明治になって、古事記などから「湊十二社」にふさわしい水の神や、災難徐の神十二柱を選び出して祭神としたのではないか。」とあります。

湊十二社本殿

すなわち、大禍津日神（おおまかつひのかみ）、大直毘神（おおなおびのかみ）、伊豆能売神（いずのめのかみ）、速佐須良売神（すみずらめのかみ）、沫那芸神（あわなぎのかみ）、沫那美神（あわなみのかみ）、頬那芸神（つらなぎのかみ）、頬那美神（つらなみのかみ）、天之水分神（あまのみくまりのかみ）、国之水分神（くにのみくまりのかみ）、天之久比奢母智神（あまのくひぎもちのかみ）、国之久比奢母智神（くにのくひぎもちのかみ）の十二柱の神々です。

いずれも水難や災いを防ぐ神様だそうですが、あまり聞かない名前の神様ですので、詳細は省かせてもらいます。

ところで、日本各地の神社は、複数の神様を合祀したものが多いのですが、古い神社で、これほどの数の神様を合祀したものは希です。

十二神が合祀された明治以前は、どなたか別の方が祀られていたのではないかと思い、地元の人に尋ねてみたのですが、詳しい事がわかりませんでした。

ただ、大川神社（舞鶴市内の代表格の神社）の高田神主さん（禰宜）が湊十二社の年中 のお祭りをされるということを教わり、禰宜の高田さんを訪ねて聞いたところ、もともとは「熊野大神」だということがわかりました。

舞鶴市史にも、「湊十二社権現は熊野権現をさすものと考えられる。」との記述があるそうですので、熊野大神であると考えて良さそうです。

なお、行ったことはありませんが、東京の新宿に「十二社」と呼ばれる熊野社があるそうですので、このあたりも根拠にしてよさそうです。

湊十二社境内社

さて、熊野の大神と言いますと、私の稿では頻繁にご登場され、尊敬する神様、素盞雄命（すさのおのみこと）であります。

諡号を神祖熊野大神奇御食野命（かむろぎくまのおおかみくみけぬのみこと）と申し上げ、出雲神話の八俣遠呂智（やまたのおろち）退治で有名な神様です。

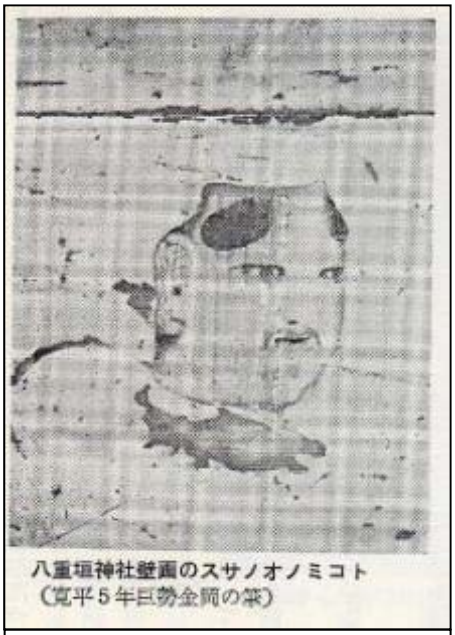
ここで、ちょっと気になるのは、十二社の主神が素盞雄命であるのに、境内社の一つに「須佐男」を祀った祠があることです。

「素盞雄命」と「須佐男」は同じ神様ですが、本殿に祀られた神様が、同じ神社の境内社として祀られていることはありません。

これも、湊十二社が明治になってから、古事記のなかから十二人の水運に関係のある神々を本殿に合祀したため、「須佐男」を境内社として祀ったということからおこったことなのでしょう。

私個人的には、偉大な神祖素盞雄命を本殿から境内社に御遷し申しあげるのはいかがなものかという気がしないわけでもありませんが。

ちなみに、一の鳥居の掲額「湊十二社」の文字は、初代舞鶴鎮守府長官東郷平八郎長官の筆によるものであるという説明書きが境内にありました。



島根県の八重垣神社
素盞雄命の肖像画

また、本殿左わきに奉納された「オフネ」（千石船の模型）は、市指定有形民俗文化財ということでしたが、多少痛みが激しいように見受けました。

ほかに同じ有形民俗文化財として、「奉納和船２艘」という説明書きもあったのですが、それは見ることが出来ませんでした。

【出雲の神々に思う】（会報 第107号 平成24年12月発行）

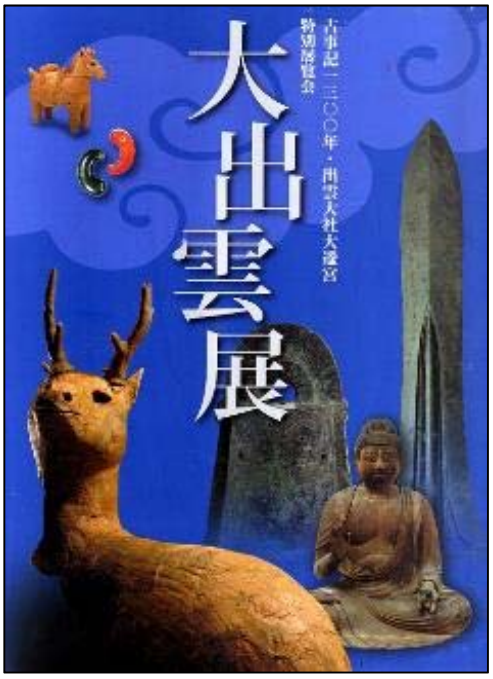
これまでこの稿では、しばらく舞鶴の神々について紹介してまいりました。

しかし、今回は、この秋足を運んだ京都での「大出雲展」をとおして、出雲というものを考えてみようと思います。

従来から申し上げていますように、私は、考古学という見地から古代をのぞき見ることが大変不得手で、常に神社やそれに祀られている神々をとおして、古代大和や出雲、そして日向をのぞき見てきました。

饒速日命大和大王説、邪馬台国日向説、天照皇大神卑弥呼説等々がそれなのですが、その意味で、昨今、畿内を中心とする各地の発掘調査により、考古学上の史実が白日の下に晒されていくことで、私のロマンが崩れさるという寂しも感じておりました。

しかし、今回の「大出雲展」をとおして見る古代出雲の話は、私のロマンに逆らうもではなく、むしろ神話のなかに塗り込められてしまった古代出雲が、史実として結びつけられているようで、とてもすがすがしい気持ちにさえなるのであります。



行かれた方もあるかと思いますが、今年の10月から11月にかけて、京都市内の京都国立博物館で「大出雲展」が開催されました。今年は、『古事記』が712年に完成してから1300年の節目にあたり、また来年2013年は、60年ぶりに出雲大社の大遷宮が行われるということで、この「大出雲展」は開催されたということでした。

私も10月に見学に行きましたが、出雲で出土した銅剣、銅鉾、銅鐸や、埴輪などなど、古代を彷彿させる数々の展示物に触れ感動してまいりました。

もちろん私のほかにも、多くの人々が見学しておられ、みなさんそれぞれの博識の上に立って、あるいは、グループの方から説明を受けたりして見学しておられましたが、古代の歴史に興味をお持ちの方の多いのには驚いたものです。

８世紀の初めに編纂された、古事記・日本書紀（これら二つの古書は、一般に「記・紀」と呼ばれています。）は、日本最古の歴史書とされています。（記・紀の間には８年の開きがありますが・・・・・）しかし、出雲に関する記・紀の記述を見ます

と、すべてが神話になっており、およそ事実とはかけ離れた物語で構成されています。

稗田阿礼が諳んじていた日本の建国に至る物語を、大安万呂が編纂献上した。というような言い伝えになっています。（このあたりの詳しいことは勉強不足でわかりませんが・・・）

記・紀神話は、高天原神話、出雲神話、日向神話の３つの部分から成り立っているのですが、記・紀が成立した頃は、裏日本の辺境に過ぎなかった出雲が、これらの神話の世界では、なぜか重要な位置を占めておりまして、たとえば、日本人なら誰でも子供の頃父母から聞いた大国主命の国譲り、素戔男尊の八岐大蛇退治、大国主命が因幡の白ウサギを助けた話などがそれですね。

しかし、すべてこれは現実とはかけはなれた内容、つまり歴史的実話として信ずるに足る物語ではありません。もちろん、当時、力（権力）のある人物によってなされた偉業など、なにかしらモデルになる様な出来事があったのかもしれません。

ではなぜ、記・紀は、神話に封じ込めながら出雲の話をこれほどくわしく紹介しているのでしょうか。

旧出雲大社の模型

そのことについては、つい最近まで深い謎につつまれていて、辺境の地の神話じみた話には、史実的価値がないと思われていたのです。その理由は、考古学上、史実として認められる決定的な証拠、つまり裏付けとなる発掘品の乏しさによるものと思われます。

出雲地方（現松江市を含む）には、実は重要な古い神社が多くありますし、また、四隅突出型墳丘墓の存在などからも、古代出雲の存在を事実として考える人たちも沢山ありました。しかしながら、やはりその証拠の乏しさから、どうしても説得力に欠け、出雲はなかったという解釈が通説だった様です。

現出雲大社

ところが２０世紀の末になって、島根県の出雲地方で、次々と考古学上の重要な発見が相次ぎました。まず1984年に、簸川郡斐川町大字神庭字西谷（現在は出雲市）いうところの、広域農道建設予定地の工事事前発掘調査で、それまで国内で発見された総数を上回る358本もの大量の銅剣が一箇所から見つかりました。これらの銅剣は、小さな丘の中腹に四列に並べて埋められていたそうです。またその翌年、同じ場所で、今度は銅鐸６個と銅矛１６本が発見されました。（この遺跡は、荒神谷遺跡といいます。）

もう一つの発見は、1996年、荒神谷遺跡から3キロぐらい離れたところの大原郡加茂町（現雲南市）の農道建設現場で、山を崩していたショベルカーが偶然に銅鐸をひっかけて掘り起こしたことから、工事を中止して発掘調査をしたところ、この場所からは最終的に39個の銅鐸が発見されました。（この遺跡が加茂岩倉遺跡です。）

詳細な調査の結果、発掘された銅剣、銅矛、銅鐸の中には、日本各地の他の遺跡には見られない出雲特有の特徴を持った物も含まれていることもわかったそうです。

これらの出来ごとにより、「出雲は存在しなかった。」というそれまでの考古学の常識は、大きく覆され、「古代に出雲は存在した。」ということが白日のもとに照らされることとなりました。つまり神話に封じ込まれてしまっていた出雲が、史実としての出雲の存在になったということなのです。

ところで、出雲大社は全国的大変有名な社ですが、そのほかにも出雲地方（現松江市近郊も含めて）には、由緒ある神社が沢山あります。

松江市の神魂（かもすじんじゃ）神社（松江市所在）などは、国宝に指定されている神社です。現在出雲大社の祭祀は、日向族の天の穂日を祖とする千家（出雲大社の宮司は出雲国造とよばれる）が行っておられます。もともと出雲国造は、神魂神社の祭祀を行っておられたようですが、杵築大社（出雲大社のこと）が創建された際に、移って来られたと伝わ

神魂神社

っています。出雲国造が亡くなった際の「火継の儀式」（宮司相続の儀式）は、現在でも神魂神社で行われているとのことです。

出雲の熊野大社（松江市所在）なども、あの有名な和歌山の熊野本宮大社の元宮という説もあります。

出雲熊野大社

これら２つの神社を含めて、他に真名井神社、揖夜神社、六所神社、八重垣神社の６社を「意宇６社」（いずれも松江市内）と呼び、出雲地方の由緒ある重要な神社とされています。

そして、この地方にある神社は、みな大社造り（妻入りタイプ）のお社ばかりです。

ちなみに、「意宇」は「おう」と呼び、旧地名でありますが、現在でも意宇川という川が流れています。

こういったことからも、古代出雲が、あるいは神話に出てくる神々（あるいはそのモデルとなった実力者？）が架空のものであるはずがないと思うのです。

【舞鶴の神様たち（天久神社）】（会報 第 108 号 平成 25 年４月発行）

JR 西舞鶴駅から、西に向かって若狭湾沿いを走るローカルな鉄道が、北近畿タンゴ鉄道です。その路線の西舞鶴駅から三つ目の駅に「丹後神崎駅」というのがあり、前回紹介しました「湊十二社神社」は、この神崎駅から北のほうにあります。

反対の南へ、つまり由良川の上流へ向かって約０．５キロのぼった所に油（ゆ）江（ご）という地名の７０軒余りの集落があります。

今回紹介する「天久神社」は、この油江というところにあります。

この油江地区へは、車でもアプローチできますが、神崎へ至る府道から集落へ入る道は、たいへん狭いので注意は必要です。前置きが長くなりました。

天久神社本殿

天久神社は、油江集落の南端、槇山の西側の山裾に鎮座されており、「流れ造り」、「柿葺き」の立派な本殿は、覆屋で守られ、外から簡単に見ることはできません。（舞鶴市の神社には、このような覆屋でおおわれた神社が大変多いです。）

覆屋は、本来、本殿を風雨や太陽光線の害から守るためのものですが、この神社の覆屋の屋根には、千木や勝男木があって社の造りになっており、集落で大切に祀られていることがよくわかります。

鳥居は、「明神型（笠木が反っている型）」の石造りで、「天久神社」と神社名の立派な掲額がかかっています。

天久神社の鳥居

拝殿とか神楽殿はなく、鳥居をくぐり、左に折れるとすぐに本殿の正面に向かいます。（右に折れると社務所のような建物がありました。）

本殿は、一段高くなっており両脇には境内社があって、向かって右側のものは一社、左のものは複数の脇宮になっています。

地元の人は、「テンキュウジンジャ」と呼んでおられるようですが、「テングジンジャ」と呼ぶ（？）という説もあるようです。

境内タブの巨木

境内社務所のそば（境内の端のほうになる）に、御神木でしょうか（？）、タブの巨木があり、その大きさは圧倒されるほどで、確かなことはわかりませんが、木の大きさからして、神社がかなり古くからそこに存在することを物語っているようです。

私がこの神社を訪れたのは、昨年の秋でしたが、境内に由緒書などの案内が見当たらず、どなたが祀られておられるのかが確認できなかったので、ホームページを覗かせてもらったところ、

『社格は、「村社」祭神は「聖武天皇・火産霊命・奥津姫命・奥津彦命」、
境内に、「末社五社」が祀られている。』

ということでした。（末社に祀られている神様はわかりませんでした。）

聖武天皇は、仏教を深く信仰され、奈良の東大寺を建立されたとする天皇ですね。

天久神社は、聖武天皇のゆかりの方（皇子か？）が、何らかの事情でこの地にこられてご滞在になられたことから、奉祀せられるようになり、その所縁から聖武天皇を祀ったという言い伝えが残っているようです。

火産霊命（ほむすびのみこと）は、文字通り火の神様で、伊邪那美命（いざなみのみこと）の神産み神話で、最後にお産まれになった神様です。そのために伊邪那美命は、火傷をおって黄泉の国へ行かれたという、あの神話の中に登場されます。

現在、全国津々浦々に所在する「秋葉神社」、「愛宕神社」に祀られている神様がこの神様ですね。

奥津姫命（おきつひめのみこと）・奥津彦命（おきつひこのみこと）は、かまどの守り神で、食べ物を煮炊きする場所の火の防ぎと、食物豊穣をつかさどる神様です。

余談ですが、島根県浜田市の私の生家の炊事場が、そのむかし、まだ土間だった頃には、その炊事場にこの神様を必ず祀っていました。

もっとも当時は、「荒神様」と言う名で祀っていましたが、奥津姫命・奥津彦命と同じ神様です。（中国地方の各県には、なぜか荒神様を祀った神社が、他地方に比べて大変多いということもある文献に紹介されていました。）

話をもとに戻しますが、つまり「天久神社」は火をつかさどる神々を祀った神社であるということのようです。

本殿覆屋と境内社

ちなみに、別の文献に、奥津彦命・奥津姫命は、大年神（おおとしかみ）と天知迦流美豆比売命（あめのちかるみずひめのみこと）のお子神様、また、別名お稲荷さんで有名な、宇迦御魂（うかのみたま）の甥・姪であるとかかれています。

大年神は、饒速日命（にぎはやひのみこと）の別称ですから、天知迦流美豆比売命は、三炊屋姫命（みかじきひめのみこと）ということになります。

饒速日命は、初代神武天皇（日向系）御即位以前の大和地方に、「大和の大王」として君臨された、天照国照彦天火明奇甕玉饒速日命（あまてらすくにてらすひこほあかりくしみかたまにぎはやひのみこと）のことであります。

数年前、私のこのシリーズのはじめのほうで、この神様を紹介しましたが、ご記憶でしょうか。

もちろんこの方は、出雲系の神様ですよ。（私は、島根県生まれだからというわけではありませんが、ガチガチの出雲系神々のファンなのであります。）

【舞鶴の神様たち（猪蔵神社）】

（会報 第 109 号 平成 25 年８月発行）

舞鶴市の市街地を離れ、国道 175 号線を西行して由良川を渡り、南行約４キロほど由良川をさかのぼると、岡田由里という地区があります。

ここから国道を離れて、由良川支流の岡田川の川沿いをさらに２キロほどのぼると、西芳寺という集落に入ります。

舞鶴では、最近売り出し中の、「旧大庄屋『上野家』」を目指し、同上野家の前で右折して岡田川を渡ると、石造りの明神型鳥居が目に入ります。これが今回紹介する「猪蔵神社『猪蔵大明神』」です。

本殿のあるところは、すこし小高い丘になっていて、「出舟陵」と呼ばれているそうで、神社は、丹後風土記残欠の「伍藏社」とも呼ばれているようです。また「室尾山観音寺神名帳」の「正三位猪鞍明神」とも別称されています。

石造りの鳥居をくぐると、鮮やかな朱（というより真紅）塗りの木造りの鳥居があり、額面金箔の掲額には「猪藏一宮大明神」と銘が書かれております。

私が訪れたのは、7 月 20 日の土曜日のことで、集落では、神社横の学校（岡田小中学校で、現在は廃校か？）で、ちょうど『万願寺まつり』という村おこしのイベントが開かれており、大勢の人で賑わっていました。

しかしすぐそばの神社には人影はなく、ひっそりと荘厳なおもむきで鎮座されていました。

この地区は、京野菜の「万願寺ししとう」（とうがらし）の栽培が盛んなようで、畑にはいっぱいししとうが目につきます。

ししとうのことはさておき、本題に戻ります。

朱塗りの鳥居をさらにくぐると、石段があり、石段を上がったところが広くなっていて、ここに幣殿（本殿から独立した建物で拝殿かもしれません）があります。多少痛みを感じさせる外観ですが、とても丁寧な入母屋造りの立派な建造物です。

猪蔵神社鳥居

ご祭神は、武甕槌尊（たけみかつちのみこと）、経津主尊（ふつぬしのみこと）の二柱ですから、春日大社系の神様ということになり

ましょうか。

このおふた方は、天児屋根 尊（あめのこやねのみこと）とともに、奈良の春日大社に祀られている神様で、日向系の軍神であります。

武甕槌尊、経津主尊、天児屋根尊は、春日三神とよばれ、全国にはこの春日三神をお祭りした神社は数多くあるのですが、三人のうち、武甕槌尊、経津主尊のお二人だけをお祭りした神社も少なくありません。

猪蔵神社もそのうちの一つでしょう。

幣殿(拝殿かも？)

猪蔵神社に関する資料（Web）によれば、

『縁起の伝えるところによれば、天武天皇白鳳元年（という元号はなく、白雉のことといわれる。「白鳳」は、よく神社などの縁起に見られる私年号である。白雉元年とすれば650年だがそれは孝徳天皇の時代)、江州粟津が原で合戦の時、武勇の神・香取大宮、鹿嶋大宮の両宮より、当地に歓請したとある。「江州粟津が原の合戦」は滋賀県大津市の瀬田橋の近くで、壬申の乱時の最後の決戦・「瀬田橋の戦い」(672年・7・22)のことを指していると思われる。壬申の乱といえば、高市皇子が志楽の阿良須神社に来られたとの伝承もある。
忍壁皇子の奏上により一宮の名を賜ったという。』(以上資料のまま)

春日三神は、神話の中に出てくる神様で、私的には、記・紀の話は、２世紀～３世紀ころの話をまとめたものと解釈しています。

国内で戦乱が起こると、何かしら、この軍神を祀る春日大社、香取神社、鹿島大社などから、勧請して、神社を建てられたのでしょうね。

勧請当初から、ちゃんと立派な神社を建造したとは限りませんが。

境内社は、八社で神殿に向かって右側に三社、左側に五社が祀られています。

本殿

右側のものは、荒神、祇園稲荷。左のものは、八幡、山王、愛宕、秋葉、妙見の各社です。

ちなみに山王さんとは、倭の大王饒速日尊（おうにぎはやひのみこと）であり、祇園さんは、その父素戔男尊（すさのおのみこと）、八幡は応神天皇、妙見さんは天の御仲主（あめ　な　かぬし）、そしてお稲荷さんは、宇迦御魂（うかのみたまか）で稲の神様です。

あと荒神は、食事（台所）、秋葉・愛宕は火をつかさどる神がみということで、神様としては権威ある神々が祀られている神社です。

境内社（五社）

この神社は、もとからこの地にあったのではなく、もう少し川上の岡田川と平川との合流点にあったものが、1160 年洪水で流されて、1162 年に現在の出舟山に再建されたといわれており、境内には神泉があり「舟陵の霊水」と呼んでいるとのことです。

「猪蔵」と「猪鞍」（いずれも「イノクラ」と読む）は、このあたりの霊水を指すのかもしれませんね。

今回の執筆にあたっては、原稿の一部に「丹後の地理・歴史資料集」を参考にさせていただきました。

【伊勢皇大神宮参詣】（会報 第110号 平成25年12月発行）

今年の短い秋の終わり（立冬を過ぎていますのですでに冬ですか・・・？）の11月13日、晴れ間をぬって、伊勢の皇大神宮に参詣してきましたので、今回は、「舞鶴の神様たち」を一回お休みにさせていただいて、伊勢の神様についてお話させていただきます。

今回の伊勢参りは、私の現役時代（海保）のOB会「八管かいほクラブ」主催のバスレクに参加しての参詣です。午前7時45分に舞鶴を出発、舞鶴若狭自動車道～京都縦貫自動車道～京滋バイパス～新名神高速～伊勢自動車道と自動車専用道路を乗り継いでの正味約4時間（途中関で昼食）でした。舞鶴では冷たい雨の降る天候でしたが、南の方に行くに従い、日が射してきてまずまずのお出かけ日和になってきまして、伊勢では、本当によい天気にまぐまれました。

ご承知のとおり、伊勢皇大神宮は、今年20年に１度の式年遷宮の年にあたり、つい１か月前（10月２日）に遷御（御神体を新宮に遷し奉る）されました。外宮の外、内宮14の別宮などすべてが新しく建て替わり、その費用は５００億円を超えるともいわれ、伊勢神宮の一大行事であります。

今回の参詣は、その遷御から１月ほどですから、正殿は、真新しい檜の白木でそれこそ節一つも見当たらず、装飾と言えば千木の先端部や破風、勝男木の先端部に金色の装飾が施されているだけで、それ以外は大変質素（に見えるだけで造作は大変手が込んでいますが・・・）な造りになっています。

もちろん伊勢神宮は、神明式の建造物で、鳥居の笠木（一番上部の横に渡してある部材）は真っ直ぐ、御本殿は本入り（屋根の傾斜の側が正面）です。

宇治橋の第一鳥居

礎石などはなく、柱は土中に埋め込んだ形。

千木は内削ぎ、勝男木10本で偶数とまさに女性の神様の神社である形式をとっています。

私は、過去に３～４回訪れた事はあるのですが、年のせいか、はたまた以前には、ここまで日本の神々に関心が深くなかったせいか、今回ほどは感激がなかった様な気がします。

ここですこし、私たちの住む丹後地方と伊勢神宮のかかわりについて触れさせていただきますと、

舞鶴の隣町福知山市の大江地区（旧加佐郡大江町）と宮津市の傘松地区（宮津市大垣）に、それぞれ「元伊勢」と呼ばれている神社があります。

「そもそも元伊勢神宮とはどういう神社なのか」ということをすこしお話ししなければなりません。

伊勢神宮に祀られておられる神様は、ご存じのとおり「天照皇大神（あまてらすおおみかみ）」様ですね。

初代神武天皇御即位以来、この天照皇大神様をはじめ、倭の偉い神様たちは、皇居内に祀られておられました。十代崇神天皇の御代、冷害による飢饉と病気の流行で、都をはじめ日本中（？）が滅亡の危機にさらされた時代がありまして、これは神々の怒りによるものとお考えになった天皇は、皇居内からこれらの神々を遷宮し、ちゃんとした神域を定めてお祀りすることをお決めになりました。（崇神天皇は、その名の通り、もっとも神々を崇め、最も多くの神社を創建された天皇であったとされています。）

内宮本殿

神々の遷宮の地は、現在の天理市や桜井市あたりに、次々とその鎮座の場所が決まっていったのですが、天照皇大神様だけが、なかなかうまくいかず、お鎮まりの場所探しは大変難航したようです。

一説によると、初め「倭の笠縫邑（現在の奈良桜井市三輪山の近く）」から、安住の地を求めてご出御され、「丹波」、（大江町、宮津とも今は丹後地方ですが、分国される以前は「丹波国」だったようです。）「滋賀県の甲賀・近江」、「三重県の上野・松坂」等々、何ケ所もの土地々々を、二十年以上（あるいは六十年とも？）にも及ぶ放浪（失礼な言い方で申し訳ありませんが・・・）の旅の末、やっと現在の

「三重県伊勢市」に落ち着くことが出来たとあり、その放浪の旅の途中のひとつに、「丹波の吉佐宮に四年間」というのがあるのです。

この「丹波の吉佐宮に四年間」のご行在所が、冒頭の大江町の「吉佐の宮」か？笠松の「籠神社」か？というのです。(ただし籠神社のほうでは、「与佐の宮に四年」と表記しております。)

天照皇大神様が、ほんとうはいずれの神社に仮宮を営まれたかは別の考証に譲るとして、このように丹後地方と伊勢神宮は深いかかわりがあるわけです。

もし、昔丹後地方の人々が、天照皇大神様を崇拝し、ご鎮座に協力したならば、現在の伊勢のにぎわいは、ここ丹後地方であったかもしれませんね。

ところで、私は、以前この稿で触れたと思うのですが、伊勢の天照皇大神様諡号を「撞賢木厳御魂天疎向津毘売尊(つきさかきいつのみたまあまさかむるかつひめのみこと)」と申し上げるということに触れたと思いますが、実はこの神様には「天照」という称号は諡号のなかにありません。

(諡号は「おくりな」のことで、仏教の場合の戒名に相当するものです。)

ちなみに諡号に「天照」の称号が含まれるのは、「天照国照彦天火明奇甕玉饒速日尊(あまてらすくにてらすひこあめのほあかりくしみかたまにぎはやひのみこと)」でこの神様は、奈良の大神神社をはじめ各地に祀られておられますが、この神様は、初代天皇の神武天皇以前の方のようです。

神武天皇が日向(現在の九州宮崎)系の方であるのに対して、饒速日尊は出雲系の方である(私はこの説を支持しています)といわれています。

五十鈴川

日本の古代史は、諸説ありますが、古代史の中心は、ご存じのとおり、古事記や日本書紀（記紀といいます）にその主たる根拠を求めています。7 世紀の終わりころに編纂された記紀では、神武天皇をはじめ八代までの信ぴょう性が定かでないのです。

とくに神話の部分に至っては、どう考えても現実の話ではありませんからね。

もちろん「言ったもん勝ち」というわけにはいきませんが、何かしら根拠があれば、まだまだ有力説として切り込む余地は充分にあると思うのです。

遺跡の発掘による出土品は、古代を物語る有力な証拠品ではありますが、多くの場合文献を伴わないもので、決定的に古代史実と結びつくものはすくないのではないでしょうか。

古代の歴史をひも解くには、神社（特に記紀以前の古社）訪ねることも大変意義あることだと思います。

今回の伊勢皇大神宮参詣をして、さらにもっともっと神社を訪ね歩き、古代のロマンを覗いてみたいと思った次第です。

【舞鶴の神様たち（田口神社）】

（会報 第111号 平成26年4月発行）

舞鶴市の東部寄りに「朝来」という地区があります。舞鶴湾に注ぐ朝来川がつくる谷川流域で、名峰青葉山（若狭富士とも呼ばれています）の山麓にひろがる街です。

この朝来地区を縦断する市道沿いに鎮座されているのが、田口神社です。

山を背にして、清水の湧く豊かな森の中に境内があり、道路脇の境内入口には、室町時代（享徳3年10月）に奉納（由緒書による）されたとされる、舞鶴市指定文化財の、大きな自然石の灯籠がたっています。

由緒書の看板（「田口神社縁起」とあります）を左に見て、明神型（島木の部分に反りのある形）の石造り鳥居をくぐると十六段余りの石段があり、その上に舞殿が建立されています。

田口神社鳥居

拝殿前には三対の狛犬がおり、本殿は、舞鶴の神社に多くみられる覆い屋（鞘堂というらしい）が建てられ、中に素晴らしい彫刻が施された本殿が建立されています。

社殿右側に境内社へと通じる参道

があり、森の奥に武大神社（ぶだい）、乳岩神社（ちちいわ）が祀られていました。また、神池の中には厳島神社（広島県の宮島）が祀られています。

田口神社の御祭神は、「豊受皇大神」（普通は「豊受大神」といい「皇」は言いません）、「誉田別尊」、「日本得魂命」の御三方で、それぞれ豊受大神は、伊勢の外宮の神様、誉田別尊（ほんだわけのみこと）は、八幡神とも呼ばれる応神天皇と同一神です。

そして、日本得魂命（にほんえたまのみこと）は、宮津市にある「籠神社」の海部氏系図に八世孫として登場する神様で、田口神社の創始者（この地方の実力者であった）です。

この神社は、「御田口祠」とも呼ばれていた神社で、神社入り口の前記由緒書（田口神社縁起）によると、

『当社は白鳳３年（653）この地方の国主でありました日本得魂命が、校倉をお建になり、豊受皇大神を勧請して　ここに田口祠を創始されたと伝えられ　以来一千三百有余年を経た古社でございます。

由緒書看板

豊受大神は伊勢の外宮・誉田別尊は宇佐八幡宮が大元でありまして産業の司神であり五穀豊穣・開運除厄・縁結び・安産など、あらたかな霊験がありますので　昔から多くの人々に親しまれ崇敬されてまいりました。

又、近世においては歴代藩主が毎年秋の大祭に参拝されその時は猿楽や三番叟が献奏されたと記録されております。』

とあります。（『　』内は、立て看板に書かれてあるとおりです。）

本殿は、京都府指定有形文化財、拝殿は京都府登録有形文化財に指定されています。

田口神社では、誉田別尊が登場されましたので、すこし八幡神について触れてみたいとおもいます。

境内狛犬

八幡神社の総本山は、大分県の宇佐市にある宇佐八幡宮ですが、この神社には八幡三神として「応神天皇」（誉田別尊）、

「比売神」、そして応神天皇の母である「神宮皇后」が祀られています。

ちなみに比売神というのは、宗像三女伸すなわち「多紀理」・「多岐津」・「狭依比売」（「市杵島比売」ともいい宗像奥津宮や厳島神社の主祭神）の三方のことです。

田口神社に境内社として厳島神社が祀ってあるのも、宇佐八幡の関係からでしょうか？

なお「比売神」については、諸説いろいろですのであしからず。

ところで、八幡神社には、三大八幡宮というのがありまして、大分県宇佐市の「宇佐八幡宮」、京都府八幡市の「石清水八幡宮」（別に「男山八幡宮」ともいいます。）、そして、神奈川県鎌倉市の「鶴岡八幡宮」の各八幡宮（鶴岡八幡宮に替えて福岡の「筥崎宮」をいう場合もあるとのことです。）ですが、弓矢の神様として厄除けに御利益があるとされ、特に親しまれていますね。

本殿

清和源氏をはじめ、昔は全国の武士から武運の神様として崇拝され、神仏習合時代は、「八幡大菩薩」ともなり。「南無八幡大菩薩」の幟をかざして戦った武将は数知れずだったそうです。ちなみに第二次大戦末期の「雷神特別攻撃隊」の旗印にもなっていたとの話もあります。

国内各地には、他に数多くの八幡神社がそれぞれの鎮守の神様として存在します。その数は、稲荷神社次いで２番目といわれています。

読者の皆さんのお近くにもきっとあるのではないかかと思います。

また、田口神社の境内社の「厳島神社」、「武大神社」、「乳岩神社」について、少し触れさせてもらいます。

厳島神社については前述のとおりです。

武大神社ですが、天王さんともよばれる素戔嗚尊を祀る神社のことです。

素戔嗚尊は、出雲神話の八俣大蛇退治で有名な神さまです。

乳岩神社は、宮崎県の日向伝説で、お乳の出ない母親がお参りすると出るようになるとの言い伝えのある神社が元になっています。

こういったことから、田口神社は、なかなか由緒のある神社といえるようです。

今回、この稿を書くにあたり、「日本得魂命」の詳細についていろいろ調べていたところ、インターネット上で「文献史学研究室」のホームページに「真説日本古代史」という論文にヒットしました。

17 部構成の論文で、1 部から 6 部までが特に私の興味をそそる「神社伝承学」を元にした、2 世紀ごろの古代日本史を語る構成になっています。

この論文は、私が「神社伝承学」に興味をもった時期よりももっと早く 1990 年代にまとめられているようですが、残念ながら、まだ書籍となってはいないようですので、仕方なく論文をダウンロードして読んでいます。

出雲族中心あるいは天孫族中心の考古学、はたまた古事記、日本書紀中心の考古学ファンを問わず、古代史に興味のある方は是非覗いて見られることをお勧めします。

もちろん、歴史書の存在しない時代の「時代考証」ですから、それだけにロマンがあります。

以前の稿で触れたことがありますが、日本の考古学には諸説いろいろありますが、遺跡の発掘の中で決定的な証拠が見つかったり、決定的な古文献が発見されればはっきりする（もっとも文献は人間が記したものである以上、完全な客観的な見地で書かれたものと期待することはできませんが・・・）わけですが、そういった時が訪れるまではロマンはロマンです。

ともあれ私は、これからもこのロマンを求めて、舞鶴の神社に迫っていきたいと考えています。

田口神社境内の御神木

【舞鶴の神様たち（泉源寺の熊野神社）】

（会報 第112号 平成26年8月発行）

舞鶴市は、山紫水明の町です。文字通り美しい山々に囲まれ、また天然の港、舞鶴湾奥深くに位置する町です。その舞鶴市街地を貫く国道27号線を東に向かい、あと3キロも走れば福井県の県境に至るという場所に、今回の「熊野神社」は鎮座されています。それは、国道27号線から北側に5～600メートル入った笠松山のふもとにあたり、近くには、東舞鶴高等学校があります。

題名に「泉源寺の熊野神社」として地名の「泉源寺」と記載したのは、舞鶴市内にはたくさんの「熊野神社」があるからです。

少なくとも著名なものは10社近くはあるでしょう。

「熊野」と名が付く神社で、現在最もよく知られているのは、熊野三山（本宮大社、速玉大社、那智大社）で、この三山は総じて全国の熊野神社の本山となっています。

以前にもお話ししたことがありますが、

現在の熊野本宮大社の主祭神は、出雲系の饒速日命（にぎはやひのみこと）（事解男命（ことさかのおのみこと）は別称）です。新宮市の速玉大社の主祭神が、やはり出雲系の素戔之男命（すさのおのみこと）（速玉男命（はやたまおのみこと）は別称）、そして那智大社の主祭神が日向系の伊弉冉命（いざなみのみこと）（牟須美大神（むすびおおかみ）は別称）です。

因みに「古代日本正史」の著者原田常治氏は、同著書に、和歌山県の熊野三神（新宮、本宮、那智宮）の神様について触れておられるなかで、『熊野の地名は十二代景行天皇のとき、現在の新宮市に速玉大社をお建てになる時、素戔之男命がお亡くなりになった出雲の熊野（現在の松江市）という地名を、またその諡号の「神祖（かむろぎ）熊野大神（くまののおおかみ）」の名をとって「熊野」という地名になった。』といっておられます。

出雲熊野大社

出雲の熊野は、意外と知られていません。時間のある人は、島根県の地図を開いてご覧になってみてください。松江市の南のほうに「八雲町熊野」という地名を発見できることでしょう。

もちろん立派な熊野大社(前頁写真)が鎮座しておられ、御祭神は素戔之男命であります。

話題が本題から外れてしまいました。

舞鶴市の泉源寺の熊野神社ですが、やはり調べてみると祭神は、熊野三山(社)から勧請された饒速日命、素戔之男命、そして伊弉冉命でありました。

ちょうど神社の取材に行った７月５日、神社の隣にある「笠松山知性院」というお寺の境内で、地元の椋本さんという方から話を聞くことができたのですが、椋本さんは御祭神について「祖父から伊弉諾(いざなぎ)、伊弉冉を祀ってある神社だと聞いています。」とおっしゃっていました。地元ではそのように口伝されているようですね。

泉源寺の熊野神社

たぶん古老の伝承のどこかで「伊弉諾」が入り込み、「饒速日命」や「素戔之男命」にとって代わってしまわれたのではないでしょうか。

「伊弉諾命」「伊弉冉命」の二柱は、記紀神話における八百万の神々の祖として切り離しては考えられない二柱ですから仕方ありませんね。

因みに熊野那智大社では「伊弉冉命」(女神さま)が御祭神で「伊弉諾命」の方は祀られていません。だいたい水の神様(那智の滝)は、女神さまのようです。

泉源寺の熊野神社は、前述のように笠松山の東麓の鬱蒼とした森に囲まれた静寂の中に鎮座されています。

鳥居は石造りの明神型(笠木と島木が上方に反りあがっているタイプ)で、緑色地に金文字で「熊野神社」と浮彫りされた額がかかり、額にはきれいな飾り屋根が配してありました。

泉源寺の熊野神社本殿

鳥居をくぐると、尻を持ち上げて頭を低くした威嚇体勢の駒犬(唐獅子）が護り、さらに石段を進むと本殿に達します。

本殿は、覆い屋で保護されていて、中に微細な美しい彫刻で飾られ、軒下の棟木や梁、そして柱の上部には、竜、象、唐獅子の彫刻が施されていて、大変美しい木組み構造の建造物です。神社建物形式は流れ造りです。

七五の桐を透かし彫りした扉といい、屋根に配した菊の御紋などいかにも日本の高貴な印象を受けます。

本殿に向かって左側に、屋根続き(長屋風)境内社があり、七鬼神(厄除けの神様？)、天満神社(菅原道真)、大川神社(水速女神)、蛭子神社(事代主神)、牛頭神社(素戔之男命)の五社が祀られています。

熊野神社の境内社

牛頭様は、主祭神と同じ素戔之男命ですから、同じ神様が境内社に祀られているのはおかしいのですが、祀られた経緯はわかりません。

泉源寺村の旧名は「波多＝はた」といい、この社も、元は「波多明神」と呼ばれていたということですが、そのころの御祭神はどなたかわかりません。

いつのころからか、熊野三所権現を勧請してこの社にまつり、明治初年の神仏分離令以後は「熊野神社」と呼ばれるようになったという伝承があるようです。

したがって、御祭神は、伊弉冉命、速玉男命(素戔之男命の別称)、事解男命(饒速日命の別称）であります。

この話が事実とすれば、熊野神社と呼ばれるようになったのは、時代が、ずーっと下るというわけですが、波多明神のまま伝承されていれば、この神社もまた違った歴史があったものと思われます。

熊野神社の東隣の「笠松山知性院」という真言宗のお寺ですが、このお寺が昔泉源寺と呼ばれる古刹があって、そのながれをくむのではなかろうかという説もあるようで、泉源寺という地名はそこから来ているのではないかということです。

熊野本宮大社の写真がＨＰにありましたので、この稿に転載させていただき、最後に熊野本宮大社についてちょっと触れさせていただくことにします。この本宮大社には一昨年訪れて念願の参詣を済ませました。

現在本宮大社には、六柱の神様が祀られています。すなわち天照大神、伊弉諾命、熊野牟須美命(伊弉冉命)、家都御子大神(けちみけのおおかみ)、速玉之男命、事解之男命ということのようです。（家都御子大神と事解之男命は、いずれも饒速日命の別称ですから五柱の神様というのが正しいのではないかと思っていますが・・・。）

写真には三棟の社殿が映っていますが、写真の奥の方の平入り型の神殿に四柱、と手前の妻入り二棟の神殿にそれぞれ一柱の神様が祀ってあるようです。

妻入り型は、出雲系神様の神殿の特徴ですから、独立した二棟の神殿は、それぞれ饒速日命と素戔之男命、平入りは日向系神様の神殿の特徴ですから、天照大神、伊弉諾命、伊弉冉命が祀られているのではないでしょうか。

熊野本宮大社（和歌山）

【舞鶴の神様たち（武内伊智布西神社）】

（会報 第113号 平成26年12月発行）

「丹後太郎」の異名を持つ暴れ川「由良川」。平成16年の23号台風で国道走行中の観光バスが屋根まで水没し、乗客37人がその屋根に上って一夜を明かした（翌日全員救助）ことで、全国的に有名になった暴れ川です。

現在、水防対策として、堤防工事が急ピッチで進められていますが、昨年9月の18号台風、今年の8月豪雨と相次いでまたまた水があふれ、福知山市内を洪水となって襲い、暴れ川の異名を存分に知らしめました。

その由良川の下流域は、舞鶴市内の西側に沿って北東に流れて日本海若狭湾に注いでいます。

舞鶴市から福知山市に至る道路は、その由良川の両岸に沿って走り、川の北西側が国道175号線、南東側が府道55号線となっています。

舞鶴から175号線を福知山・宮津方面にむかい、由良川大橋の手前の藤津交差点を左折して、府道55号線に入り由良川沿いに上っていきますと、舞鶴市のはずれに桑飼地区という地名があり、その桑飼下杉ケ迫に今回の「伊智布（いちぶし）西神社」は、鎮座されています。

この神社は、「延喜式」神名帳によれば、旧村社の「伊知布西神社」とされ、現在の神社名とは「ち」の文字が異なっていますが同じ神社です。

神社名は旧地名が由来と伝えられています。

神社境内は北向きで、府道55号線に面し、車をおりると目の前に神社名を標記する石柱が立っているので、すぐに目につきます。

数段の石段を登ると、石造りの明神式鳥居（笠木の両端が上方に反った形の鳥居）があり、さらに石段を登って本殿へと至っています。

境内入口は北向きですが、本殿は東向きに建てられていて、神明式（屋根の傾斜方向が正面となる神社の形式）覆屋に覆われ、中には流造りの本殿が鎮座するという造りになっています。

現在の本殿は1766年の建造といわれていますが、神社の創建は、905年ころと伝えられているとのことです。

主祭神は、道振尊（？）とも伊奘諾尊・伊奘冉尊ともいわれているようですが、詳細は分かりませんでした。伊奘諾尊・伊奘冉尊は古事記にいう国産みの神様として有名ですね。

伊智布西神社境内入口

私の考えでは、道振尊がもともとの主祭神であったのが、後に記・紀の上で数ある神様のうち、尊い一組、伊奘諾尊・伊奘冉尊を祭神としたというのではないかなと思っていますが・・・・。

そして、境内社として「神明神社」、「稲荷神社」、「三柱神社」、「八坂神社」、「水無月神社」、「地主神社」が主拝殿の左右に祀られています。

これら境内社の御祭神は、それぞれ神明神社が国常立尊、稲荷神社が倉稲魂尊（宇迦御魂）、三柱神社が火産霊神、奥津比古尊、奥津比売尊、八坂神社が素戔嗚尊、水無月神社が月読尊、地主神社が大国主尊でありまして、いずれも格の高い（こういう表現は不敬かもしれませんが・・・）神々であります。

これらの神々については、これまでもこのコーナーで触れてきましたが、今回改めて私見をも交えて、ちょっと解説をさせていただきます。

神明神社の国常立尊は、記・紀の最初のほうで紹介される神で、神名からは国家形成に関係した神様と想像されますが、記・紀神話のなかで、『伊奘諾・伊奘冉尊が天の浮橋から天の逆鉾で下界をかき混ぜ、そのしずくが島となって淤能碁呂島となった。』というお話よりも以前に現れる神様で、地上（海上も含め）を神格化した神様ということになっています。

しかしそれは、あくまで神話の中でのはなしで、一説によれば、国常立尊は、大日霊女貴尊（卑弥呼）のボーイフレンド（不敬な言い方で申し訳ないですが・・・。）とも言われています。

記・紀神代での神々の登場の様子は、いずれも現実離れした物語にすぎません。　が、しかしまったく実体のない神々の姿であったかというと、そうだともいえません。

伊智布西神社本殿

何がしか政治に関与した実力のある人々を、神格化したと考えるのが自然です。

そういった観点から、古代日向地方の政り事を行った大日霊女貴尊のブレーンであったことを否定することはできません。

次に稲荷神社の倉稲魂尊ですが、この方は出雲系の神様で、素戔嗚尊の第六番目のお子神様で、文字通り五穀・食をつかさどる神様です。

別名宇迦御魂とも称されていて、この方を祀る稲荷神社は、朱塗り丸太造りの鳥居がたくさん並んでいることや、境内入口や拝殿前の両側に狐が配置されているというのが特徴です。

京都伏見のお稲荷さん（伏見大社）が有名ですが、日本各地に数知れず存在する神様です。

ちなみにお稲荷さんといえば「狐が祀ってある。」と勘違いされる向きもありますが、それは間違っています。「一番のお供えは油揚げ。」ということは決してないのです。

三柱神社は、文字とおり三柱の神々が御祭神で、いずれも火をつかさどる神様です。

このうち火産霊尊は炎の神様、そして奥津比古尊、奥津比売尊の二柱は、竈（かまど）の神様です。

古代、人の生活の中で煮炊きのための火と竈は、大変大切なものだったに違いありません（もちろん現在でもそうですが・・・）。しかし取り扱いを誤ると火事という災いを招くということで恐れられてもいたでしょう。そういったことから、「荒神」として大切に祀られる神々で、いまでこそあまり見かけませんが、私の幼少のころは、台所の竈の近くに「荒神さん」のお札が掲げてありました。

ちなみに全国に、火除けの神様を祭る愛宕神社が点在します。この神社にはだいたい火産霊尊が祀られています。また火除けの神様としては秋葉神社という神社が点在しますが、こちらは秋葉大権現と称して新しい神様であります。

八坂神社の素戔嗚尊（すさのおのみこと）については、たびたび紹介していますので、今回は紹介を差し控えます。

境内社の内の三つの神社

水無月神社の月読尊（つくよみのみこと）は、私もあまりよくわかりません。また調べてみると水無月神社というのは、あちらこちらにあるようですが、必ずしも月読尊を祀っているとは限らないようです。

舞鶴市の西地区、吉原にある水無月神社のお祭神は、月読尊です。

記・紀神話では、伊奘諾尊が黄泉の国から逃げ帰り、阿波岐原でみそぎをされた際、右目からお生まれになったのが月読尊ということになっています。

お名前からは、夜を支配する神様ということで、日輪の天照大御神に比肩する神として神話に登場させたのではないでしょうか。

そして地主神社の主祭神ですが、大国主尊（おおくにぬしのみこと）となっています。ほかに大国主尊のその父母神、素戔嗚尊とそのお妃奇稲田比売尊（くしいなだひめのみこと）、さらに奇稲田比売尊の父母神、足摩乳尊（あしなづちのみこと）（足名椎（あしなづち））・手摩乳尊（てなづちのみこと）（手名椎（てなづち））が合祀されています。

境内社の一つ

合祀されている神々からして、ここでいう大国主尊は現在一般的に知られている因幡の白ウサギの大国主尊ではなく、饒速日尊（にぎはやひのみこと）であると思われます。

因幡の白ウサギの大国主尊は、別名大己貴尊（おおあなむちのみこと）といわれ素戔嗚尊の末娘神様である須世理比売（すせりひめ）の婿養子です。

以上今回は、伊智布西神社の紹介に乗じて、境内社の神様の話のほうがメインになってしまいましたが、悪しからず・・・・。

＜後注記＞

今回、神々の尊称を「尊」に統一して表記させていただきましたが、しかし「命」と呼称される場合も大変多くあります。

いずれも「みこと」と読み、頭に「の」附して「～のみこと」といいます。

「尊」と「命」の使い分けについて、『北海道西野神社のホームページ「神道いろは」』では、

『日本書紀』神代巻の冒頭に「至(いた)りて尊(とおと)きを尊(みこと)と日(い)ひ、自餘(そのほか)を命(みこと)と日ふ。並(みな)、美舉等と訓(みこと)む(よ)」とあり、「日本書紀」では、天地開闢(てんちかいびゃく)に際して現れた国常立尊や伊弉諾尊・伊弉冉尊、天照大神と共に伊弉諾尊より成った月読尊、また天照の命を受けて葦原中国(あしはらなかつくに)（我が国のこと）に天降った邇邇芸尊(にに ぎのみこと)など、神様の中でも特に至貴な神様には「尊」が、それ以外の神様には「命」が用いられている。』

と紹介されています。この記述からいえば、筆者も使い分けするほうがいいのかもしれませんが、神々は等しく尊いお方との思いから「尊」に統一して表記させていただきました。

【舞鶴の神様たち（鵜葺草葺不合命(うがやふきあえずのみこと)）】

（会報 第114号 平成27年5月発行）

舞鶴市は、リアス式の地形のため山によって東、西、中の三つの地区に分かれています。

その中の西地区は、国道27号線を京都から来ると最初の地区になる街で、明治以後に発展した、東、中地区に比べるとその歴史は古く、関ヶ原以前は、細川家の所領、後には京極家、牧野家がおさめた城下町です。

ＪＲ西舞鶴駅から27号線を少し北に下った南田辺地区は、旧田辺城蹟、舞鶴市西支所、舞鶴警察署、裁判所、検察庁、それに藩校だった明倫小学校などがあり西地区の中心地になっています。

鷓鴣神社石碑

その中心地、舞鶴警察署と明倫小学校に挟まれた一角に、今回話題の「鷓鴣神社」はひっそりと鎮座されています。

もともとは、広大な境内のあった神社だったようですが、天正の時代、細川家がこの地に築城する際、境内に取り込まれたということで、神社の裏側（国道 27 号線側）に石垣が残っています。

市街の中心地にありながら、あまり訪れる人もなく、私がこれまで幾度か境内に足を踏み入れた際も、お参りの人を見かけたことがありません。

でも、境内は、きれいに清掃されていて、神社の建物などの保存状態もいいので、「氏子さんたちにしっかり守られているのだなぁ～。」ということがよくわかります。

神社名は、石碑には「鷓鴣神社」とありますが、これを「うの森神社」と読むのだと説明書きがされていました。

神社は、東向きに石の鳥居があり、境内へのアプローチは北側、つまり鳥居の向きに対して直角に入る形になっています。

鳥居は、神明型、拝殿・本殿の向きは平入り（棟に対して直角に入口がある形式）の神社です。

まさしく、伊勢神宮（日向系）と同じ形式ですね。

御祭神は、天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命（あまつひたかひこなぎさたけうがやふきあえずのみこと）という神様でありまして、古事記上巻の「海幸・山幸綿津見の宮」の項の最後のほうで、火遠理命（おりのみこと）（海幸彦）と豊玉毘売命（とよたまびめのみこと）の間にお生れになった御子であるということが書かれています。

鷓鴣神社鳥居

（古事記原文）

『於是思奇其言、竊伺其方產者、化八尋和邇而、匍匐委蛇。卽見驚畏而遁退。爾豐玉毘賣命、知其伺見之事、以爲心恥、乃生置其御子而、白「妾恒通海道欲往來。然伺見吾形、是甚怍之。」卽塞海坂而返入。是以、名其所產之御子謂**天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命**』

漢文で大変読みづらいですが、言うところは、

『豊玉毘売命がお子をお産みになるとき、大きなワニにお姿を変え、のたうちまわっておられた。（火遠理命は）驚いて逃げ出してしまわれたので、豊玉比売命は、それを恥じて海へ帰って行かれた。（お生れになった御子の名は、アマツヒダカヒコナギサタケウガヤフキアエズノミコトという。』

とのことであります。

「鵜草葺不合」は、産室の屋根がまだ葺きあがっていないときに産気づかれたというところが、上記原文の前に書かれていて、そこからお名がつけられたのだというのが、古事記のこのくだりです。

多少、お話が深入りしすぎた感はありますが、つまりは、鸕鷀神社には、そうした神様を祀ってあるということであります。

古事記のうえでは、**鵜葺草葺不合命**は、天照大神のお孫さんということになりますが、実際は、天照大神（大日霊女貴命）の御子様（末子）という説（原田常治氏の説で、筆者はこちらのほうを指示しています。）もあります。いずれにせよ、初代神武天皇のお父様であります。

鸕鷀神社拝殿

鸕鷀神社本殿

ちなみに古事記では、諡号に「建」とありこれを「たけ」と読ませていますが、日本書紀では**彦波瀲武鸕鷀草葺不合命**とあり「武」の字をあててありますので武勇に優れた神様でもあったとおもわれます。

別名を、熊野楠日 尊（くまのくすひのみこと）ともうされ、全国に点在する「熊野」と名がつく神社と同じ名前がついていることに何かを感じるわけであります。

つまり、この神様は、日向系の神様でありながら、あだ名に出雲系素戔嗚尊（諡号「神祖熊野大神奇御食野 尊（かむろぎくまのおおかみくしみけぬのみこと）」）の名がついているということを大いに主張したいわけであります。

かねがね、素戔嗚命は大日霊女貴命と深い関係（夫婦）があったと申してきましたが、このこともそうした考察の根拠のひとつなのです。

＜お詫びと訂正＞

前回の項で伊奘諾尊・伊奘冉尊のお二人が天の浮橋から「**天逆鉾**」で最初の島を作られたこをと紹介しましたがこれは間違いで、「**天沼矛**（あめのぬほこ）」が正しいところであります。訂正してお詫びします。

この稿を執筆中に、日本海海難防止協会桑島専務理事の突然の訃報を受けました。筆者が現役（第六管区海上保安本部船舶技術部長）時代、桑島氏は同本部海洋情報部長をしておられ、ともに働いておりました。

日本海海難防止協会舞鶴事務所長として勤務していた折も、大変お世話になった人で、突然の訃報には言葉もありません。

深く御冥福を祈る次第であります。

【舞鶴の神様たち（笠水（かさみず）神社）】

（会報 第115号 平成27年８月発行）

今回は「笠水神社」を紹介します。国道２７号線は、東西舞鶴を貫通する幹線道路ですが、この国道２７号線に沿って、綾部方面から舞鶴市内に入ってくると、まず西舞鶴地区に差し掛かります。西舞鶴市内に入りますと、北近畿タンゴ鉄道の線路をまたぐ跨線橋があるのですが、跨線橋の下、西側に笠水神社は鎮座されています。舞鶴市引土（ひきつち）というところです。

笠水神社神域

神社前の道路は、一方通行になっていますので、跨線橋の手前から国道を降りて神社前の道路に入らないと、跨線橋を通過してから近づくのは大変です。

神社境内は平坦で、神社前の道路からの距離もないので、楽にアプローチできます。

入口に石灯籠があり、「明神形」の石造り鳥居をくぐると木立の中に、神社本殿を見ることができます。

この神社は、一般的に「笠水神社」（カサミズジンジャ）と呼ばれていますが、「宇介美都」（ウケミズ）あるいは「真名井」（マナイ）とも呼ばれるということが、境内入口の、神社を紹介した小さな案内板に書いてありました。

「舞鶴百選」の標柱もありますので、舞鶴市内では名所となっているようです。

同じ案内板によると、祀られている神様は、海に関係した「笠水彦」の神と「笠水姫」の神で、先史時代に丹後一円で勢力を誇った、海部族の海部直（うみべのあたい）の祖神とありますから、海を支配された海賊だったと思われます。

もっとも海賊といっても、今日にいう悪党ではなく、海の上で勢力をふるう豪族（村上一族とか住吉さんのような存在）だったのでしょう。

ご本殿と脇宮（いずれも覆い屋）

「直」は「国造」と同様、大和朝廷時代、地方豪族に与えられた姓で、いわば地方官僚のようなものですから、盗賊集団のようなものではなく、社会的に高い地位にあった人たちです。海部族の長と

して尊敬されていたことは、容易に想像できます。

この神社、今は、海からはなれた内陸側に鎮座されていますが、昔、この地は、池内、真倉、高野の３つの川の合流点であり、この辺りまで海岸だったとも、紹介されていますので、現在は海辺になくても、不自然ではありません。

ご本殿

本殿は、市内各社のご多聞にもれず覆い屋で保護されていて、中をのぞくと、神社形式は春日造りか書院造り（海に関係するということで、あるいは住吉さんと同じような作りかもしれませんが・・・）を思わせる美しい建造物で、正面３枚の扉には菊の御紋章の透かし彫りが施してあります。屋根は「柿葺き」です。

覆い屋の屋根は、鉄板張りのようでしたが、その覆い屋も立派で、「千木」や「鰹木」がちゃんと載せられています。

本殿に向かって右隣りに、本殿と接して脇宮があり、これも覆い屋に護られ「天照皇大神」が祀られています。

脇宮の祠

脇宮の神社形式は、伊勢神宮と同じ日向系の造りで、「平入り」「柿葺き」の美しい祠です。

小さいながらも、脇宮としては大変立派で、屋根には、「千木」も「鰹木」も施工されています。

ただ、「千木」が外削ぎ、「鰹木」が７本（奇数）と、男神様を祀る特徴を示しているので、私的には「天照皇大神？」と少々疑問を持たざるを得ませんが・・・・。

境内社

境内社は３社で、本殿の北側にあり、３棟続き（長屋様）の祠の右から「八

坂神社」、「稲荷神社」、「愛宕神社」がそれぞれ祀られています。

これらの神様達は、これまでにも何度も紹介していますが、「八坂神社」は、素戔嗚命（すさのおみこと）、「稲荷神社」は、宇迦御魂（うかのみたま）、「愛宕神社」は、火産霊命（ほむすびのみこと）です。

素戔嗚命（すさのおみこと）は、出雲系の神様の祖ですし、宇迦御魂（うかのみたま）は、穀物の神様で素戔嗚命のお子神様、火産霊命（ほむすびのみこと）は、火をつかさどる神様です。

境内社の祠は、まだ新しく、屋根は銅板葺きできれいな祠で、神社名も濃い墨のままでした。

私がこの神社を訪れたのは、８月９日、折からの極暑の中で、人影は見当たりませんでした。

ちなみに、今回初出（？）の火産霊命は、別名火之迦具土（ひのかぐつち）の神とよばれ、伊弉冉命（いざなみのみこと）がお産みになった火の神様です。

伊弉冉命は、火の神をお産みになったため火傷を負われてお亡くなりになり、黄泉の国へいかれます。夫神の伊弉諾命（いざなぎのみこと）は、妻を死に追いやった火之迦具土を殺害したのち、黄泉の国へ伊弉冉命を訪ねる云々・・と、このあたりのことが、古事記の語るところです。

古事記には、このあたりの物語を、次のように記述されています。

原文

『次生火之夜藝速男神、亦名謂火之炫毘古神、亦名謂火之迦具土神。因生此子、美蕃登見炙而病臥在。

―中略―

伊邪那美神者、因生火神、遂神避坐也。』

訳文

『つぎに火をつかさどる、火之夜藝速男神（ひのやぎはやおのかみ）をお産みになった。この神は別名を火之炫毘古神（ひのかがびこのかみ）ともうされ、また火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ）とももうされる。

このお子をお産みになったことが原因で病の床につかれた。

―中略―

伊弉冉神は、火の神をお産みになったことが原因で、ついにお亡くなりになられた。（黄泉の国へ旅立たれた。）』

もちろん、あくまで神話の世界のはなしです。

なお、＜中略＞のところでは、病の折に、嘔吐物や排泄物などからお生まれになった神々のことが書かれています。

もちろん神話ですから信憑性のほどはわかりません。

【舞鶴の神様たち（金毘羅大権現）】

（会報 第116号 平成27年12月発行）

私が住んでいるのは舞鶴市の西地区にある昭和台というところですが、その隣に「福来」という地区があります。

そこには食料品や日用雑貨を扱うミニスーパーがありますので、よく訪れるのですが、そのスーパーの裏側の小高い場所に、立派な石の鳥居や燈籠があります。

福来地区側の鳥居（竹藪の中）

ところが、付近は竹藪で覆われていて、参道らしきものも見当たらず、簡単には登ることができそうにありません。また鳥居には掲額もありません。

近所の人に聞いても、「なんでも山のズーっと上のほうに社があるとは聞いているけど詳しいことはわからん。」との答え。

参道（と思われる‥‥‥）の藪を見ると「さもありなん。」って感じです。

以前から大変気になっていて、いつかは調べてみたいなと思っていました。

一方、今年の４月から、地域防犯推進協議会の防犯推進委員（ボランティア活動）をしていまして、この福来地区を含めた数個の町内会を巡回するようになったのですが、巡回路のひとつに「天台」という地区があり、その町内の奥のほうにも、立派な石の鳥居が私の目にとまっておりました。

こちらは、ちゃんとした参道が付随してありまして、当然私の調査対象に加えておりました。

夏のある日の巡回中、天台地区で田仕事をしておられた長老の方に、「山の上に神社があるのですか？」とたずねたところ、「だいぶん上のほうへ上がったところに、金毘羅さんがあるよ。」とのことでした。

天台地区側の鳥居

また、その長老からは、地元の人たちにより毎年１月、４月、11月に例祭を行っていること。

昔は、天台地区から福来地区、遠くは

吉原地区（漁港）のほうからも大勢の人たちが祭りに参加していたこと。

現在、例祭は、天台地区の人たちが中心になって行っていること。

住民の高齢化で、山の上での例祭は４月だけにして、１月と 11 月は山のふもとで行っていること。

などなど、この神社に関する貴重なお話を伺うことができましたが、その中で、気になったのが、「昔は福来地区の住人達も･････････」という話でした。

現在、天台、福来周辺は、すっかり住宅地に変貌しましたが、昔はこの辺りは、民家は少なく、ほとんど田んぼや畑だったところで、天台地区、福来地区を結ぶ道も、畦道のようなものだったそうです。

やっと、福来地区の、例の参道が竹藪で覆われた石の立派な鳥居の存在の謎が解けました。

つまり、その鳥居は福来地区側（西側）から金毘羅大権現へお参りするもう一つの玄関口になっていたのです。

ちなみに福来側の鳥居と天台川の鳥居とは、山を挟んで直線距離にして約 1,000 メートルほどはあります。

９月 23 日の秋分の日は、大変素晴らしい好天に恵まれ意を決して、神社に登ってみることにしました。天台地区から彼岸花の咲誇る道を、例の鳥居にアプローチ。

参道入口

田んぼの中にしっかりとした参道があって、燈籠が道の両側にそれぞれ立っており、その４～50 メートル奥に石の鳥居があります。

鳥居には「鴻巣山」（こうのすざん）とかかれた木製の掲額あり、鴻巣山とは神社の山号です。

10 時 05 分登り開始。鳥居のふもとに「五丁」と刻印された石塚があります。神社までの道のりを表したものです。

一丁は普通、約 110 メートルだそうですから、上まで 500 メートル強というところでしょうか。栗の実やどんぐりがいっぱい落ちていて、道端はイノシシ君の耕

した跡（ミミズや虫を掘り起こしたもの）もそこらじゅう、イノシシ君の大切なテリトリーと見られます。

参道途中の休憩所

しかし、参道は、距離はさほどでもなく、また荒れている様子もないのですが、大変な急坂で、ゆっくりとした足取りで登っても息が切れるほどです。

三丁と四丁の間に休憩所も設けてあります。

休憩所は、まだ新しい建物のようですから、高齢化した住民のために最近建てられたものと思われました。

「これでは、山上での例祭が年一回となったのは仕方がないなぁ～。」と納得しながら、登りはじめてほぼ 20 分後、やっと神社に到着しました。

神社は、銅板葺きの平入形式で、造りがどことなく四国の金毘羅大権現（総本山）を思わせる形ですが、屋根頂部の棟両端のシャチ鉾と鬼瓦が、神社としては「ン？」といった感じではありました。

山上のご本殿

本殿にも、この神社の山号の「鴻巣山」と書かれた掲額があり、本殿内部を覗くと、「金毘羅大権現」と染め抜かれた赤い大きな提灯がつり下げられ、その奥に祭壇があるようです。

境内には「弘化２年 10 月」（1845 年、徳川政権末期）と刻印した燈籠があるので、その時代にはこの山の上にあったものと思われます。

棟の鬼瓦や、シャチ鉾はこの社を建て替えまたは修復されたときに銅板葺きとともに設置されたものと思われます。詳細はわかりませんがおそらく近年のものでしょう。

祭神は金毘羅大権現ですから「大物主尊（おおものぬしのみこと）」ということになります。

讃岐の金毘羅大権現から勧請されたものでしょう。

大物主尊の正体については諸説ありますが、原田常次（古代日本史研究家）氏によれば「天照国照彦天火明奇甕玉饒速日尊（初代神武天皇以前、大和に君臨した大王）である」です。（私はこの説を盲信しておりますので、この説で話を進めていきます。）

大物主尊は、四国の金毘羅様として祀られているだけでなく、奈良の桜井市三輪町（三輪素麺で有名）にある大神神社の主祭神として祀られておられるほか、布留御魂大神（天理市石上神宮）、日本大国魂大神（天理市大和神社）、家都御子大神（和歌山本宮町熊野大社）、賀茂別雷神（京都市北区上賀茂神社）、大山咋大神（大津市坂本町日吉神社）の名で、全国の名だたる大社に祀られておられます。

もうだいぶ前に本シリーズで触れましたが、出雲の素戔嗚尊のお子神様ですが、記・紀（古事記、日本書紀）の編纂者の意図により古代の歴史から消された、神武天皇以前に大和を支配されていた方です。

このあたりの説をいろいろ書きますと、ページを要しますので省略させていただきます。

境内社

余談ですが、この金毘羅神社のお祭りは、「青葉山天台寺」（神社登口の鳥居から東へ100メートルのところにあるお寺）の僧侶が行っておられるということです。残念ながら、どういった経緯でいつごろからそうなったのかは、わかりませんでしたが、昔に神仏習合の時代があったことを思えば、全く不思議ということもいえません。ただ、明治以後では珍しい例だと思っています。

舞鶴市内で神主のいらっしゃらない、神社の例祭は、市内の大きな神社の神主さんが、出張してお祭りされるのが普通なのですが、この神社だけは違うとのことでした。

なお、境内には、本殿の北側に境内社（ご祭神不詳）や江戸時代の古い石灯籠、昭和になって作られた石灯籠などもありました。

私が登った時は、若干雑草がのびていましたが、これも山上の神社であることをおもえば、地区の方々の高齢化などとともにいたしかたないのかもしれませんね。

右の写真は、ご本殿正面の掲額で「鴻巣山」と彫刻されています。

本殿正面掲額

【饒速日尊という神様】（会報 第117号 平成28年5月発行）

舞鶴市内には、大小200社以上ともいわれる数多くの神社があり、これまで「舞鶴の神様達」のシリーズでそれらの神社を紹介しているところですが、今回は少し趣向を変えて、表題の名前の偉大な神様についてのお話をしてみたいと思います。

実は、この会報の私のコーナーの初めのころ（平成20年から21年頃）でも何度か紹介させていただいている神様ですが、今回はこの神様に光を当て、ちょっと詳しく見てみようということにしました。

この神様は、「天照国照彦天火明櫛御玉饒速日尊（あまてらすくにてらすひこあめのほあかりくしみかたまにぎはやひのみこと）」という諡号（しごう）（「おくりな」とも読みます）をおもちの大変偉大な（この表現が適切かどうかは分かりませんが・・・）神様です。

おそらく諡号（しごう）としてこれほど長いものは、日本にはほかにないのではないでしょうか。

出雲の大王素盞之男尊（すさのおのみこと）と稲田毘売尊（いなだひめのみこと）との間にお生まれになりました。

饒速日尊（にぎはやひのみこと）は別称として、「大物主櫛甕玉尊（おおものぬしくしみかたまのみこと）」、「布留御魂大神（ふるのみたまのおおかみ）」、「賀茂別雷大神（かもわけいかずちのおおかみ）」、「日本大国魂大神（やまとおおくにたまのおおかみ）」、「解之男事尊（ことさかおのみこと）」、「大歳御祖大神（おおとしみおやのおおかみ）」などの名前があり、古事記・日本書紀（最古の歴史書（？）で「記・紀」とも呼ばれています）編纂以前の神社には、こういった名称で祀られておられます。もちろん記・紀以後に創建された神社であっても、こういった名称の神様であれば、それは饒速日尊を祀ったものです。

代表的な神社名をあげますと、「大神」「熊野」「賀茂」「日吉」「大国魂」「金比羅」「大歳」「山王」などですね。

私は、数年前、念願の奈良の桜井市から天理市にかけてつながる「山の辺の道」へ行き、「大神神社」、「石上神社」、「大和神社」をめぐってきましたが、これらの神社は、大和三神と呼ばれ、大変古く（記・紀以前）て由緒ある神社で、いずれも饒速日尊をお祀りしております。

もっとも、ご祭神が「饒速日尊」となっているのではなく、それぞれ別称が使われています。

また、饒速日尊のご親族が合祀されているものもあります。

たとえば、天理市に鎮座される石上神社では、布留御魂大神とともに布都御魂（祖父神）、布都斯御魂（父神）、宇摩志麻治尊（御長男）などが合祀されているといった具合にです。

石上神宮（天理市）

ちなみに石上神宮には、いずれも饒速日尊ゆかりの「十種の神宝」、素盞之男尊（父神様）が八俣遠呂智（大蛇ではありませんよ）を切った「布都御魂の剣」が、国宝として保存されているということです。

熊野や金比羅という神社は全国に無数にあり、皆様のお近くにもきっとあるのではないかと思うのですが、もっとも有名なのは、和歌山県の熊野本宮大社や香川県の金比羅大社ですね。

熊野本宮大社には家都御子大神、金比羅大社には大物主大神という別称で饒速日尊が祀られています。

古代史研究家原田常治氏は、「熊野」という名称のいわれは、饒速日尊がお生まれになった島根県出雲地方の熊野山が元となっているのではないか、と述べておられます。この熊野山は磐座形式の神社で、奈良県桜井市の大神神社も神殿はなく、後方の三輪山そのものを神殿とする磐座形式になっていますが、この三輪山も別名を三室山といって、やはり出雲の三室山が元になっていると述べておられます。

大王として、神武天皇以前に大和地方をおさめておられた饒速日尊は、尊敬する父神様である素盞之男尊が住んでおられた出雲地方の名称を、そのまま奈良に持

ってこられたのではないかというわけです。

では、なぜ古い神社においてこうも尊重されている饒速日尊が、記・紀には重要人物（神）として登場されないのでしょうか。このことが不思議でなりません。

その理由は、この神様が出雲系の神様で、しかも神武天皇東遷以前の方なので、記・紀の編纂上は、都合よくない方だったからではないかということなのです。

記・紀が編纂された８世紀初め（古事記 712 年、日本書紀 720 年）、時の政権にとって、肇国の始祖と称すべき神武天皇（即位されたのが推定 240 年ごろか？）の偉業を讃えるためには、それ以前に偉大な人物（神様）がいてはならなかったのでしょう。

大神神社の三輪山（桜井市）

伊波礼彦尊（初代神武天皇として即位）が、日向地方から徐々に東遷の道をたどられていたころ、饒速日尊はすでに崩御されていましたが、当時の近畿地方には、伊波礼彦尊が初代天皇「神武」として奈良で即位されることを、「よし」としない一大勢力が存在しておりました。その代表格は、長髄彦という豪族であります。

長髄彦の妹の三炊屋毘売が、饒速日尊のお嫁さんだったし、妹婿の饒速日尊が支配した奈良地方を、簡単に手渡す気にはなれなかったのでしょう。

一方、伊波礼彦尊が大和の支配者に変わろうとすることを、歓迎する勢力もありました。

それは、御長男の宇摩志麻治尊です。この宇摩志麻治尊が、対抗勢力である母の兄、長髄彦を排除したことにより伊波礼彦尊東遷はなったのです。

大和側の宇摩志麻治尊と、日向側で伊波礼彦尊東遷に尽力した武角身尊、それに伊波礼彦尊は、血脈のある（複雑な関係なのでこう表現しました）従兄弟の関係にあります。

そういった中で伊波礼彦尊の東遷という一代事業は、行われていったわけであります。

ちなみに武角身尊は、記・紀では八咫烏（サッカー日本代表チームのシンボルの三本脚の烏）として登場されている神様です。

饒速日尊は、記・紀の中でもちょっとだけ登場されてはいますが、伊波礼彦尊

に帰順した人物（神）として登場させられておられます。

　このように「天照国照彦天火明櫛御玉饒速日尊」は、記・紀のなかでは、その歴史から完全と言っていいくらい、地位も功績も抹殺されているわけですが、皇祖肇国以前、大和地方に燦然と輝く支配者であったのです。

大和神社の看板（天理市）

　もっとも 697 年編纂の「日本記」には、「天の磐船にのって葦原中津国（地上のこと）に降臨云々。」という記述があるそうですが・・・。

　現在三重県の伊勢神宮に鎮座の祭神も、「天照皇大神」と「天照」の称号が付されていますが、これはず一っと後の時代にそう呼ばれるようになったわけで、この神様の諡号は「撞賢木厳御魂天疎向津毘売 尊」と申され「天照」という号は付いていないとうことであります。

　この稿の最後に、古事記・日本書紀のなかで、饒速日尊が登場するくだりを紹介しておきます。

古事記の記述

＜原文＞

　故爾、**邇藝速日命**参赴、白於天神御子「聞天神御子天降坐、故追参降來。」卽獻天津瑞以仕奉也。故、邇藝速日命、娶登美毘古之妹・登美夜毘賣生子、宇摩志麻遲命。此者物部連、穗積臣、婇臣祖也。

＜現代語訳＞

　『ここにニギハヤヒノミコトが参じて赴き、「天津神の御子が天下りされたとお聞きしたので私も後を追って下ってまいりました。」といって、天津宝（同じ天神の子である証拠の宝）を献上して仕えた。そこでこのニギハヤヒノミコトがトビヒコの妹トミヤヒメを妻とし、生まれた子はウマシマチノミコトである。』

日本書紀の記述

＜原文＞

饒速日命、本知天神慇懃唯天孫是與、且見夫長髄彦稟性愎佷、不可教以天人之際、乃殺之、帥其衆而歸順焉。天皇、素聞饒速日命是自天降者而今果立忠效、則褒而寵之。此物部氏之遠祖也。

＜現代語訳＞

『ニギハヤヒノミコトは天津神が最も大事にされているのは天孫のみであることを知っていたし、ナガスネヒコは性質が頑冥で「天と人」ということを教えても理解しないので、ナガスネヒコを殺害してその軍隊とともに帰順した。天皇は、ニギハヤヒノミコトはさきに天降（あまくだ）ったものだと知っていたが、忠誠を示したのでこれを褒めたたえて手厚くもてなした。これ（ニギハヤヒ）は物部氏の遠い祖先である。』

＜おことわり＞

私の神武天皇即位以前の知識は、古代史研究家原田常治氏が、長年の調査による研究成果として発表された「記・紀以前の資料による古代日本正史」の論文内容が基本となっています。

氏は、推定 240 年ごろといわれる神武天皇即位年から、470 年以上もたって編纂された歴史書としての古事記・日本書紀の記述内容（とくに神代の部分）に、疑問を持たれ、記・紀編纂以前から存在した全国の著名な神社をしらみつぶしに調査されました。

とりわけ、その偉業を抹消された（？）素盞之男尊をはじめとする出雲系の方々の掘り起こしに力を注がれて、論文を構成されています。

私は、島根の出身で、若いころ石見地方に伝わる伝統芸能「石見神楽（いわみかぐら）」を見聞きして成長しました。石見神楽の演目は、まさに神話の世界を具現化（もちろん演芸ですから主人公を美化した脚色にはなっていますが・・・）した内容のものですが、出雲の神々の偉業を称賛する物語が中心です。そういったことから、氏の論文内容に心髄しているわけです。

古代史の研究は、諸説相乱れて様々な説が発表されていますが、氏の説は一方で大変魅力があると言わざるを得ないのです。（とくに私にとって）

【舞鶴の神様たち（白絲浜神社）】

（会報 第118号 平成28年９月発行）

私は、これまでこの会報に２２稿を投じてきました。そのうち「舞鶴の神様たち」のシリーズは１４稿になります。この間、かれこれ１０年近くになりますが、舞鶴市内には、神社が大小２００社余りもあるといわれていますので、まだまだほんの一部を紹介したに過ぎないことになります。

これまで、私の拙い文書、はたまた偏見（自分では正しいと信じていますが）に満ちた内容のにもかかわらず、ズーと取り上げ続けていただいている日本海海難防止協会に感謝しつつ、今回も書き続けさせていただいております。

さて、今回は、舞鶴の東地区市街地の中心ともいえる場所に鎮座される、「白絲浜神社」を紹介させていただこうと思います。

白絲浜神社は、創建時期が大正元年１２月となっていますから、おそらく舞鶴市内では、一番新しい神社だと思います。

白絲浜神社拝殿

舞鶴東地区市街地は、明治２２年に旧日本海軍によって、軍港とされることが決定されました。そしてその後、軍港整備に関連して、市街地の開発・造成がなされ、以前は百個にも満たなかった村も急激に発展していきました。

開発以前には、寺川の河口付近（現在地より直線距離で７００メートル北西の位置）にあった水無月神社が、開発に伴う埋め立てのため立ち退きとなりましたが、これを機に、現在は八島商店街になっている地域にあった、「稲荷神社」、「蛭子神社」をも合祀して、現在の地に遷宮され「白絲浜神社」となったものです。

私は、この神社の前の道路は、しばしば通りますが、神社を見るために立ち寄るのは今回が初めてでした。この神社境内では昔から、毎年愛知県の方から植木屋さんが来られて植木市を営まれますので、過去にその植木を求めて、一度だけ境内に入ったことはありました。いまから２０年ほど前の話です。

神社の場所は、国道２７号線の南側で、与保呂川の東側、養老通りに位置しています。

付近は、一方通行の通りが多くありますので、車でのアプローチには注意が必要です。

神社の入り口は養老通りに面していて、通りから数メートル入ったところに明神型（一番上の笠木の両端が上方に反りあがっている形）の石の鳥居と立派な一対の狛犬（唐獅子）が、参拝する人を迎えます。

明神型鳥居

さらに十数メートルまっすぐ奥に進むと拝殿、そしてすぐ後ろにご神殿があります。

ご神殿は、平入（ひらいり）（屋根の傾斜の側が正面）の形で、さすがに「古さ」は感じられず、千木が外そぎ（とがった部分が上向き）、勝男木は５本と、男神様が祀られている神社であることを示す特徴がみられます。

神社やお寺は、たいがい東向または南向に建てられているのが一般的ですが、この神社は、なぜだか西向きです。

敷地内のご神殿のさらに奥には、沢山の境内社があり、このあたりは三つの神社を合祀した名残なのでしょうね。

御祭神は、月読尊（つくよみのみこと）　保食尊（うけもちのみこと）　事代主尊（ことしろぬしのみこと）　大物主尊（おおものぬしのみこと）　五男三女神（ごなんさんじょしん）　稲田姫尊（いなだひめのみこと）　素戔嗚尊（すさのおのみこと）　倉稲魂尊（くらいねたまのみこと）

八柱の神々となっています。

実際には、五男三女神は、八柱の神々の総称ですから総勢十五柱の神々ということになります。

オーッ！なんとすごい神社でしょう。一社でこんなにたくさんの神々が祀られているとは・・・？　これもまた三つの神社を合祀した名残なのでしょう。

月読尊（つくよみのみこと）は、日本書紀の神話に登場されますが、あまりはっきりしたことはわかりません。太陽神天照大神に対して夜をつかさどる神であります（つまりお月さま）。

拝殿上部の掲額

月読尊にまつわる、日本書紀の面白い話。

月読神が、天照大神のお使いとして保食神をご訪問した際、保食神が口から吐き出した食材で饗応した。激怒した月読神は、保食神を殺害。これを聞いた天照大神は、

「二度と月読神の顔を見たくない。」と申され、以来太陽と月は、同じ天上には現れない…云々と。

保食尊（うけもちのみこと）は、文字通り食物をつかさどる神様で、豊受大神（とようけのおおかみ）（丹後のご出身で伊勢外宮のご祭神です。）、あるいは宇迦御魂（うかのみたま）（お稲荷さん）の別称とも考えられているようです。これら二柱は、いずれも食をつかさどる神様ですからね。

事代主尊（ことしろぬしのみこと）は、大国主尊（おおくにぬしのみこと）のお子神様で、出雲の国譲りのお話に登場されますが、別称を恵比寿さまともお呼びしますから、旧蛭子神社に祀られていたのではないかと思います。事代主尊の像は、釣り竿を片手に鯛を小脇にというものがお父上の大黒様（大国主尊）とともに決まりごとになっていますね。

大物主尊（おおものぬしのみこと）は、四国高松の金毘羅宮の御祭神で、「金毘羅さん」と親しまれ全国各地に神社がありますが、この方に関しては諸説あり、初代神武天皇以前に、大和を支配されていた大王、饒速日尊（にぎはやひのみこと）であるとの有力な説もあります。

ご神殿

饒速日尊は、素戔嗚尊のご三男で、諡号を「天照国照彦天火明奇甕玉饒速日尊（あまてらすくにてらすひこあめのほあかりくしみかだまにぎはやひのみこと）」ともうされ、奈良桜井市の大神（おおみわ）神社の御祭神としても祀られています。

五男三女神（ごなんさんじょしん）は、出雲・大和系では、素戔嗚尊と奇稲田姫尊との間にお生まれになった五男三女、すなわち八島野尊（やしまぬのみこと）（男）、五十猛尊（いたけるのみこと）（男）、大屋津姫尊（おおやつひめのみこと）（女）、抓津姫尊（つまつひめのみこと）（女）、饒速日尊（男）、宇迦御魂（男）、磐坂彦尊（いわさかひこのみこと）（男）、須世理姫尊（すせりひめのみこと）（女）であります。

また日向系では、大日霊女貴尊（おおひるめむちのみこと）（天照大神）と素戔嗚尊などの間にお生まれになった、五男三女、つまり天忍穂耳尊（あめのおしほみみのみこと）（男）、天穂日尊（あめのほひのみこと）（男）、多紀理姫尊（たきりひめのみこと）（女）、多岐津姫尊（たぎつひめのみこと）（女）狭依姫尊（さよりひめのみこと）（女）、瓊々杵尊（ににぎのみこと）（男）、火々出見尊（ほほでみのみこと）（男）、熊野楠日尊（くまのくすひのみこと）（男）の五男三女であります。

記紀神話では、素戔嗚尊がわが身の潔白を証明するために天照大神と素戔嗚尊の間で交わされた「宇気比（うけい）（誓約ともいわれ、占いのようなものだそうです。）」の際に、素戔嗚尊のお体から三女神が、天照大神のお体から五男神がそれぞれ現出なされたとのお話が載っています。

いずれにしても、これら五男三女神は古くから、各地の神社の御祭神として祀られておられ、記紀以前に出雲、日向、大和の深い関わり合いを示している重要な神々であることは違いないと思います。

素戔嗚尊（すさのおのみこと）は、二世紀のころ出雲国を中心として、東は能登から南は九州日向までの広い地域を支配しておられた方で、稲田姫尊（いなだひめのみこと）は素戔嗚尊の奥様です。

倉稲魂尊（くらいねたまのみこと）、別称では宇迦御魂と呼ばれ、全国に「お稲荷さん」として散在する、稲荷神社の御祭神であります。よくお稲荷さんは狐の神様だと耳にしますが、お稲荷さんには、狛犬の代わりに狐が座しているので、狐が祀ってあると勘違いされるようです。狐はあくまでお稲荷さんのお使いです。

以上、白絲浜神社にお祀りされている神様たちを紹介しましたが、ほかにも境内社として十二柱の神々の神社があり、火除けの「秋葉さん」とか「天照大神」、「八幡さん」なども見受けられました。今回の白絲浜神社の取材で驚いたことは、情報の中に、大変興味のある・・・というか、私が過去にいろいろと得た知識のうちで、大変重要だと思う神々がたくさんおられたことであります。

境内社

その意味で、この稿は、書き足りない事柄がいっぱいある気がしてなりませんが、とりあえず今回はこれで締めくくりさせていただきました。

【舞鶴の神様たち（朝禰神社）】

（会報 第119号 平成29年2月発行）

今回は、舞鶴の西地区に戻って、市街地の中心よりともいえる場所に鎮座される、「朝禰神社（あさねじんじゃ）」を紹介させていただこうと思います。

たびたびご紹介させていただいていますように、舞鶴の市街地は、大きくは、東地区（中舞鶴を含む）と西地区に分かれていて、二つの地区は、国道27号線と、通称白鳥街道と呼ばれている府道28号線の２本の幹線道路で結ばれていますが、今回ご紹介する「朝禰神社」は、西地区の白鳥街道沿いの倉谷という場所にあります。

国道27号線で、西舞鶴駅前を通過して白鳥街道に入り、倉谷の交差点を右折し、約四百メートルほど山側に入りますと、その神社の一の鳥居が目に入ってきます。ここからさらに参道（山道）を約三百メートルほど登った山中に朝禰神社は鎮座されています。

一の鳥居は石造りの明神型（一番上の笠木の両端が上方に反りあがっている形）で、「朝禰神社」と書かれた立派な掲学がかかっています。

参道の鳥居は、ほかに二基ありまして、参道の途中に石造り二の鳥居、そして、ご本殿の正面に木製の三の鳥居が立っています。

朝禰神社の一の鳥居

一の鳥居の掲額

二の鳥居

三の鳥居

ご本殿は、参道をさらに登り詰めた一番奥に、金属製の屋根の覆屋の中に鎮座されており、

美しい彫刻に飾られた本殿になっています。

ご本殿

昨年、取材に行った当日は、秋の例祭（豊穣際）の準備中で、氏子の人たちにより境内はきれいに掃き清められ、本殿には桐の紋が染め抜かれた掛け幕が施してありました。

ところで、西舞鶴の愛宕山の麓に「朝代神社」という神社がありますが、朝禰神社は、この神社と姉妹神の関係にあると伝えられています。

「その昔、妹神（朝代さん）と、田辺の地（西舞鶴一円）のお互いの氏子の領分を、歩いて決めようということになりました。領分を分け合う約束の日、朝早く起きて回られた妹神様は田辺のほとんど（舞鶴西地区のほぼ全域）を氏子にされましたが、姉神（朝禰さん）は倉谷（現在の地域）しか氏子にできなかった。そういうことから朝寝大明神の名がついた。」というエピソードが語り継がれています。

なお、「朝代神社」は、このシリーズでは未照会ですが、西舞鶴ではもっとも有名な神社です。いつかご紹介することになると思っています。

ところで、朝禰神社の御祭神は、大宇賀能売神様（おおうがのめのかみ）で穀物の神様で、豊受大神（とようけのおおかみ）と同一神の女神様です。

そして、朝代神社の御祭神は、伊弉諾尊（いざなぎのみこと）という男神様ですから、朝禰さんと朝代さんは姉妹関係にはないということになります。

話を面白くするためか、こういったエピソードが生まれるのはよくあることですね。

豊受大神は、ご存知伊勢の外宮の御祭神で、元は京都丹後地方におられた神様です。天照大神が現在の伊勢に遷宮なされた際、豊受大神を呼び寄せられ外宮に祀られたと伝えられています。

天照大神は、奈良の笠縫邑を出られてから現在の伊勢に落ち着かれるまでの二十年（一説には六十年）間、安住の地（？）を求めて各地に遷宮されておりますが、京都丹後の地にも 4 年の間、仮宮におられたことがあります。

もっとも、天照大神の、「天照」御名は、七世紀以後の呼び名で、元は大日霊女貴尊（おおひるめむちのみこと）と称され、日向の国を支配されていた。そして豊受大神はその後継者であったとも言われている、言わば直系の血筋に当たられる間柄の神様です。

話を戻します。

朝禰神社にはこんな言い伝えもあるそうです。

現在の朝禰神社の鎮座場所は、佐武ケ岳の麓の山中にありますが、元は、倉谷の田んぼの中（現在の余内小学校の近く）にありました。

「神様は、百姓が朝早くからガヤガヤと仕事をするのが喧しいのと、田畑に肥をまくので臭くてかなわないから何とかしてほしい、と不満を申されたので、村人が相談の結果、静かな現在の地に移っていただいた。

ところが神様は、こんな山の中では淋しすぎると申されるので、神様のご不満を和らげるために、村人たちが交代で毎晩常夜灯に点灯してお慰めした。」

というものです。

私的には、このような百姓の仕業を疎ましく思うことは、五穀豊穣を司る神様としてあり得ないことで、神様に大変失礼な話だとは思っていますが・・・。

ちなみに、この御灯明は、木札の申し送りというかたちで、現在も続けられているとのことです。

保食尊（うけもちのみこと）といわれる神様がいらっしゃいますが、文字通り食物をつかさどる神様で、豊受大神、あるいは宇迦御魂（うかのみたま）（お稲荷さん）の別称とも考えられているようですから、大宇賀能売神も同じかもしれません。いずれも食をつかさどる神様ですからね。

朝禰神社の一の鳥居を少し上った場所に、いくつかの摂社がお祀りされています。

神様の名前を見ますと、「吉光稲荷」、「山内荒神」、「瀬野荒神」、「田中大荒神」、「當勝稲荷（まさかついなり）」、とあります。ほかに「稲荷」、「三柱」、「大川」の神社名もありました。

當勝稲荷は、天忍穂耳命（あめのおしおみみのみこと）（大日霊女貴尊の御長男）をお祀りした神社。大川神社（保食神）は、由良川沿いに鎮座されている舞鶴市ではメジャーな神社。三柱神社（御祭神はいろいろ）も各地に結構多くみられます。

摂社稲荷神社の鳥居

さて、この摂社の前五社の名前のうち四社はといいますと、あまり聞きなれない神様です。それぞれお気づきですか。

そうなんです。この四社は、それぞれ、同じ姓の親戚一族が建立されたものなんだそうです。

参道の途中

そういえば、同じ倉谷町内の道を歩いていますと、ほかにも田んぼの隅にポツンと小さなお社があり、近くの人に尋ねると「尾崎さんという一族が祀られた尾崎神社です。」ということで、「ああこうした神社もあるんだなぁ～」と思ったものです。

今年のお正月のテレビ番組で、「日本人のここがおかしい」といったような内容で、外国人が日本人の初詣についてあれこれ指摘していました。

「一年に一度だけ、しかも複数の神様にお願いに行くなんて云々・・・。」と

もちろん、バラエティー番組ですから、面白おかしく編集してあることとは思いますが、それにしても日本の神様は、いろいろと思いを巡らせていけばいくほど、なんとも人間的で、面白く楽しくもあるとつくづく思うのです。

【舞鶴市の神様たち（鳴生神社）】

（会報 第120号 平成29年5月発行）

若狭富士とも呼ばれる秀麗「青葉山」は、丁度フタコブラクダの背のように山頂が二つの峰に分かれています。西側の麓に西国三十三観音霊場の二十九番札所、松尾寺があり、このお寺は舞鶴市の市制下にありますが、二つの峰の山頂は、いずれも福井県の高浜町（若狭）に属しています。

舞鶴湾から望む青葉山

それぞれの峰に神様が祀られていまして、西峰（舞鶴市側）に祀られている方は「笠津彦尊（うけつひこのみこと）」と「笠津姫尊（うけつひめのみこと）」とおっしゃいます。

ところで「笠」は「かさ」とも読めますので、「陸耳御笠（くがみみのみかさ）」のことではないかと解説される方もいらっしゃいます。

さて、「陸耳御笠」が登場したところで、今回の本題に入っていきます。

舞鶴市最北端、若狭湾に突き出して「成生岬（なりゅう）」という岬があり、その岬から3キロメートルほど南に位置したところに、「成生」という小さな集落があります。

今回紹介する神社は、この成生集落の中心に鎮座する神社で、その名前は「鳴生（なりゅう）神社」といいます。

本地図は「地理院地図(GSI Maps)」を使用し、編集して

舞鶴東地区を東西に走る国道27号線（大門通）の「大門松島」交差点を北に折れ、府道21号線と府道561号線にそって北方にひた走り、約18キロほど車を進めていくとこの集落に行き当たります。

東方に開いた漁港は、背面を高い山に囲まれ、冬の季節風を避けるには絶好といっていい場所にありますが、集落に至る経路の半分近くは急峻な山道で、立派な舗装道路がなければ、「ほんとにこの先に？」と不安さえ感じるようなところでもあります。

しかし、喧騒を離れた静かな成生。漁業中心の 20 所帯 54 人の小さな集落は、風光明媚で落ち着きのある、好感度抜群の地でもあります。

鳴生神社鳥居

その小さな集落に鎮座される今回の主人公は、集落の規模に比べ、「なぜ？」と思うほど大きくて立派な「鳴生神社」という神社なのです。

港から 200 メートルほど山の方（西方）に細い坂道を上ると、神社の境内がすぐに目に飛び込んできます。石造りの明神型鳥居（笠木部分の両端が上方に反りあがっている形の鳥居）があって、鳥居の後方両脇には、狛犬（唐獅子）が控え、その奥に大きな拝殿へと境内はつながっています。

拝殿の前にも、もう一対の狛犬がお互い向き合って座しています。

鳴生神社拝殿

そして、拝殿からは、さらにその奥の幣殿、本殿へと建物はつながっていきます。

鳥居には、文字は薄れてはいますが「鳴生神社」と書かれた木製掲額が掲げられおり、また、拝殿内部には金文字でやはり「鳴生神社」とかかれた掲額がかかっています。

拝殿の軒下周囲に、36 歌仙でしょうか（？）肖像画の額がかけられているのも大変珍しい光景です。

ご本殿、拝殿ともに外周を風雨除けの鉄板囲いが施してあります。

拝殿屋根は、焼瓦葺き、本殿屋根は銅板葺きで、多くの他の神社で見られるような、千木や鰹木などはありません。

1374 年、1379 年、1758 年、1910 年（明治）と建替えの歴史があるようなので、明治の改築の折に、現在の屋根の形になったのかもしれませんね。

今回の取材中、漁協の事務所に立ち寄り、数冊の古い文献を見せてもらうことができました。

そこには、神社の由緒や、どなたがお祀りされているかが書かれていまして、ご祭神については「崇神天皇御代の皇子日子坐王（皇子）を祭祀する。」とあります。

言い伝えるところ『十代崇神天皇の御代、当国志楽の郷（青葉山）の山中に、土蜘蛛※の陸耳御笠と言う者が、匹女と共に棲んでいて、人々を苦しめることから、天皇の弟皇子の日子坐王を派遣して征伐した。』といった物語があって、この地方に伝説としていろいろと話が残っているのですが、拝見した文献にもこの話とともに、日子坐王を祀ったという趣旨のことが書いてありました。

拝殿内部

日子坐王が陸耳御笠を退治した話は古事記にも書かれており、ついでながら、古事記のこの部分、「崇神天皇四道将軍派遣」の記述を抜粋しますと。

『・・・又此之御代、大毘古命者、遣高志道、其子建沼河別命者、遣東方十二道而、令和平其麻都漏波奴人等。又日子坐王者、遣旦波國、令殺玖賀耳之御笠・・・。』

この一説の訳は、

『この（崇神天皇）御代、大毘古命を高志（北陸）に派遣し、天皇の子の建沼河別命を東方十二国に派遣して、（朝廷に）まつらわない（従わない）人たちを帰順させ、また日子坐王を丹波の国に派遣して玖賀耳之御笠を殺させた。』

というものです。

※「土蜘蛛」というのは、大和朝廷の支配に従わない地方の部族の総称で背が低く洞穴に棲む者と卑下して称したもののようです。

文頭に「笠津彦尊」と「笠津姫尊」の二柱の神様を紹介しましたが、伝説に登場する陸耳御笠という豪族が笠津彦尊で、匹女はその妻笠津姫尊であるのかもしれません。

昔、大江と舞鶴は加佐郡に属していましたがこの「加佐」も「笠」と呼び名は同じでして、この豪族の名前からきているのかも知れません。

諸々の話から、陸耳御笠は、大和朝廷から見れば、人々を苦しめる土蜘蛛ではありましたが、かなり広い地域を支配した、大物として君臨していたものとも考えられますね。

しかし、陸耳御笠には、「御」という尊称がつけられており、また「耳」の文字がありますが、天照皇大神の御長男「天忍穂耳尊（あめのおしほみみのみこと）」という方がいらっしゃることを思えば、陸耳御笠とういう方も、この地方の勢力の強い豪族だった可能性も十分に考えられます。

拝殿、幣殿、本殿

現在、大浦半島（舞鶴湾の入口）関西電力の火力発電所がありますが、発電所の建設工事前の調査で「笠氏」の刻印のある９世紀頃の製塩土器が発見されたそうですから、崇神天皇の御代とは、ずいぶん時代が下るものの、笠氏と呼ばれる古代豪族が、ここに存在していたことは確かなようで、もしかして陸耳御笠の子孫かもしれません。

余談ですが、名前に「ミミ」が付く方は、南方系海洋民族の系統ともいわれており、天忍穂耳尊が天孫族の神様であることを思えば、関連があるのかもしれませんね。

天孫族（日向系）は南方系モンゴリアン族という説があり、私はこの説の信奉者です。

さて鳴生神社ですが、明治の前は、大将軍神宮という名前でしたが、明治になって現在の鳴生神社と改称されたとのことです。大将軍神宮の名は、前述のごとく崇神天皇の命を受けた日子坐王が、奈良朝廷に反抗する各地の勢力を平定するために派遣された四人の将軍の一人であったからではないかと思っていますが、このところは定かではありません。

鳴生神社の境内社には、これもかなり大物の神々が祀られています。

大穴持神（おおあなもちのかみ）（大己貴尊（おおなむちのみこと））、少彦名神（すくなひこなのかみ）、大山祇尊（おおやまつみのみこと）を祀る三柱神社（葛島神社）。

武雷神（たけみかづちのかみ）、経津主神（ふつぬしのかみ）、天児屋根尊（あめのこやねのみこと）、天照皇大神をまつる吉田神社。

そして大川神社（祭神は保食神（うけもちのかみ）か？）などがそれです。

境内社葛島神社

大穴持神は、出雲の国譲り神話の大

国主尊の別称、少彦名神は、天孫族で出雲の経営に貢献、大山祇尊は瀬戸内海の大三島を根拠地とした水軍を率いた神様です。

また、武雷神（武甕槌尊（たけみかづちのみこと））、経津主神、天児屋根尊のお三方は、奈良春日大社の御祭神で、出雲の国譲りの際の抵抗勢力であった、武御名方富尊（たけみなかたとみのみこと）を追放したことに代表される天孫族（風雅族）の軍神の方々です。

ちなみに、武御名方富尊は長野諏訪大社の御祭神です。

こうしたことから、小さな漁村に似つかわしくないほど規模が大きく、またあまり海や漁業にかかわりのない神々を祀った鳴生神社であります。

もちろん、神社創建時の 6 世紀ごろ？（崇神天皇の時代は３～4 世紀といわれていますが・・・）現在のように成生に通じる陸路があったとは思えません。

当時の交通の主な手段は、舟であったと思われますから、海のそばの成生の地に、立派な神社があっても不思議ではありません。

現に、成生の隣集落の田井地区にも八幡神社、天満宮が、そしてさらに水ケ浦地区にも、立派な神社があります。

水ケ浦地区の天照皇大神社などは、現在でも陸路からのアプローチは難しく、地元集落の人たちは、船で神社に行くのだそうです。

【神祖熊野大神奇御食野尊という神様】

（会報 第121号 平成29年9月発行）

以前（５年前ころ？）このシリーズの第７話（会報97号 平成21年８月発行）で、この神様には触れたことがあるのですが、今回は、「舞鶴の神様たち」（神社の紹介）から離れて、出雲の偉大な神様、「素戔之男尊（すさのおのみこと）」のお話をしてみたいと思います。

京都八坂神社（祇園社）

京都の夏の風物詩、八坂（やさか）神社の祇園祭も終わりました。

ところで八坂神社は、明治の神仏分離の前は、祇園社と呼ばれていました。

祇園というのは、平家物語の冒頭の「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり・・・」の「祇園」がもとになっています。

「祇園精舎」というのは、仏教の聖地（インド）にある僧院のことで、仏教に深いかかわりのある呼び名であります。

この僧院を守る神様は、牛頭（ごず）天王でありました。

日本では、牛頭天王は素戔之男尊のことであり、日本各地の素戔之男尊を祀る神社は、祇園さんと呼ばれる神社が多いのです。

祇園が仏教のお寺であるため、神仏分離が行われた明治以後は、それまでの祇園社は、八坂神社と呼ばれるようになりました。あるいは弥栄神社と呼ばれるものもあります。

しかしながら、祇園という名称は、日本各地に神社名あるいは祭りの名前、さらには地名として沢山残っており、その代表格が、京都の祇園あるいは祇園祭であります。

ちなみに、これら素戔之男尊を祀る、祇園社あるいは八坂神社（神社名は違う場合がありますが）は、青森から鹿児島に至る各地に数多く存在しております。

素戔之男尊（すさのおのみこと）（重垣神社壁画）

もちろん、それらの神社には、現在も祇園祭が行なわれておりますから、7 月は祇園祭オンパレードっていう感じですね。

本題に入りますが、素戔之男尊とはどんな神様なのでしょう。

諸説あるのでしょうが、ざっとプロフィールをご紹介しますと。

素戔之男尊は 122 年（2 世紀初め）ころ出雲の国沼田郡（現在の平田市宮西町）でお生まれになりました。父神様は「布都（ふつ）」とよばれる神様で、尊はそのころ「布都斯（ふつし）」と呼ばれていました。

尊、二十歳のころ（142 年ごろ）、当時出雲第一の豪族といわれた八俣遠呂智（やまたのおろち）が、拉致して連れ帰った美女櫛稲田姫（くしいなだひめ）を、遠呂智の館に切り込んで斃し、姫を奪い返したという木次（きすき）事件が起こりました。

この事件により、尊は一躍この地方に勇者としてデビュー。救われた櫛稲田姫は、尊の妻となられました。

櫛稲田姫（くしいなだひめ）（八重垣神社壁画）

この時、尊が詠まれた「八雲立つ　出雲八重垣　妻ごみに　八重垣作る　その八重垣を」という歌は、日本最古の歌といわれており、この歌によってこの国を出雲と呼ばれるようになったと伝わっています。

また、八俣遠呂智を切った刀は、「布都御魂の剱（ふつのみたま　つるぎ）」という名前で国宝として奈良県天理市の石上神宮に保管されています。

この木次事件は、古事記では、八岐大蛇退治の物語になっており、広く有名な神話の一つともなっています。

木次事件をきっかけに次第に頭角を現わしていった尊は、三十五歳ころには、出雲や近隣の山陰地方の頭領と仰がれるようになり、四十歳ころには、北陸地方から長門地方にいたる、山陰沿岸の国々をすべて支配下におさめられています。

大日霊女貴尊と狭依姫（八重垣神社壁画）

173年、尊五十歳のころ、第五子大歳尊（後の倭の大王饒速日尊で、当時二十歳頃）とともに九州地方に遠征を開始。177年、尊五十五歳のころ日向の国（高天原）を勢力下におさめられました。

当時日向の国は天孫族の国で、出雲の国にくらべると温暖で住みやすく、穀物もよく獲れ、九州地方を統治するには大変重要な拠点であったようです。

このとき、現在の宮崎県西都市におられた天孫族の大日霊女貴尊（卑弥呼・天照大神）と結ばれます。

そして、大日霊女貴尊との間に、三人のお姫様がお生まれになりました。

このお三方は、今度世界文化遺産として推薦候補になっている福岡県の「宗像・沖ノ島、関連遺産群」の沖津島、中津島、辺津島にそれぞれ多紀理姫（あるいは田心姫）　多岐津姫　狭依姫（あるいは市杵島姫）として祀られておられます。

ちなみに、素戔之男尊と櫛稲田姫との間には五男・三女神がおられ、この親子十柱の神様は、京都八坂神社に合祀されているのです。

尊は、185年ごろ六十三歳くらいでなくなられたようです。

御最後は、出雲の国の八束郡八雲村（現松江市）の熊野の地で、現在その地には大変立派な神社が鎮座されていますが、もちろんご祭神は、素戔之男尊と櫛稲田姫です。

以上、素戔之男尊のご身上をご紹介しましたが、身上について古事記などでは、尊の親神様は、伊弉諾・伊弉冉で、天照大神のお姉さまということになっています。

島根松江市熊野大社

姉弟の間で子供が生まれるというのは常識的におかしな話で、何かの思惑があ

って神話の話としてしまったのではないかと考えられます。

ところでこの素戔之男尊の諡号を、「神祖熊野大神奇御食野 尊 」（加夫呂伎熊野大神櫛御気野 尊 とも表記）ともうされ、つまりこの文の表題に掲げたのは、尊の諡号であります。

先に、お亡くなりになられた地を、出雲の国の八束郡八雲村（現松江市）の熊野の地と申しました。

「熊野」といえば、紀州の熊野を真っ先に思い浮かべられる方は大勢いらっしゃることでしょう。

実は熊野という地は他にもありまして、出雲の国の熊野（現松江市八雲町）もその一つです。

「古代日本正史」の著者原田常治氏は、同著書に、和歌山県の熊野三神（新宮、本宮、那智宮）の神様について触れておられるなかで、『熊野の地名は十二代景行天皇のとき、今の新宮市に、素佐之男の死んだ出雲の熊野、またその諡号の「神祖熊野大神」の名をとって「熊野」という地名になった。』といっておられます。

現熊野市は、熊野本宮大社のある和歌山県とは違い、三重県南部にあります。

和歌山熊野大社

そして、紀州の熊野本宮大社は、和歌山田辺市本宮町が所在地です。

昔は、和歌山三重の南部、南紀一帯を熊野と呼んでいたのかもしれませんね。

「素佐之男」とは、まさに素戔之男尊のことであります。

いったことのある人には説明の必要はありませんが、島根の八雲町熊野の熊野神社も大変立派なお社（前ページの写真）で出雲一宮ということであります。

出雲の国では、出雲大社があまりにも有名ですし、前出の和歌山熊野本宮大社のほうが知名度が高いため、出雲の熊野大社の名を知っておられる方は、案外少ないのかもしれませんね。

実は、全国には「熊野神社」と名がつく神社は、無数にあるそうです。古事記（712年編纂）以前に祀られたものも多く、だいたい素戔之男尊と饒速日尊（素戔之男尊のご三男）が合祀されているとのことです。

ちなみに、私の住む舞鶴市内にも、熊野神社は十社以上あります。

舞鶴市の中心にある五老ヶ岳公園。この公園は、大変風光明媚な舞鶴湾が一望に見わたせる市民の憩いの場となっている標高３００メートル余りの山ですが、登山のための遊歩道「ロータリーの道」の途中に、その一つの熊野神社はひっそりと鎮座しておられます。

小さな神社で、由緒書きなどが見当たりませんので、確かなことはわかりませんが、きっと素戔之男尊、饒速日尊の親子神さまが祀られているに違いないと思います。出雲族のしかも古代に活躍された大変偉大な方々が祀られているということで、五老ヶ岳公園に上るときは、畏敬の念を抱いておまいりしています。

お断り

本稿に挿入した写真について

私は残念ながらわが故郷であるにもかかわらず、島根県松江市の八重垣神社と熊野神社には、いまだお詣りできていません。

そこでインターネットのグーグル画像検索から、八重垣神社の壁画と熊野神社の写真を使わせていただきました。

【舞鶴の神様たち（高倉神社）】

（会報 第122号 平成30年1月発行）

すでにご承知かと思いますが、海上保安庁には、海上保安学校という教育機関がありまして、現在６００人以上の海上保安官を目指す学生たちが、日々、教育・訓練に励んでいます。その海上保安学校は、舞鶴市長浜という、風光明媚で市街地の喧騒から離れた、静かな環境の中にあります。

海上保安学校ともっとも近い場所、つまり舞鶴の市街地のはずれになる場所に、今回取り上げさせていただく高倉神社は鎮座されています。

神社へのアプローチは、国道２７号線の中舞鶴交差点三叉路を北西方に折れ、府道５６５号線を約７百メートル走ったところの三叉路を右折。

さらに約７百メートルいくと、突き当りの左側というところになります。

山の名はわかりませんが、後ろに高い山があり、その北東の山裾際に鎮座されています。

本地図は「地理院地図(GSI Maps)」から編集。

筆者も５０年前に、この学校を皮切りに海上保安官となり、またその後も通算７、８年の学校勤務をいたしましたので、この高倉神社は、ある意味舞鶴の神様の中では一番身近に感じられる神社かもしれません。

学生時代は、学校から町へでるとき、また学校職員の時は通勤の途中に、必ずこの神社の前を通っていましたから、神社の存在は言うまでもなくよく知っていましたが、実をいうと身近過ぎて、詳細なことはこれまでよく承知していませんでした。

今回、高倉神社を取り上げさせていただくということで、高倉神社氏子総代会会長佐藤氏に話を聞いたり、１０月１４日には境内の奥深くまで立ち入らせていただきました。神社名は「高倉八幡宮」とあります。

鳥居は、石の鳥居で明神型のりっぱなもので、「高倉神社」という掲額がかけられています。

佐藤さんをはじめ、氏子の方々がよほど大切にしておられるらしく、建物の朱は鮮やかで、境内社などほかの建物などもよく手入れされています。

御祭神は、八幡様ですから、日本の三大八幡宮、大分の宇佐神宮、福岡の筥崎八幡宮、京都石清水八幡宮と同一の神様です。

八幡宮の神様は、応神天皇と同一神とされており、弓矢をとる武人の神様ということになっています。私の故郷、島根の石見地方を中心とした、各地の集落に伝わる石見神楽の演目のなかにも「八幡」というのがあって、その口上に「自らは、豊前の国宇佐の宮にあらわれたる八幡麻呂という神也。」というのがあります。

応神天皇

演目は、武神八幡様が、外来の鬼人を弓矢で退治するというストーリーです。

応神天皇は、諡号を「誉田別尊（ほむたわけのみこと）」と称されます。

高倉神社の主祭神はこの神様です。

ほかに二柱の神様が合祀されていて、その一方は「天児屋根命（あめのこやねのみこと）」、もう一方は「菅原道真公」です。

天児屋根命は、日向族の武神で、出雲の国譲りの際に、抵抗した「建御名方命（たけみなかたのみこと）」を追放した神の一方で、奈良の春日大社に春日三神の御一方として祀られておられます。

菅原道真公は、天神様とも呼ばれていますね。政敵藤原時平の陰謀により京を追われ、筑前大宰府に左遷された悲劇の官僚として有名です。

「東風吹かば匂いをこせよ梅の花、主なきとて春なわすれそ。」という歌はあまりにも有名ですね。

ちなみに建御名方命は、長野の諏訪大社の御祭神です。

応神天皇についてのお話ですが、天皇は15代天皇で、仲哀天皇と、三韓征伐物語の主人公「神功皇后」のお子様であります。仲哀天王は、三韓征伐の途上九州でお亡くなりになり、お后の神功皇后が三韓征伐に行かれて帰国後に九州で応神天皇をお産みになった。遠征のさなか、中央では仲哀天皇の後継を巡っての争いごとがあり、神功皇后の御子は、後継者として認められないという動きがありました。このことから、御子とともに大和に凱旋することができず、福井県敦賀市の気比にとどまって機を待った(他説として紀伊地方というのもあります。)というものです。お仲哀天皇がなくなられて、時がたってからお生まれなったから「天皇のお子ではないのでは？」との疑いがあった、という言い伝えもあります。不敬な話をして申し訳ありません。

神功皇后絵

神功皇后と、皇后の脇で赤ん坊を抱いて控えている老人の絵があります。この絵をご覧になったことがある方もいらっしゃると思いますが、あの赤ん坊が応神天皇であります。

ちなみに老人は「武内宿祢（たけのうちのすくね）」という忠臣で、昔の一円札紙幣にその肖像が印刷されていました。

このあたりの話は、古事記・日本書紀の中で、九州から反乱軍を制圧しながら大和に凱旋するという、大変勇ましい物語になっていますが、この稿ではマイナーな説をとって紀介しました。

御祭神の話が、少ししつこくなりました。

高倉神社に目を戻しましょう。

境内に、稲荷神社と十二栗神社（しわすぐりじんじゃ）の二社が祀ってあります。

稲荷神社は、以前にもたびたび触れましたが、「宇迦御魂（うかのみたま）」つまり保食神（うけもちのかみ）です

十二栗神社

が、一緒に大山祇（おおやまずみ）の神、日本武命（やまとたけるのみこと）が合祀されています。

十二栗神社は、五穀豊穣の神様で、この神社のいわれについて「丹後風土記」に「昔、稚産霊（わかむすび）の神様がこの地に生花（栗の木）をお植えになった。成長した木は、毎年十二月一日に花を咲かせ、二十日に実を結んだので、収穫して元旦にその実を大神に備えた。（訳）」と記されているそうです。

鞍掛石

また境内に、しめ縄を張られた１メートルぐらいの大きな石がおいてあり、神石として祀られていました。「鞍掛石（くらがけいし）」ともいうらしいです。

名前の由来は、言い伝えの中に、主祭神が、この石に鞍をかけ馬上姿になって、武人の練武を鼓舞せられたとあります。

高倉神社のお神輿は、大変立派で大きなもので十月中旬の秋の大祭でお出ましになり、中舞鶴の市街地を７時間近くも巡行されます。高倉神社氏子総代会会長佐藤氏によると、地元住民の若者が少なくなった現在、担ぎ手として海上保安学校の学生が動員されているとのことで、なんでも担ぐのに７、８０人も要るのだそうです。

高倉神社神輿

お断り：本稿に挿入した肖像画は、インターネットのグーグル画像検索から使用しました。

【舞鶴の神様たち（大森神社）】

（会報 第 123 号 平成 30 年 5 月発行）

舞鶴市街地は、東地区と西地区に分かれているということは、再三ご紹介している通りですが、今回取り上げる「大森神社」は、東地区にあり、舞鶴の神社としてはもっとも有名で、最も規模の大きな神社といってよいと思います。

大森神社というのは通称でして、「彌伽宣（みかげ）神社」というのがこの神社の正式名称です。

これも再三ご紹介していますが、東地区と西地区を結ぶ道路としては、国道 27 号線と府道 28 号線の二筋の道路があって、府道 28 号線の方を通称「白鳥街道」と呼んでおります。

本地図は「地理院地図(GSI Maps)」から編集。

彌伽宣神社は、東地区の白鳥街道沿い、森町に鎮座されておられます。

神社は JR 東舞鶴駅から、直線距離にして南へ約七百メートルほどの位置で、社域は欅の古木に囲まれ、入口付近の輻輳する交通量を除けば、昔からの閑静な住宅街のなかにあります。

大森神社　一の鳥居

神社のアプローチは、白鳥街道丸山口交差点から東へ一寸行くと、左手に赤い大きな一の鳥居が目に入り、すぐにわかります。

ここが神社入口です。一の鳥居には「大森神社」の掲額があります。

神社入口から二百メートルほどの参道が続き、奥まったところが、拝殿とご本殿となっていて、拝殿の前には二の鳥居、狛犬（唐獅子）が置いてあります。

現在の社域は、南北に長く、東西の幅はそんなに広くないので、細長い社域ということになるのですが、もちろん昔はもっと広かったことでしょうね。

創立年は、十代崇神天皇の御代と言われていますから、古くからこの地に祀られていたものと思われます。（遷宮されたという話もあります。）

ご本殿の、向かって左側の脇には、清水が湧き出していて、これはご神水ということですが、奥にもう一か所、清水が湧き出す池もあります。

また、ご本殿の床下には、井戸があったと言い伝えられていまして、これらの清水は、杜(もり)清水あるいは延齢水と名づけられており、霊験あらたかな清水とされています。

ご本殿

ご祭神は、天御影尊(あめのみかげみこと)で、相殿に誉田別尊(ほむたわけのみこと)（応神天皇の諡号）が、ともに祀られてます。

神社の由緒によると、『天御影尊は、またの名を天目一尊(あめのまひとつのみこと)と申し、神代において刀、斧等の諸道具を造り始められた産業の祖。』とあり、昔から刀鍛冶など鉄を扱う人々から崇拝されてきた神様のようです。

古事記には、この神様のことを詳細に物語った記述は見当たりませんが、「開化天皇」の項の記述の中にお名前があり、滋賀県の御上山（現三上山）に祀られているということが書かれています。その記述は次のとおりです。

『・・・次室毘古王。四柱。又娶近淡海之御上祝以伊都玖此三字以音天之御影神之女・息長水依比賣・・・云々』と。

また、天照皇大神（大日霊女貴尊(おおひるめむち)）のお孫さんにあたる（大神の三男天津日子根(あまつひこね)（別名瓊瓊杵尊(ににぎ)）の子）とされています。

舞鶴市内の造船所や、その関連の企業は鉄を扱うことから、これらの企業からもたいへん崇拝されてきました。

境内社　八代神社

初詣には、参拝者の長い行列ができ、7月１４日・１５日のお祭りは、とってもにぎやかです。

さて神社は、一の鳥居をくぐって参道を入りますと、参道はまっすぐご本殿まで続き、右側（東側）の参道の途中に、八代神社、鹿島・香取神社、三安神社の各境内社が祀られています。

さらに奥に行くと、ご本殿の周囲に、縁結神社、森光稲荷神社、若宮稲荷神社、須佐見神社、水神社の各神社が境内社として祀ってあります。

八代神社には、大日霊女貴尊の五男三女、すなわち、天忍穂耳尊（あめのおしほみみ）、天穂日尊（あめのほひ）、多紀理姫尊（たぎりひめ）、多岐津姫尊（たぎつひめ）、狭依姫尊（さよりひめ）、天津日子根尊（いくつひこね）、活津日子根尊（くまののくすひ）、熊野楠日尊の八神が祀られています。

境内社　森光稲荷神社

また、鹿島・香取神社は、武甕槌神（たけみかづち）、経津主神（ふつぬし）。須佐見神社は、素戔嗚尊（すさのお）。

森光稲荷、若宮稲荷は、いずれも宇迦（うかの）御魂（みたま）。縁結神社は大己貴尊（おおあなむち）（大国主）。

そして水神社は弥都波能売神（みずはのめ）で文字通り水の神様。

以上がそれぞれのご祭神です（・・・のはずです。）

三安神社の御祭神は、残念ながらわかりません。

そして神域奥まったところに拝殿、ご本殿が建っています。

ご本殿は、神社建築様式では最もポピュラーな流造（ながれづくり）（前庇が曲線を描いて前方にせり出している形）の、規模の大きな社で、屋根は、銅板葺き、木組みも大変立派な造りになっています。（前ページ写真参照）

境内社　須佐見神社高倉

実は、筆者は昭和５０年代初め、この神社近くに住んだことがあり、以前

からも、また現在もたびたびお参りしているのですが、これまで拝殿より奥に進入したことがなく、今回取材で初めてご本殿を拝見したわけですが、その美しさには見とれてしまいました。

なお、境内社のご祭神については、これまでにもご紹介しましたが、簡単に再度ご紹介しておきます。

天忍穂耳尊（あめのおしほみみ）、天孫系（日向系）の神様で、豊後（現大分）あたりを地道に支配しておられた。

天穂日尊（あめのほひ）、出雲に移られ、国譲り後出雲経営に貢献、出雲大社の宮司の始祖。

多紀理姫尊（たぎりひめ）、多岐津姫尊（たぎつひめ）、狭依姫尊（さよりひめ）、宗像三女神。

天津日子根尊、大日霊女貴尊の３男、天孫降臨神話の瓊瓊杵尊。

活津日子根尊（いくつひこね）、神話では山幸彦として登場。

熊野楠日尊（くまののくすひ）、大日霊女貴尊の末子、神武天皇の父神、別名鵜茅草葺不合尊（うかやふきあえず）。

武甕槌神（たけみかづち）、経津主神（ふつぬし）、天孫族（日向）三武人の家の二方、出雲国譲りのとき、抵抗した武御名方尊（たけみなかた）（大己貴尊（おおあなむち）の３男）を武力追放した武人です。（三武神のもう一方は、天児屋根神（あめのこやね））。

素戔嗚尊（すさのお）　ご存知出雲神話「八俣遠呂智（やまたのおろち）」退治の神様。

宇迦御魂（うかのみたま）　各地のお稲荷さんのご神体、新潟弥彦さんが本山。

大己貴尊（おおあなむち）（大国主）神話稲葉の白兎で登場の優しい神様。

【舞鶴の神様たち（山崎神社）】

（会報 第124号 平成30年9月発行）

国道２７号線は、福井県敦賀市から、京都府船井郡丹波町までを結ぶ幹線道路（旧一級国道）で舞鶴市内では東から入り南側に抜けています。

私達舞鶴市民は、京阪神を中心に考えますから、南側から東側に抜けるという感覚が強いのですが、実は反対なんですね。

それはさておき、２７号線上で舞鶴市の出口は、真倉（まぐら）地区ですが、この一つ手前（北側）が十倉（とくら）地区になっています。

本地図は「地理院地図(GSI Maps)」から編集。

この地区は、舞鶴市となる前は、「田辺」（現在の舞鶴西地区になります。）と言われていました。

この二つの地区の氏神さん、「山崎（やまざき）神社」というのが今回ご紹介する神社です。実際真倉地区と十倉地区が接する国道沿いに別名山崎という地名（国道にも山崎橋というのがあります）から、近代になって、通称山崎神社と言われるようになったとのことですが、古くは「砧倉（とうくら）神社」という名前だったとの話もあります。

山崎神社鳥居

さてこの山崎神社ですが、国道のすぐ東側の脇に鎮座しておられ、国道からほんの数歩入ったところに石造りの鳥居があります。鳥居には掲額がかかっていて、何やら文字（たぶん神社名）が彫刻してあるようですが、木目と重なって残念ながら判読できませんでした。

参道（といっても意外と短いです。）を進んでいくと、石灯籠、狛犬がそれぞれ両側にあり、そしてお宮に至っています。

山崎神社参道

お宮の境内北側には、一棟の境内社があり、「九社明神社」、「當勝社（まさかつしゃ）」、「大川社」と三神が祀ってあります。

お宮は、ご本殿（神殿）を覆屋（おおいや）で保護した形の舞鶴によくあるパターンの構造となっていますが、こちらの覆屋は、神殿の保護が目的というよりも、神殿と一体化した上屋（うわや）といってもよい建物で、正面から見ると神殿と見まがうほど立派な建物になっていて、正面の彫刻も素晴らしいです。

山崎神社の上屋正面

千木（ちぎ）は小さく、勝男木（かつおぎ）も細いのですが、ちゃんと神社の造りを備えています。

千木は外そぎ（先端が上方に向かって尖っている形）であることや、勝男木が３本と奇数であることなど、ご祭神は男神様か？

そして鳥居は「明神型（みょうじんがた）」（笠木の両端が上方に反っています。）、上屋の構造は「妻入り」（屋根が三角に見える側に入口があります。）であることなどは、出雲系の神様のようにも思われます。

山崎神社の上屋側面

神殿を覗いてみますと、木造の「流れ造り」ではないかと思われましたが、残念ながらよくわかりませんでした。

その神殿には「一宮大明神（いちのみやだいみょうじん）」と表記された掲額があります。

「一宮大明神」と称するからには、何らかの神社群を代表するイメージがあると思うのですが、境内社の中に「九社明神社」というのがありますので、おそらくこの付近に九つ、あるいはそれ以上の明神社があり、田辺地区への入口である真倉・十倉のこの神社が、一宮大明神と呼ばれるようになった・・・？ということではないでしょうか。

山崎神社ご神殿（上屋内）

そういったことを著した文献も散見されます。

神社の前の国道に「一宮神社前」という道路標示もあります。

さて、肝心の山崎神社の御祭神は、「天照大神荒御魂（あまてらすおおかみあらみたま）」です。

この神様は、現在伊勢神宮内宮の祭神と同一神ですが、「荒御魂」は、神様の荒々しい側面、荒ぶる魂とされています。神様は、「和御魂（にぎみたま）」と荒御魂との両面性を持っておられ、天照大神も、素戔嗚尊（すさのおみこと）との誓約（うけい）の際に、髪の毛を角髪（みずら）（髪を耳のあたりで束ねた男性の髪型）に結いなおし武装して対峙した。つまりこれが荒御魂の面の顕現です。また崇神天皇（すうじんてんのう）の御代、大物主神（おおものぬしかみ）のお怒りにより干ばつ・疫病が襲った話なども、大物主神の荒御魂の現れでしょう。

余談ですが、仏教におけるお仏様にも荒ぶる面があって、右手に剣、左手に羂索（けんざく）（罠のような縄）をもって怒髪天を抜く憤怒の形相で衆人を救うといわれる不動明王も、慈悲ある仏の一面だそうですね。

天照大神は、日本国の天皇家の祖神で、国民の総氏神とされる太陽神ですが、ご本名を大日霊女貴尊（おおひるめむちのみこと）、諡号（おくりな）を「撞賢木厳御魂天疎向津毘売尊（つきさかきいつのみたまあまさかるむかつひめのみこと）」称されます。

つまり、山崎神社は、格調高い神社と言うことになります。

ちなみに、境内社の「當勝社」の御祭神は、天忍穂耳尊（あめのおしほみみのみこと）、諡号を「正哉吾勝勝速日天之忍穂耳尊（まさかあかつかはやひあめのおしほみみのみこと）」と申され、大日霊女貴尊の御長男で、五男三女のなかでは活躍が地味な方ですが、立派な諡号があることからしても、長男として母神様や弟妹神様をしっかりと支えておられたのではないでしょうか。

日向の北の方面を治めておられたようです。

大川社は保食の神様で由良川沿いの大川地区にある大きな神社で、舞鶴市内の多くの神社に境内社として祀られています。

ところで、先に、神社上屋の構造からは、出雲系男神様の気配が感じられると申し上げましたが、御祭神が「天香護山尊（あめのかごやまのみこと）」（「天香山尊（あめのかやまのみこと）」あるいは「高倉下尊（たかくらじのみこと）」）ではないかという説もあるようです。

この神様は、出雲系「饒速日尊（にぎはやひのみこと）」と「三炊屋姫（みかじきひめ）」御二男にあたられますので、神社外見上からは符号することになります。

神社の御祭神は、時代により変わりますが、建物建て替えの際でも、構造はなかなか変えられないのではないかというのが筆者の持論です。

山崎神社の境内の北寄りには「まいづる茶屋」というレストランがあります。

お店の人に聞いたら、「十倉地区の氏子さんから敷地の一部を借り受けて店をやっている。」とのことでした。

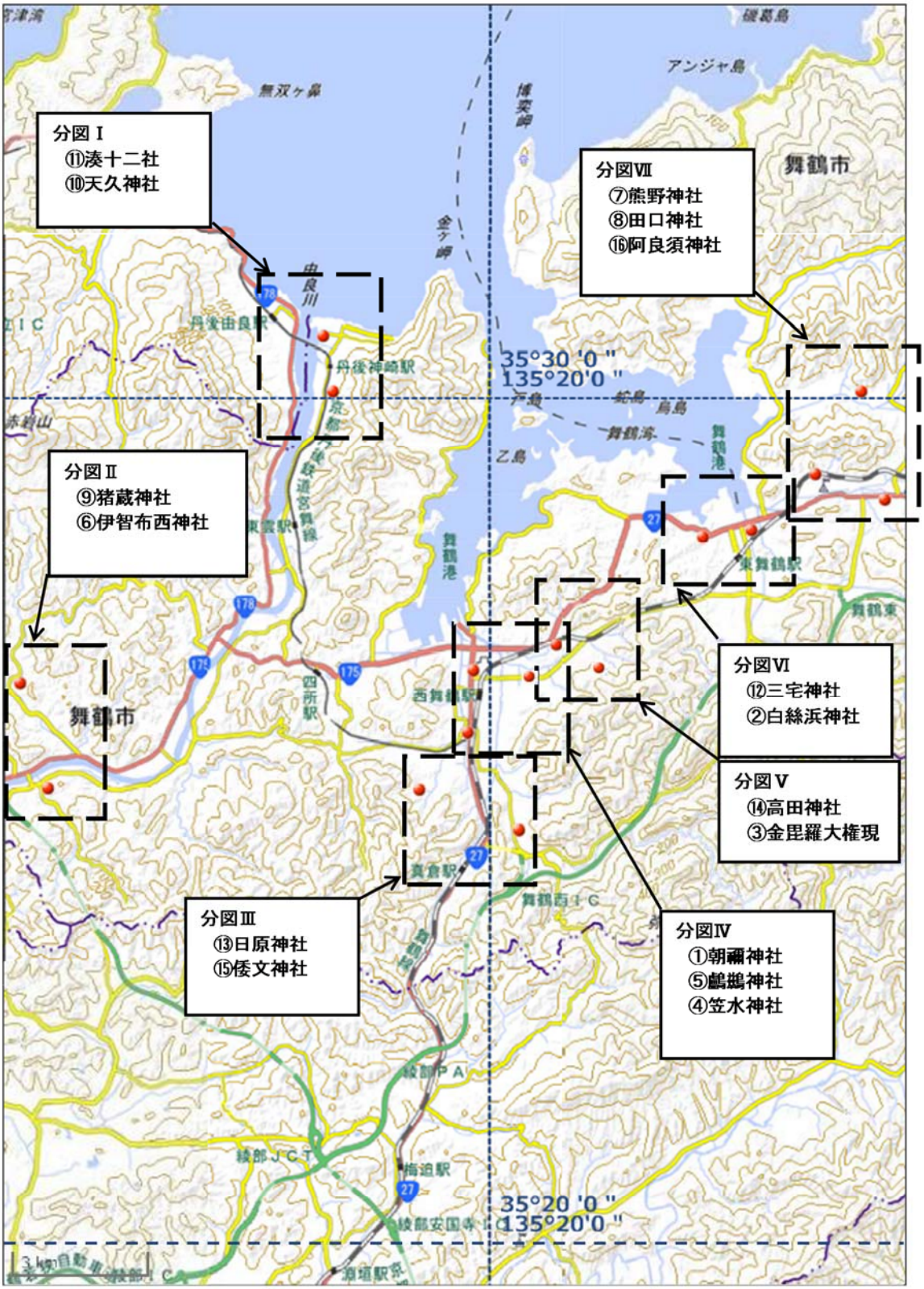
※　本稿の神社名「砧倉」については、真倉地区在の嵯峨根一正氏から呼び名を教えていただきました。

資料

「舞鶴の神様たち」シリーズ

シリーズ No.	表　　題	会報No.	紹介の神社名	地図番号・住所	
15	舞鶴の神様たち （朝禰神社）	（第119号）	朝禰神社	①	624-0906　舞鶴市倉谷桧谷13
14	舞鶴の神様たち （白絲浜神社）	（第118号）	白絲浜神社	②	625-0036　舞鶴市浜520
13	舞鶴の神様たち （金毘羅大権現）	（第116号）	金毘羅大権現	③	624-0903　舞鶴市天台
12	舞鶴の神様たち （笠水神社）	（第115号）	笠水神社	④	624-0821　舞鶴市公文名83
11	舞鶴の神様たち （鵜葺草葺不合命）	（第114号）	鷽鵜神社 （「うの森神社」と読む）	⑤	624-0853　舞鶴市南田辺小字二の丸8
10	舞鶴の神様たち （武内伊智布西神社）	（第113号）	伊智布西神社	⑥	624-0124　舞鶴市桑飼下杉ケ迫216
9	舞鶴の神様たち （泉源寺の熊野神社）	（第112号）	熊野神社	⑦	625-0026 舞鶴市泉源寺小字堂ノ奥991
8	舞鶴の神様たち （田口神社）	（第111号）	田口神社	⑧	625-0005　舞鶴市朝来中1ケ683
7	舞鶴の神様たち （猪蔵神社）	（第109号）	猪蔵神社	⑨	624-0118　舞鶴市西方寺馬場135
6	舞鶴の神様たち （天久神社）	（第108号）	天久神社	⑩	624-0963　舞鶴市油江上路
5	舞鶴の神様たち （神崎「湊十二社」）	（第106号）	湊十二社	⑪	624-0961　舞鶴市西神崎湊新403-2
4	舞鶴の神様達 （式内三宅神社）	（第105号）	三宅神社	⑫	625-0080　舞鶴市北吸糸212-5
3	舞鶴の神様達 （式内日原神社）	（第104号）	日原神社	⑬	624-0831　舞鶴市女布日原353.354
2	舞鶴の神様達 （式内高田神社）	（第103号）	高田神社	⑭	625-0912　舞鶴市上安中イナキ899
1	舞鶴市の神様たち－２ （舞鶴市今田倭文神社）	（第101号）	倭文神社	⑮	625-0813　舞鶴市今田津ノ上1010
1	舞鶴市の神様たち	（第100号）	阿良須神社	⑯	625-0020　舞鶴市小倉フル宮13

※本地図は「地理院地図(GSI Maps)」を使用、編集している。

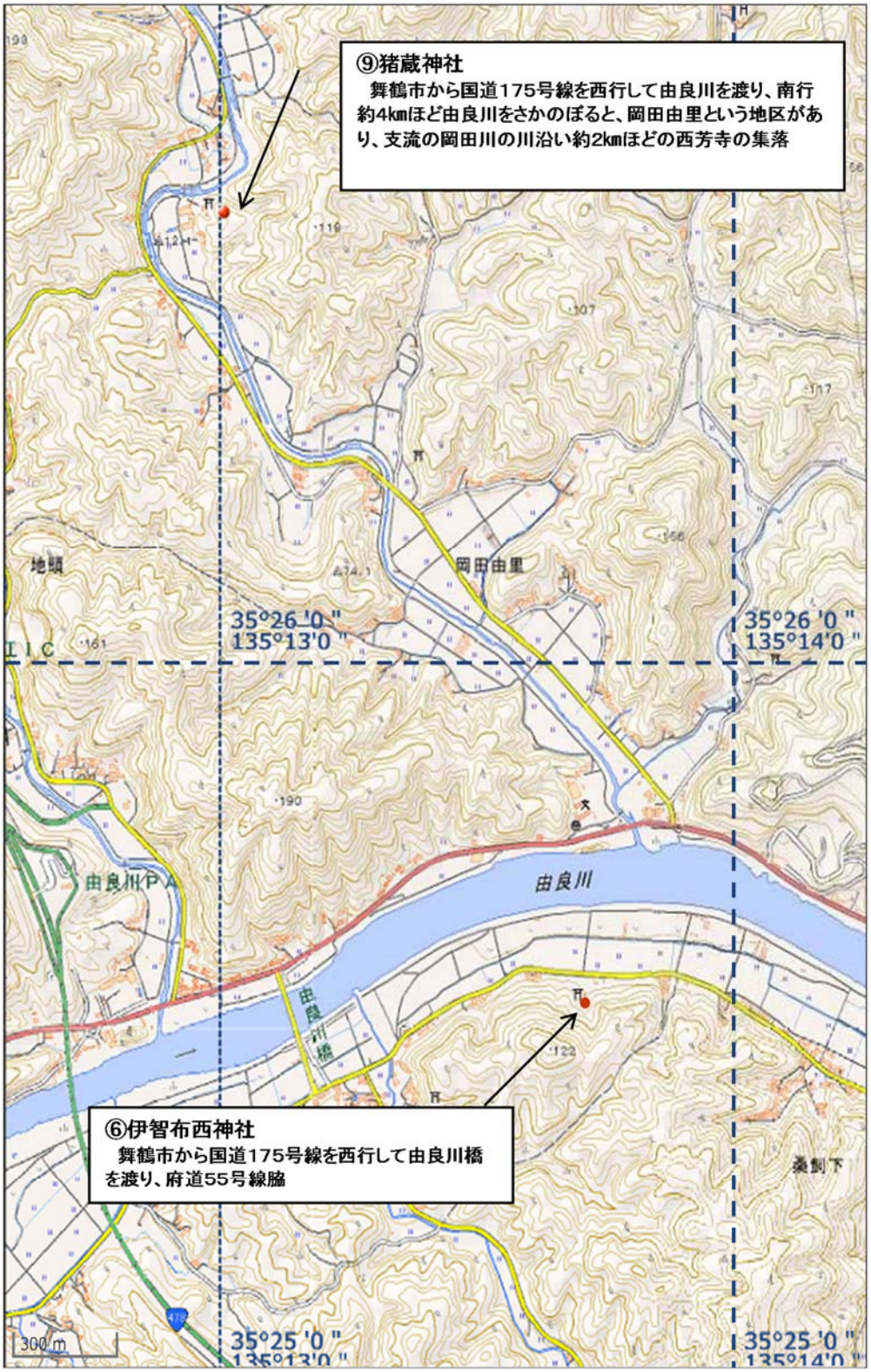


「舞鶴の神様たち」
舞鶴市内　神社位置図

※本地図は「地理院地図(GSI Maps)」を使用、編集している。

「舞鶴の神様たち」 分図Ⅰ

※本地図は「地理院地図(GSI Maps)」を使用、編集している。



「舞鶴の神様たち」分図Ⅱ

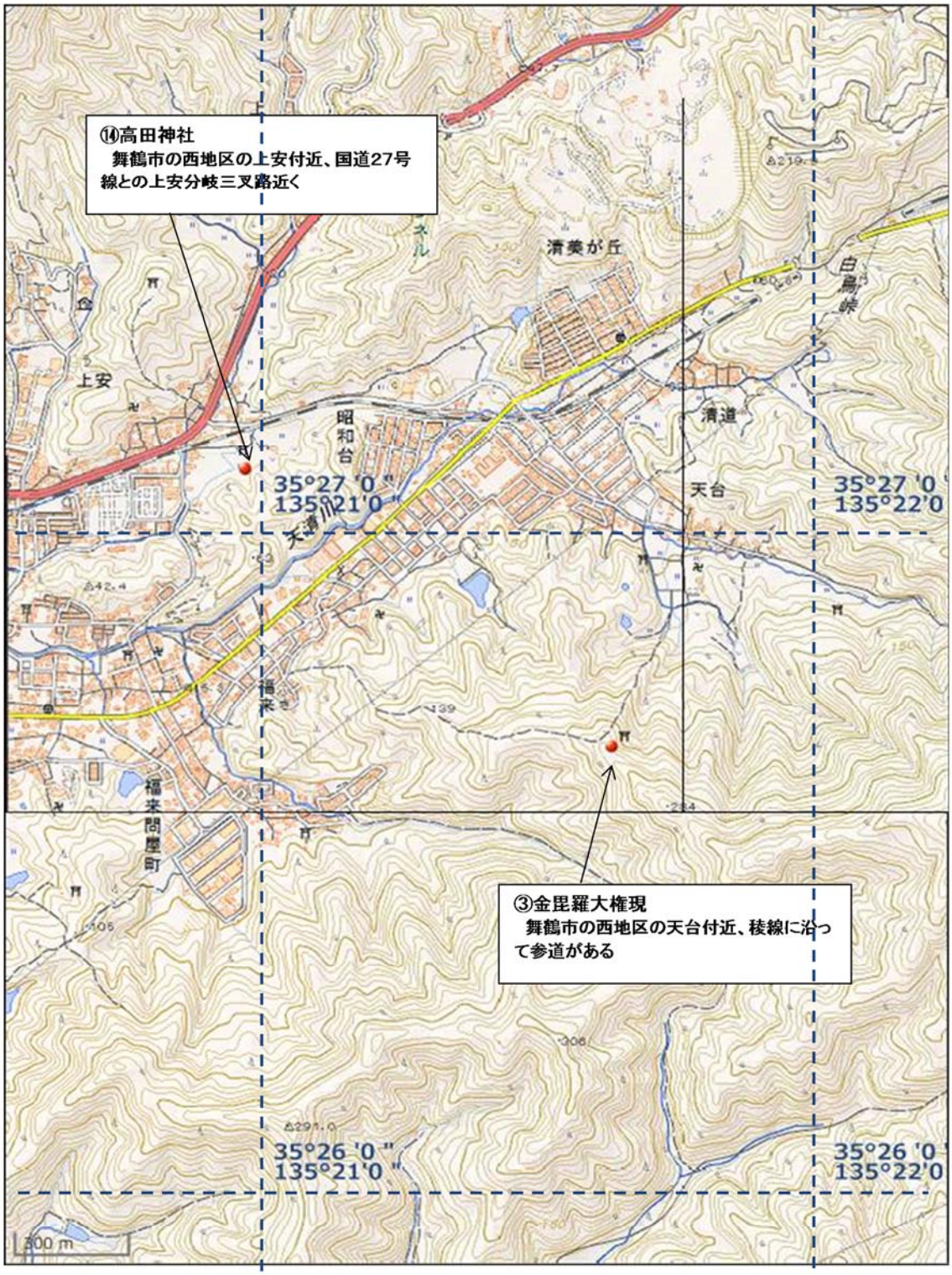
※本地図は「地理院地図(GSI Maps)」を使用、編集している。

「舞鶴の神様たち」 分図Ⅲ

※本地図は「地理院地図(GSI Maps)」を使用、編集している。

「舞鶴の神様たち」 分図Ⅳ

※本地図は「地理院地図(GSI Maps)」を使用、編集している。



「舞鶴の神様たち」 分図Ⅴ

※本地図は「地理院地図(GSI Maps)」を使用、編集している。

「舞鶴の神様たち」 分図Ⅵ

※本地図は「地理院地図(GSI Maps)」を使用、編集している。

「舞鶴の神様たち」 分図Ⅶ